ENIX ORIGINAL NOVELS
野村宏平
ピースランド殺人事件
―動物からの贈り物―
エニックス文庫

ここは、平和で静かな動物たちの楽園、その名もピースランド。
ある日、村一番の富豪、キタキツネのゴン吉が何者かによって殺された。彼の死にかくされた真相とは何か。そして、被害者の息子が見た、金色パンダの正体とは……。
謎(なぞ)が謎を呼び、物語は意外な方向へ展開し始める。真相の究明をめぐり、動物たちが繰り広げる珍騒動の数々……。軽妙な笑いとペーソスにあふれたシニカル・ミステリー。

イラスト・いなもといくえ

エニックス文庫

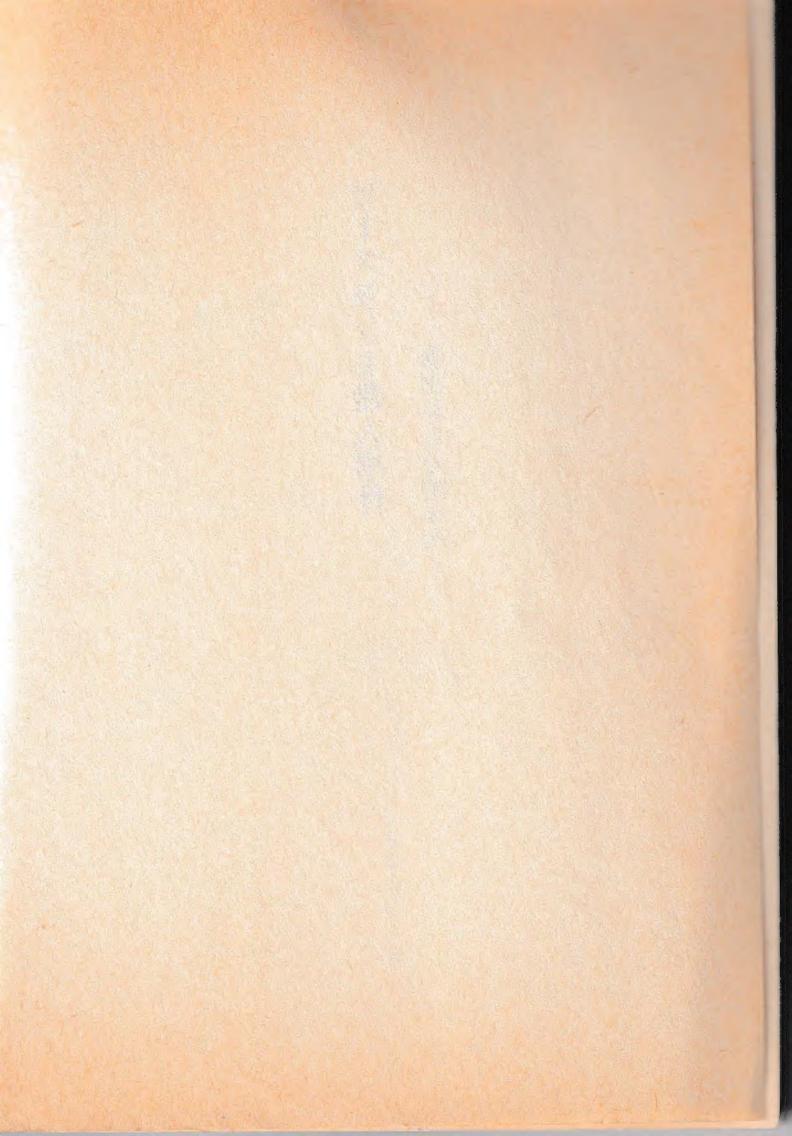
ピースランド殺人事件

——動物からの贈り物——

野村宏平

ENIX

イラスト／いなもといくえ

ピースランド殺人事件

——動物からの贈り物——

目次

第一章　殺人（？）事件発生！

　ピースランドの夜が明けた。
　木々に響く、小鳥たちのさえずり。
　はてしなく広がる草原の彼方、東の山あいから顔を現した黄金色の太陽が、草花の上できらめく朝露をゆっくりとかわかしていく。
　タンポポがそよ風に揺れる河原では、気の早いアライグマの親子が仲むつまじく洗濯を始めていた。
　のどかである。じつにおだやかな朝の光景である。
　今日もまた、平穏無事な一日が送れそうだ。
　と思いきや、突然、耳をつんざくばかりの大声があたり一面に響きわたった。
「たいへん、タイヘン、大変よー！」
　見れば、一匹のウサギがエプロンをなびかせながら、ものすごい勢いで野原を突っきって走ってくる。
　速い！　まさに脱兎の勢いとはこのことだ。

「お、お母さん、なに、あれ……」
疾風のごとく、あっという間に目の前を横切っていったウサギを見送りながら、子アライグマがボーゼンとした表情で母親に聞いた。
「あんれまあ、ありゃ、ウサギのピンキーじゃないけ？　あんなにあわてて、いったい、どこいくんじゃろうね……」

「たいへん、たいへん、たいへん！」
ピンキーは、樫の木の下に建っている小さな家の前までくると、ようやく疾走をやめて、そのドアをドンドンドンとたたいた。
「なにやってんのよ、おいどん。早く出てきてよ、大変なんだから！」
あいかわらず大声でわめくピンキー。身体に似合わず、このピンキーときたら、とにかく声だけは大きい。
「だれだ、いったい？　こんな朝早くから……」
ドアが開いて、姿を現したのは、一匹のセントバーナード犬だった。長身に上質のナイトガウンをまとい、なかなかダンディーな雰囲気をただよわせている。彼は、ドアの柱にひじをついてよりかかると、ピンキーを見てニッコリ微笑んだ。

「やあ、ピンキーか」
「やあ、じゃないわよ、おいどん。とにかく大変なんだから、すぐきて！」
ピンキーはせわしなさそうに、おいどんのガウンのそでを引っ張った。並んで立つと、ピンキーとおいどんの身長差はかなりある。小柄なピンキーは、おいどんの股の下にスッポリ入ってしまうくらいだ。
「まあ、落ち着け、ピンキー。大変、大変っていっても、いったいなにがあったのかわからないじゃないか」
おいどんはあくまでも余裕の笑みを浮かべながら、ピンキーをマイルドな口調で制した。
「落ち着いてる場合じゃないんだったら！」
「人間、いや、動物はいかなるときでも落ち着きを失ってはいけないよ、ピンキー」
そういったとき、おいどんの口から思わずあくびがもれた。
「ふあわん」
一生懸命ダンディーを装っていても、身体は正直である。眠気まではかくせない。
「いや、失敬」
おいどんはあわてて口を押さえたが、ピンキーのいらだちはよけいにつのってしまったようだった。
「なに、のんきそうにあくびなんかしてるのよ。とにかく大変っていったら大変なの！」

「だから、なにが……？」
「もうッ、そんなことまでいちいち説明しなくちゃわからないの？　ゴン吉さんが殺されたのよ！」
それを聞いて、おいどんの余裕もふっとんだ。両目をまん丸に見開き、ダランとたれ下がっていた両耳がピーン、と奮い立つ。
「な、なんだってェ？　あの、キタキツネのゴン吉さんが？」
「そうよ、だから早くきて！」
「そ、そりゃ大変だ！」
「だからさっきから、大変っていってるじゃない、もう！」

ここピースランドは動物の国である。名前が示すとおり、さまざまな動物たちがのんびりと平和に暮らす国。とくに、その中の一角、この「草原の村」では、ここ数年間というもの、争いごとなど起こったためしがない。
それだけに殺人事件――いや、正確には殺狐事件といったほうがいいのかもしれないが、まあ、人間の世界の慣習にしたがって殺人事件と呼んでおこう――が起こるなんて、この村に暮らす動物たちにとっては事件も事件、天地がひっくりかえるほどの大事件だった。

しかも、殺されたゴン吉というのは、作家であり、この村ではいちばんの富豪として知られていた。彼の書いた小説は、ペリカンの運送屋によって、ピースランド全域に配られ、人気を集めている。そんな有名動物が何者かに殺されたというのだから、噂はあっという間に村中に広まり、事件の起こったゴン吉の家のまわりにはたくさんの野次馬が集まってきた。

「いったい、なにがどうなっておるんだ？」

「なんでも、手足を八つ裂きにされてのバラバラ殺人らしいぞ」

「いや、おれが聞いた話では、胸に五寸釘を打ちこまれていたとか」

「それはちがう。死因は毒殺ということだ」

「それにしても犯人はだれなんだ？　トラか、ライオンか、ツキノワグマか？」

「たたりじゃあ、キツネツキのたたりじゃあ」

ゴン吉の家は、草原のはずれ、森を背にして建っている。いつもは静かなそのあたりも、今朝だけは、この村に住むタヌキやイノシシ、ムササビなどの動物たちがわんさと押し寄せて、いやはや大変な騒ぎである。

「ほら、こっちよ。早く、早く」

その人込み、いや、動物込みをかき分けて、スーツに着替えたおいどんが、ピンキーにせきたてられながらやってきた。

「よっ、大統領！」

「待ってました、名探偵おいどん！」
とたんに、あちこちから歓声が上がる。
おいどんは、この村で唯一の警察官なのである。もっとも、いままでは事件らしい事件など起こったことがないので、今回が事実上の初仕事ということになる。
野次馬の波をかき分けて進んでいくと、ようやくゴン吉の家が見えてきた。木造の平屋建てだが、堂々たる構えの門柱を持ったお屋敷である。ただ、ここしばらく手入れをしていないとみえ、傷ついた壁や生い茂った雑草が、家全体にさびれた印象を与えているのが残念だった。
「わたしが部外者を中に入れないようにしておいたの。現場を荒らされちゃ困るでしょ」
ピンキーのいうとおり、家のまわりにはロープが張りめぐらされ、門のところには、「立入禁止。中に入っちゃダメッ！」と書かれた紙が貼ってある。
「なかなかやるじゃないか」
おいどんが微笑んだ。着替えをすませてここへくるあいだに、冷静さを取り戻すことには成功していた。なにしろ、警察官としておいどんの真価が初めて問われる事件である。村の動物たちを前にして、ぶざまな様子を見せるわけにはいかなかった。
「これでも名探偵の名助手のつもりなんだから」
ピンキーも得意気にこぶしを握ってみせる。とはいっても、おいどんがピンキーに助手を

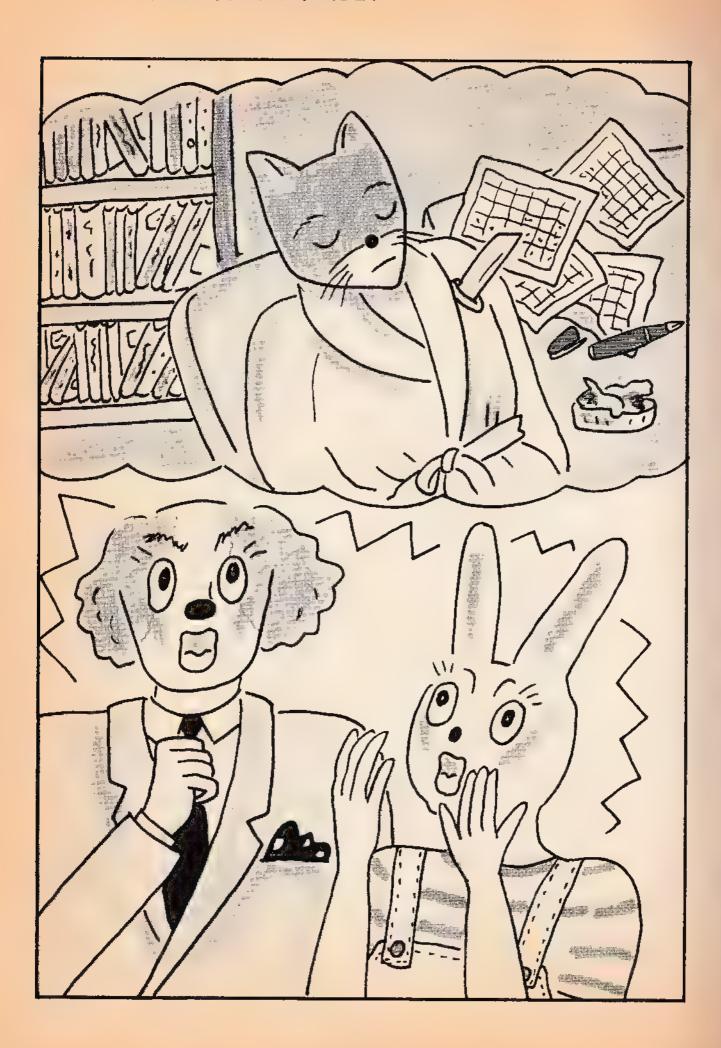
命じたわけではない。好奇心旺盛なピンキーが、勝手にそう思いこんでいるだけである。だいいち、ピンキーはまだ、動物高校の三年生だった。
「さてと……」
おいどんはロープをくぐって敷地内に入ろうとした。そのときである。野次馬の中から、いきなりミミズクのおばあさんがかけ寄ってきて、彼の手をぎゅっと握りしめた。
「おいどんさん、こんなときのために、あんたを選んだんだからね。がんばってくださいよ」
「ええ」
思わずおいどんの顔がほころんだ。
「安心してください、おばあさん。このおいどんに解決できない事件はありませんよ。まあ、犯人は近日中に逮捕できるでしょう」
おいどんは、野次馬たちに向かって、ポーズをキメてみせた。
野次馬たちのあいだからいっせいに拍手がわき起こる。
「期待してまっせ!」
「頼んだぞ!」
しかし、それでいい気になったのがいけなかった。おいどんは、すっかりロープのことを忘れてしまったのである。スーツの裾をひるがえして、さっそうと家のほうに振り返ったお

いどんは、ピーンと張ってあった太いロープにもろに身体をぶつけてしまった。
ズデーン！
ロープに跳ね返されたおいどんは、派手な音をたてて、あおむけにひっくりかえった。
拍手の音がピタリととだえた。野次馬たちは一様に口を開けて、思いもよらなかった目の前の出来事を見つめている。
「な、なんとまあ……」
ミミズクのおばあさんはどうしていいかわからず、ただおろおろと足元のおいどんを見下ろすばかり。
「お、おいどん、なにやってんのよ」
ピンキーがあわてて助け起こそうとするが、おいどんはなかなか立ち上がれない。
「うーん……」
おいどんが立ち上がったのは、倒れてから三十秒以上も経過したあとだった。見るからに痛そうに後頭部を押さえている。
「だ、大丈夫じゃろうか……」
動物たちのあいだから不安そうな声がもれる。
その声を聞いて、おいどんはみんなのほうを振り返り、ぎこちなく手を振ってみせた。
「み、みなさん、心配はいりません。どこにもケガはありませんから。ははは……」

しかし、無理に平静をとりつくろっているのは、だれの目にも明らかだ。
「まったくドジなんだから。さっ、早く中へ」
ピンキーに手を引っ張られ、四つんばいになってロープをくぐったおいどんは、ようやく家の中へ入っていった。
おいどんの姿が家の中に消えると、とたんに動物たちからざわめきが起こった。
「わしらが心配していたのはケガのことじゃなくて……、のう？」
「あの男を警官に選んでしまって、本当によかったんじゃろうか……」
「まったく、先が思いやられるわい……」

ゴン占の家は、中に入ってみると、その広さがよくわかった。長い廊下の両側にいくつも部屋が並んでいる。ただし住人は、ゴン占と、動物小学校に通っているひとり息子のココンだけのはずだった。三年前に妻を病気で亡くし、それ以来、たったふたりきりの生活が続いていると聞いている。
「ゴン占さんが殺されていたのは、突き当たりの書斎よ」
「うむ」
ピンキーにいわれたおいどんは、しかめっ面で返事をした。日ごろから、ダンディーかつ

ハードボイルドな生き方を信条としているだけに、先ほどの醜態は悔やんでも悔やみきれなかった。一刻も早く、立ち直る必要がある。
「ここだな」
突き当たりのドアまできて、おいどんはノブに手をかけた。
「そうよ」
ピンキーにうながされて、おいどんはノブをひねり、ドアを引く手に力をこめた。ところが、ドアはなかなか開かない。
「む……」
「どうしたのよ？」
見るとおいどんはノブを握りしめたまま、額から脂汗をたらしている。
ピンキーの心に、おいどんに対する疑惑が芽生えた。
「まさか、死体を見るのがこわいんじゃ……」
「ち、ちがう。開かないんだ」
「そんなはずないわよ。さっき、わたしがきたときはちゃんと開いたもん」
ピンキーはおいどんの横からドアを思いっきり力をこめて押してみた。
「うわっ！」
「きゃっ！」

いきなりドアが内側に開き、ふたりは勢いあまってドドッと部屋の中に倒れこんだ。
「なによぉ、ちゃんと開くじゃない！」
床に転がったピンキーがわめく。
「お、押せばよかったのか……」
ピンキーの横に転倒したおいどんは、うめき声を上げながら、そばにあった椅子(いす)に右手をかけて身体(からだ)を起こそうとした。
はやくも二度目の失敗。おいどんの立ち直りがますます遅れる。
と、そのとき、おいどんの指先になにか柔らかいものが触れた。
「うん？」
なにげなく横を見るおいどん。
目の前に、白目をむいたキタキツネの顔があった。
「うわあっ！」
思わずおいどんはピンキーに抱(だ)きついた。
「きゃーっ、なによ、エッチ、スケベ、ヘンタイ！」
「し、死体が……」
いいかけて、おいどんはハッと我(われ)にかえった。
ピンキーも暴(あば)れるのをやめて、じっとおいどんを見つめる。

「そ、そういえば、オレは、死体を見にきたんだったな」
おいどんはスーツのほこりをはたきながら、何事もなかったかのように立ち上がった。
「う〜……」
さすがにピンキーも腹にすえかねて、おいどんをにらみつけた。だがおいどんは、いつの間にか彼女に背を向けて、椅子の上の死体を調べ始めていた。
「ピンキー、見たまえ、これを」
死体を指さしながらおいどんがまじめな表情でいった。こうなったら、なにがなんでも、強引に立ち直らねばならなかった。
「なにかわかったの!」
ピンキーの口調はついきつくなる。
「胸に登山ナイフが刺さっている。死因は刺殺だ」
キタキツネのゴン吉は、ひじかけつき回転椅子にあおむけに座ったまま、冷たくなっていた。おいどんのいうとおり、バスローブ姿のゴン吉の胸からは、登山ナイフの柄がニョキッと突き出ている。ただし出血はあまり見られなかった。おそらくナイフが栓の役割をはたしているのだろう。
「そんなの見れば、だれだってわかるわよ」
「それだけじゃない。死体の顔や腕にはあちこちツメでひっかいた跡がある。ということは、

被害者と犯人はかなり争ったと考えられる」
「それも、この部屋を見ればわかるわね」
ピンキーにいわれて、おいどんは初めて、部屋の様子をゆっくりとながめ回した。
部屋はそれほど広くなかった。せいぜい六畳ほどだ。いかにも作家の書斎らしく、壁際に大きな机がひとつ。それに、本がぎっしり詰まった本棚が三つ並んでいる。ゴン吉の死体が座っている椅子は、その机の前にあった。
しかし、この部屋をひと目見てわかるのは、異様に荒らされていることだった。大きな窓ガラスは粉々に砕け、本来、壁にかけてあったと思われる額縁の絵が床に落ちている。そのうえ、原稿用紙が部屋のあちこちに散乱していた。だれの目にも、ここで激しい争いがあったことは明らかだ。
「ううむ、確かに……」
おいどんは腕を組んでうなった。
「でも、争いがあったにしては、ゴン吉さんが椅子に座って死んでいるというのは変よね」
ピンキーが首をかしげた。
おいどんの思いもピンキーと同じだった。状況から考えて、犯人の襲撃を受けた被害者は、激しく抵抗したにちがいない。それなのに、おとなしく椅子に座って死んでいるというのはあまりにも不自然だ。

「ねえ、どうしてなの？」
「それはだな……」
ピンキーにせっつかれて、おいどんは考えこんだ。
「わからないんでじょ」
「いや、そんなことはないぞ」
おいどんは、名誉を挽回するため、ここはなにがなんでも、明確な推理を披露する必要があった。
やがておいどんは、口元にニヤリと笑みを浮かべた。考えがまとまったのだ。
「答えは簡単だよ、ピンキー」
「なに？　教えて、教えて」
「まあ、そんなにあわてなさんな。順を追って話そうじゃないか」
おいどんはピンキーを手で制しながらいった。
「犯行時刻について断定はできないが、死体の硬直度から見て、おそらく深夜の二時から三時くらいだろう。そのころ被害者は、この机に向かって原稿を書いていた。すると、いきなり窓がたたき割られ、犯人が入ってきた。被害者は必死に抵抗したが、犯人の持つ登山ナイフの前に力つきた……」
「うん、そこまではわかるけど……」

「さて、ここからが問題だ。被害者が倒れたのを見て犯人は立ち去ったが、じつは、被害者はまだ死んでいなかったんだ。この登山ナイフのように、凶器自体が血を止める栓の役割をはたしている場合、刺されてからもしばらく生きているということもあり得るからね。そして、ひとり残された被害者は、最後の力をふりしぼって、椅子に座ったのさ」
「なんのために？」
「それはもちろん、犯人の名前を書き残すため。つまりダイイングメッセージだ」
「ダイイングメッセージ？」
「そう。そのためにはペンが必要だ。見てのとおり、ペンは机の上に置いてある。だから、被害者は椅子に座る必要があったというわけだ。これで理屈はとおるだろう」
おいどんは、机の上に置いてあるキャップのはずれた万年筆をさし示した。
「じゃあ、そのダイイングメッセージは、どこにあるの？」
「いや、はたして被害者にそれを書くだけの余裕があったかとなると、疑問だね」
「それじゃ、ゴン吉さんは、犯人の名前を書く前に死んじゃったっていうの？」
「おそらくね。瀕死の重傷を負ったものが、そう簡単にメッセージを残せるものではない。
……ん？」
おいどんの視線が、万年筆の横に置いてある灰皿に釘づけになった。
「どうしたの？」

「ちょっと待て。前言撤回をじなくちゃならないかもしれん」

おいどんは灰皿に顔を近づけると、中の吸いがらをかき分け始めた。そして大事そうに取り上げたのは、周囲に焦げ跡の残る二枚の小さな紙片だった。

「なに、それ？」

ピンキーがのぞきこむと、おいどんは手の中の紙片を差し出した。

一枚の紙片には「犯人」。そしてもう一枚には「金色」という文字が書いてあるのが読みとれた。

「これ、もしかして……」

「そうだ。被害者は、やっぱりダイイングメッセージを残していたんだ。しかし、犯人は心配になってもういちど、この部屋に戻ってきたんだろう。そこで、このメッセージを発見した。自分の名前が書いてある紙を見て、犯人は驚くと同時に、戻ってきてよかったと胸をなでおろしたにちがいない。さっそく犯人は、このマッチでダイイングメッセージを燃やしてしまった……」

おいどんは、机の上のマッチ箱を指さした。

「でも、ここで燃やすくらいなら、どうして犯人はダイイングメッセージを持って帰らなかったのかしら。そっちのほうが安全だと思うけど」

「それは考えちがいというものだ、ピンキー。そんな証拠物件を持ち歩いていて、途中でだ

れかに見つかったらどうする？　あるいはうっかり落としてしまうという危険性だってある。証拠になるようなものは、その場で燃やしてしまうのが、いちばん安全なのさ。それを知っている犯人は、じつに悪知恵(わるぢえ)にたけたやつといえるけどね」

「なるほど……」

説明を聞いて、ピンキーもかなりおいどんを見直し始めていた。

「しかし、それだけ周到(しゅうとう)な犯人も、このふたつの文字が焼け残ってしまったことには気がつかなかった。どんな知能犯にもミスはあるものさ」

「でも、この二文字だけじゃ、犯人を割り出すのはむずかしいわ。『犯人』に『金色』でしょ。犯人は金色の服を着ていたのかもしれないし、金色の帽子をかぶっていたのかもしれないもん」

ピンキーはうらめしそうに二枚の紙片をながめたが、おいどんは自信に満ちた表情でいいきった。

「それだけあれば充分だ」

「えーっ、本当に？」

ピンキーは顔を輝かせた。

「さっきもいったろう。瀕死(ひんし)の重傷を負った被害者が、メッセージを書くのはむずかしいって」

「――っていうと？」
「つまり、被害者はできるだけ最小限の文字数で、犯人のことを書き残そうとしたはずだ。金色の服を着てたとか、金色のものを持っていたとか、そんなまわりくどいことを書くはずがない。となると、答えはたったひとつ。犯人そのものが金色だったんだ」
「ということは……」
「犯人は、金色の動物だ！」
「わー、すごい、すごい」
いまや、おいどんの名探偵ぶりにすっかり感心したピンキーは思わず手をたたいた。
「で、金色の動物ってなに？」
「え？」
おいどんの言葉が詰まった。
じっと、ピンキーを見つめる。
ピンキーもおいどんを見つめる。
やがて、ピンキーがいった。
「そんなの、いったけ？」
「だ、だから、キリンとか、トラとか……」
さっきまでの弁舌（べんぜつ）がうそのように、おいどんの歯切れが悪くなった。

だが、ピンキーはかまわずに追い打ちをかける。
「あれは黄色でしょ。金色じゃないわよ」
「ライオンとか……」
「あれも金色とはいわないでしょ。それにライオンだったら、金色なんて書かないで、ただライオンって書けばいいいじゃない」
「そ、そうかな……」
「うん」
しーん。
「やっぱり……わかんない？」
「い、いや、そんなことはない」
おいどんとしては、ここで弱音（よわね）をはくことはできない。せっかく冷静さを取り戻しかけてきたのだ。なんとしても、警察官としての威厳（いげん）を保たなければ……。
「そうだ！　ちょっと待ってくれ」
おいどんはピンキーに背を向け、おもむろにゴン吉の死体の上にかがみこむと、鼻をこすりつけた。
クンクン。
熱心に匂（にお）いを嗅（か）いでいるのだった。

動物の世界では、指紋による捜査法というものはない。ほとんどの動物がツメを長く伸ばしているから、指紋なんかめったに残らないのである。それに、指紋よりもずっと簡単で確実な捜査法がある。

それが、匂いである。

しかも、犬のおいどんにとって、鼻をきかすことは得意中の得意だった。匂いの嗅ぎ分けにかけてはだれにも負けない自信がある。どうしていままで、そんな基本的なことを忘れていたのだろう。これで、犯人の匂いでも嗅ぎ出せればしめたものだった。

やがておいどんは、ゆっくりと立ち上がった。

「わかったの？」

ピンキーがたずねる。が、おいどんは背を向けたままでなにも答えなかった。

「ねえ？」

ピンキーはもういちど聞いてみた。どうもおいどんの様子がおかしい。

「……真犯人がわかったよ」

大きなため息をついてから、おいどんが低い声でいった。生きるのに絶望したような、暗い響きをふくんだ声だった。

「で、だれなの、それは？」

おいどんの声に気圧されて、ピンキーはゴクンとつばを飲みこんだ。

「それは……」
おいどんがゆっくりと振り返った。
「きみだ、ピンキー」

「な、なんですってぇ！」
おいどんに指さされて、ピンキーはすっとんきょうな声を上げた。
「どういうことよ、それは？」
「認めないというわけか」
おいどんはポケットに手を突っこみながらいった。表情はあくまでもまじめである。
「あたりまえじゃない！」
「ならば、しかたがない。オレの口から説明しよう」
ア然としているピンキーに、おいどんは哀しみの視線を送った。
「匂いだよ。……被害者についた匂いを嗅いでみてはっきりしたんだ。被害者の身体からはいくつかの匂いが嗅ぎ取れたが、その中でももっとも強い匂い、つまりもっとも新しいと思われる匂いは、きみのものだった。ところが、オレとふたりでこの部屋に入ってきて以来、きみはいちども死体に触れていない。それなのになぜ、死体にきみの匂いがついているのか？

考えられる答えはひとつしかない」
「それでわたしが犯人だというの？」
ピンキーは目をまん丸にして問い返した。
「そういうことだ。この答えに至ったとき、正直いってショックだったよ。しかし事実は事実だ。いくらきみが犯人でも、オレは警官としてそれを指摘しなければならない。それが、オレの仕事だからな」
「本気でわたしが犯人だと思っているの？」
「まだ、認めないというのか。これ以上、しらをきってもむだだ。証拠はかくせない。あきらめたまえ」
「……」
ア然としたままなにも答えないでいるピンキーを見て、おいどんは、その肩にやさしく手をかけた。
「どんな理由で、ゴン吉さんを殺したのかは知らない。しかし、きみもいちどはオレの助手にまでなった女だ。いさぎよく、自分の罪を認めたらどうなんだ」
「ばか」
ピンキーはすっかりしらけていいはなった。
「ば、ばかぁ？　ばかとはなんだ！」

「だって、ばかなんだもん」
「どういうことだ、それは？」
「ゴン吉さんの死体にわたしの匂いがついてたんでしょ。そんなのあたりまえじゃない」
「な、なんだとォ？」
「わたし、おいどんを呼びにいく前に、いちどここにきて、ゴン吉さんの死体にさわってるもん」
「ほらみろ、やはりきみが殺したんじゃないか」
「ちがうの！　わたしがきたときはゴン吉さんはもう死んでたわよ。それでおいどんを呼びにいったんじゃない」
「なにっ。ちょっと待て！　ということはなにか？　きみは、一回ここにきて、死体を確認してから、オレを呼びにきたと……」
「うん」
「それは本当か？」
「うん」
「どうしてそれを先にいわないんだ」
「あれ、いわなかったっけ？」
「聞いてない。そんなこと、いちども聞いてないぞ」

「そうだっけ」
「それを知っていれば、こんなまわり道をしなくてもすんだんだ」
「ということは、わたし以外にも犯人の目星はついてるってわけ？」
「あたりまえだ。そんなことがわからなくて、警官をやっていられるか。犯人は、きみの次に強い匂いをつけているやつだ。この匂いにもオレは憶えがある。被害者と同じキタキツネの匂い。そう、あれは確か、ゴン吉のひとり息子の……」
「ココンでしょ」
「そう、そのココンだよ。そいつが犯人だ。今度こそまちがいない」
「それもちがうわよ」
「なに？」
「ココンは死体の第一発見者よ。だから、匂いがついててあたりまえなの」
「それは本当か？」
「うん。それも話してなかったっけ？」
「聞いてない」
「なんだ、ようするになにも知らないんじゃない。そんなんで、犯人を指摘しようなんて、まったくあきれるわね」
「そんなことといったって、きみはなんにも話してくれなかったじゃないか」

「なによ。わたしのせいにする気？」
ピンキーがおいどんをキッとにらみつけた。思わず、おいどんはたじろぐ。
「い、いや、そういうわけでは、ないがね……」
「ほらみなさい。やっぱり自分が悪いんじゃない。だいいち、ココンはまだちっちゃな子ギツネよ。ゴン吉さんと格闘したり、殺したりできるはずないじゃない」
ピンキーがまくしたてた。
「わ、わかった、わかった。だから、発見時の状況をくわしく話してくれないか」
「それもそうね。いい？　ちゃんと聞いててよ」
「うん」
おいどんは、真剣な顔つきでうなずいた。

「わたしが事件のことを知ったのは、今朝の六時なの」
書斎の片隅に腰を下ろしてピンキーは話し始めた。
「いつもどおりお店にやってきて、開店の準備をしていると、ココンがものすごい勢いでかけこんできたのよ」
ピンキーは、ゴン吉の家の前にあるコンビニエンスストアで、夏休みの間、アルバイトを

やっている。コンビニエンスストアといっても、二十四時間営業ではなく、七時に開店し、十一時に閉店するタイプのお店だ。しかし、店員は開店より一時間早くお店に来て、準備をすることになっているのだった。

「そこでココンの話を聞いてみると、パパが殺されたって、とびついてきたじゃない。わたしは、驚いてこの部屋にきてみたわ。すると、ごらんのとおりってわけ。もしかしたら、まだ息があるかもしれないと思って、ゴン占さんに触れてみたけど、手遅れだったわ。それで大急ぎで、おいどんのところにかけつけたのよ」

「ううむ、そうだったのか……」

「それなのに、わたしのことを犯人扱いして、迷探偵もいいところだわ」

「うー、すまん。で、ココンは？」

「お店で休ませているわ。この家にひとりでおいとくわけにはいかないでしょ。それにしても、三年前、お母さんを亡くしたと思ったら、今度はお父さんまで……。かわいそう……」

「ココンは死体を発見したときの状況を話したか？」

「そこまでくわしいことは聞いてないわ。とにかく、おいどんに知らせることが第一だったから」

「そうか。とにかく、いまはココンの話を聞いてみなくちゃならんな」

「そうね。わたしが案内するわ」

ココンのいるコンビニエンスストアに向かうため、ふたりは立ち上がった。
「だけど、ココンにあまり変な質問しないでよ。さっきみたいな迷推理したら、今度は承知しないから」
「わかってるよ」
「でも、ひとつだけわかったわ」
「なにが？」
「おいどんの鼻だけは確かだってこと」
ふたりはゴン吉の家をあとにした。

第二章　おいどん、捜査開始

ピースランドの動物たちは、それぞれがいろいろな職業に就いている。
ここ「草原の村」に住む動物たちを例にあげるだけでも、タヌキの定食屋、ヒツジの洋品店、アライグマのクリーニング屋、ヤギの本屋など、その職業はさまざまだ。なかには、カモノハシのダイビングスクールなんていう変わり種もあるし、銃器店やおもちゃ屋だってある。
といっても、商店や家が一ヵ所に密集しているわけではない。彼らは、草原の中や木立ちの下、水辺など、思い思いの場所に店を開いて、のんびりと仕事をしているのだ。
でも、それで不便を感じている者など、この村にはだれもいなかった。華やかな市街地をつくることよりも、大自然の中で伸び伸びと暮らすことのほうが、彼らにとってははるかに大切なのだから。
事件の起こったゴン吉の家は広い草原の片隅に建っているが、このあたりもじつに閑散としたものである。
家の裏は深い森。近くにある建物といえば、ピンキーがアルバイトをしている小さなコン

ビニエンスストア一軒だけだ。
　ゴン吉の家を出たおいどんとピンキーは、まだシャッターの閉まっているコンビニエンスストアの裏口に回って、中に入っていった。
「もう七時過ぎてるけど、お店開けなくていいのかい？」
　ピンキーの後ろについて、静まり返った店内に入ったおいどんは、あたりをもの珍しそうに見わたしながらいった。
　広くはないが清潔な店内には、商品を並べた棚が整然と並んでおり、食料品から衣服、文房具まで、生活に必要なあらゆるものがそろっている。とくに食料品コーナーは、ドッグフードやキャットフード、ホースフードにピッグフードと、各動物別に好みの食料が分類されていて便利だった。
「少しくらい遅れても大丈夫よ。どうせ店長はまだ寝てるんだから」
　このコンビニエンスストアの店長は、イノシシの伊太郎という男である。ところが、この伊太郎ときたら、毎日昼近くまで家でゴロゴロしていて、ほとんど店には顔を出さない。店のことは、アルバイトのピンキーにまかせっきりなのだった。
「おいどん、こっちよ」
　そういいながらピンキーは、店の奥にある居間のほうへ上がっていった。ココンをそちらで待たせているのだろう。

ところが、ピンキーが呼んでも、おいどんはなかなか居間のほうに姿を現さなかった。

「？」

不審に思ったピンキーが売り場のほうへ戻ってみる。

突然、ピンキーの顔色が変わった。

怒りの表情——。

無理もない。おいどんは売り物のドッグフードのカンヅメをこじ開けて、一心にかぶりついていたのである。

「こらーっ！」

ついにピンキーの怒りが爆発した。

天地を揺るがすような大声に圧倒されて、おいどんの動きがピタッと止まった。

「ちょっと、なにやってんのよ！」

「ううう……」

おいどんが苦しそうに胸をたたきながら、ピンキーを振り返った。ドッグフードが胸に詰まってしまったにちがいない。

「食事なんかしている場合じゃないでしょ！」

「そ、そうはいっても、いい匂いがしたもので、つい。それに朝食まだだったんだ。健康のためにも、朝食はきちんととらなければ……」

「なにが健康のためよ。ちょっと目を離すとこれなんだから」
「まあ、まあ、ささいなことでそう怒らないで。さて、いくとするか」
「ちょっと待って！」
居間に向かって歩き始めたおいどんをピンキーが呼びとめた。
「うん？」
おいどんに向かって右手を差し出している。
「なんだ、この手は？」
おいどんは不思議そうな顔で、ピンキーの右手を見た。
「ドッグフード代、払ってちょうだい！」
「え？」
「え、じゃないでしょ。お店のものに手をつけたんだから、ちゃんとお金は払ってよね！」
「そ、そんな殺生な……」
「なによ、食い逃げするつもり？　いやなら警察呼ぶわよ」
「オ、オレが警察官なんだけど……」
ピンキーに強引にドッグフード代を払わされ、ふくれっ面をしながらおいどんは居間に上

がった。
四畳半ほどの部屋の片隅に、かわいらしい子ギツネが首をうなだれて座っていた。ゴン吉のひとり息子、ココンだ。確か、動物小学校の三年生だと聞いている。青いランニングシャツの胸に、大きなお守り袋を下げているのが印象的だった。
「ココン、おとなしくしてた?」
おいどんのあとから居間に入ってきたピンキーが、さっきとはうって変わったやさしい口調でココンに聞いた。
「うん……」
ココンはうなずいたが、さすがに元気はなかった。
そして、消え入るような声でいった。
「パパは……?」
おいどんとピンキーは思わず身を硬くした。
ふたりが黙っていると、もういちど、ココンがささやいた。
「パパ……、本当に死んだの……?」
今度はピンキーの顔を、まん丸の大きな瞳(ひとみ)でじっと見つめて……。
ピンキーが困った表情でおいどんを見つめた。
だが、おいどんも、なんて答えたらいいのかわからない。

しかたなく、ピンキーはココンに向き直って、静かにうなずいた。
ココンはなにも答えなかった。じっとピンキーを見つめている。
やがてピンキーは畳の上に腰を下ろすと、言葉を選ぶようにココンに話し始めた。
「ココンのパパはね、だれかに殺されちゃったの。……でも、パパを殺した犯人は必ず捕まえてみせるわ」
ピンキーは、ココンの視線を避けるように、おいどんのほうを振り返った。
「このおじさんはね、とってもえらい刑事さんなの。パパを殺した犯人を捕まえるためにがんばっているのよ。それで、昨夜のことをココンにいろいろ聞きたいんだって。……話してあげられる？」
ココンは視線をおいどんに移してしばらく見つめていたが、やがてこっくりとうなずいた。
その目に涙はなかった。泣きたくないはずはなかった。必死に涙をこらえているのだろう。
「ありがとう、ココン」
ピンキーはあたたかく微笑んでから、一歩後ろに退いた。あとはおいどんにまかせたという合図である。
「コホン」
ひとつ咳ばらいをしてから腰を下ろすと、おいどんは緊張した口調で、質問を始めた。
「まず、今朝のことなんだけどね、ココン。きみが被害者、いや、お父さんを発見したとき

のことをくわしく話してほしいんだ」
「今朝（けさ）のこと……？」
「うん」
ココンが答えるまでには、しばらく間があった。なにから話していいのか、考えている様子だった。
「今朝はね、六時ちょっと前に起きたの」
「いつも、そんなに早く起きるのかい？」
「ううん。いつもは七時くらいだよ。でも、今日はなんだか眠れなくて……」
「うん。それで？」
「起きてから、庭に出てみたの」
「庭に？　どうして？」
「……夜中に、変なものを見たから」
「変なもの？　変なものっていったいなんなんだい？」
「あのね……」
ココンは言葉をとぎらせた。自分が見たことを、本当に口に出していいのか、迷っている様子だった。
「信じてくれる？」

「ああ、信じるとも」
おいどんは力強くうなずいた。
その言葉を聞いて、ココンは決心したようだった。
おいどんの顔をまっすぐに見て、口を開いた。
「夜中、庭にね」
「うん」
「金色のパンダがいたの」
「金色のパンダ？」
おいどんとピンキーは思わず顔を見合わせた。

「金色のパンダって……」
おいどんは、もういちどココンに問い返した。信じられないといった表情をしている。
「暗くてよくわからなかったけど、パンダだったよ。夜中に目を覚まして、窓の外を見たら、パンダが庭を走ってたの。お月さまに照らされて、金色にキラキラ光って、きれいだった」
「本当に……？」
おいどんが疑わしそうに聞くと、ココンは口をとがらせた。

「本当だよ。信じるっていったじゃないか！」
横で見ていたピンキーがおいどんを突っつく。
「だめじゃないの、おいどん」
ピンキーにいわれて、おいどんは気を取り直した。
「そ、そうだったな。……疑ったりして悪かった。うん、わかった。金色のパンダがいたんだ。で、それは夜中の何時ごろだったか、覚えているかい？」
ココンは首を振った。
「わかんない。それからまたすぐに寝ちゃったもん」
「そうか……」
ココンが金色パンダを見たのは、夢うつつの中での出来事のようだ。しかし、おいどんにはどうしても引っかかるものがあった。
「ココン、ちょっと聞くけど、どうしてそんな夜中に目が覚めたんだい？」
「なんか、大きな音が聞こえたような気がしたから」
「大きな音？　どんな音だった？」
「よくわからない。夢の中で聞いたから」
「起きてからはなにも聞こえなかった？」
「うん」

どうやら夜中の件については、それ以上ココンから聞き出せることはなさそうだった。おいどんは話題を変えることにした。

「話をもういちど朝に戻そう。朝起きてから、ココンは庭に出てみたんだったね」

「うん。金色のパンダが走ってたあたりを見ようと思ったの」

「なにか見つかったかい？」

「なんにもなかった。でも庭から、パパの書斎の窓が割れているのが見えたんだ」

「そうか、それで？」

「どうしたのかと思って、窓から中に入ってみたの」

「ケガしなかったか？」

「平気だった。それで中に入ってみたら……、パパが……」

ココンは顔をうつむけた。父親の死体を発見したときのことが頭に甦ってしまったようだ。必死に涙をこらえているのがわかった。

「大丈夫？　ココン……」

ピンキーが心配そうにココンの顔をのぞきこんだ。

しばらくたって、ココンは大きく首を振って、顔を上げた。

「うん。ぼく、泣かないもん」

ココンの目は真っ赤になっていたが、涙は浮かんでいなかった。

「えらいぞ、ココン。さあ、続きを話して……」

ココンは大きくうなずいた。

「書斎(しょさい)に入ってみたら、パパが机にうつぶせになっていたの。最初は寝てるのかと思った」

ココンがそこまでいったとき、おいどんが話を制した。

「ちょっと待って、ココン。お父さんは、机にうつぶせになっていたのかい？」

さっき、おいどんが書斎の捜査をしたとき、ゴン吉の死体は、椅子(いす)の背にもたれて座っていた。ココンのいうように机にうつぶせになってはいなかったはずだ。このちがいはどこで生(しょう)じたのか、もう少し話を聞いてみる必要がありそうだった。

「うん。机の上に手と頭をのせていたよ。でも……」

「でも？」

「いくら呼んでも起きないから、背中を引っ張ってみたの。そしたら……胸にナイフが刺(さ)さってた……」

そうだったのか。ココンによって、死体は動かされていたのだ。しかし、だからといってココンを責(せ)めることはできなかった。ココンは父親が死んでいるなどとは思っていなかったのだ。いくら呼んでも起きないから、揺り動かしたにすぎない。ココンとしては当然のことをしたまでである。

しかし、これでひとつの問題は解決された。

おいどんの推理によれば、ゴン吉は死ぬ直前、机に向かってダイイングメッセージを言っていたはずである。なのに、椅子にあおむけになって死んでいたのでは不自然だ。だが、ココンの説明によって、その謎(なぞ)は解(と)けたのだった。

おいどんはさらに質問を続けた。

「それからココンはどうしたんだい？」

「びっくりしてパパの身体(からだ)を揺さぶったけど、パパはなんにも返事をしてくれなかった。それで、だれかに知らせなくちゃいけないと思って、ピンキーのおねえちゃんのところにいったの」

ピンキーがうなずいた。

「ほかに動かしたところはなかったかい？」

「うん。パパ以外はなんにもさわってないよ」

「そうか。……ところで昨日は、パパはずっとひとりだったの？　だれか訪ねてきたとか、そういうことはなかったかい？」

「ずっとひとりだったよ。ぼくが寝るときも、ひとりで書斎にいたもん。それに、このごろお客さんなんて、だれもこないよ」

「そうか。ありがとう、ココン。おいどんの聞きたいのはそれだけだ。ココンのお父さんを殺した犯人は必ず捕まえてみせるからね」

おいどんは立ち上がった。

ココンの話を聞き終えてから、おいどんはもういちど、ゴン吉の家におもむいてみた。あらためて現場を調査するためである。

しかし、調査の結果はかんばしくなかったらしい。

浮かぬ顔をしておいどんはコンビニエンスストアに戻ってきた。

「ココンはどうしてる？」

「話続けて、きっと疲れちゃったのね。部屋で寝ているわ。で、なにか収穫はあった？」

すでに店を開いて、レジに立っているピンキーの問いかけに、おいどんは力なく首を振った。

「ぜんぜん。盗まれたものはなにもなさそうだし、物とりのしわざじゃないな」

「だとすれば、怨恨かしら？」

「それも考えられないんだよな。ゴン吉さんがだれかに恨まれてるなんて話、聞いたこともない」

「それもそうねえ」

「ただ、どうも引っかかるのは……」

「金色パンダ！」
ピンキーが、おいどんのいおうとしていたことを先に口に出した。
おいどんがマジな目でピンキーを見つめる。
「どう思う？」
「どう思うっていわれても……。金色パンダなんて聞いたことないし」
「やっぱりあれは、ココンの夢かな？」
「うーん、それはわかんないけど、あながち夢ともいいきれないのよね。あの燃えかすのことを考えると……」
「そう、あの『金色』という文字が、金色パンダをさし示しているとすれば……」
「ね、ぴったり話があうじゃない」
「じゃあ、金色パンダは存在する？」
「うーん、そういわれると……」
そのとき、ふたりの横でいきなり太い声が響いた。
「いい若いもんが昼間から顔をつき合わせて、なにをひそひそ話しとるんだ？」
「きゃっ！」
ピンキーが驚いて振り向くと、目の前にごっついい中年のイノシシの顔があった。
「て、店長！」

このイノシシこそ、コンビニエンスストアの店長、伊太郎であった。
「今日は早いんですね」
「あたりまえだ。ゴン吉のことで村中大騒ぎじゃないか。いくらわしでも、そういつまでも寝てられるか」
そういいながらも、伊太郎は眠そうである。
おおかた、昨夜は遅くまで酒でも飲んで、寝不足気味なのだろう。目の下の隈がそれを物語っている。
「ところで、さっき、金色パンダがどうとかいっていたな」
「なにか知ってるんですか？」
ピンキーが目を輝かせて伊太郎にとびついた。
「ああ。わしは昨夜、金色パンダに会ったぞ」
「なんですって！」
「本当ですか！」
「あたりまえよ。このわしがうそをつくわけがないだろう」
「で、何時ごろ？　どこで？」
ピンキーが伊太郎の襟元をつかんで聞いた。
「おいおい、わしを絞め殺す気か、ピンキー」

「あ、ごめんなさい、店長。それで、いつ会ったんですか？」
ピンキーが手を離すと、伊太郎は襟元をただしながらいった。
「あれは、居酒屋のクマさんのところで飲んだあとだから、夜の二時半くらいかな。ちょっと飲み過ぎちまったから、酔い覚ましにこのあたりまでブラブラ散歩してきたんだ。そしたら、ほら、そこの森の手前にな、キラキラ光るものが見えるじゃないか。なにかと思って目をこすってみると、これがパンダだったんだな。わしは大声で呼びとめたんだが、そいつはあっという間に、森ん中に消えちまった。まったく無愛想なやつだよな。おかげで気分を害して、家に帰ってから、わしはまた飲み直したよ」
「それだけですか？」
「ああ、それっきりだ」
「なんだ、会ったんじゃなくて、ただ見かけただけじゃない」
「まあ、そうもいうがな」
「それに、店長のことだから、酔っぱらって、なにかと見まちがえたんじゃないの？」
「なにいうんだ、ピンキー。こう見えても、わしの目は確かだからな」
「そうも思えないけどなあ……」
ピンキーが疑いの目で伊太郎を見ていると、おいどんが口をはさんだ。
「いや、ピンキー。伊太郎さんが見たのは、本当に金色パンダだったかもしれないよ。そこ

の森といえば、ゴン吉さんの家の真裏だからね」
「いよっ、さすがは名探偵おいどん。人を見る目がちがうね。それに、わしは金色パンダを見たって、驚きゃしなかったよ。前々から噂は聞いとったからね」
「えっ、金色パンダの噂を聞いていた？」
おいどんは思わず大声を上げた。これは思わぬ拾い物である。
金色パンダに関する昔からの噂話を聞けるなら、伊太郎の目撃談より収穫は大きいかもしれない。
「どんな噂なんです？」
「いや、わしもただ、金色のパンダがいるっていう話を聞いただけでな、くわしいことまでは知らないんだが……」
「だれから聞いたんです？」
「ほら、あの郵便配達をやっているカラスのジョージだよ。あいつは仕事がら、年がら年中、あっちこっち飛び回っとるだろう。そういう噂話にはくわしいんだ」
「カラスのジョージですね。うわー、ありがと、店長。さっ、おいどん、早くいこ！」
ピンキーはおいどんの手を引っ張ると、店から一目散に飛び出していった。
「お、おい、ピンキー、店はどうするつもりだ！」
ひとり取り残された伊太郎があわててさけんだが、もはやあとの祭り。ピンキーとおいど

んは、すでにはるか彼方にかけ去っていた。

カラスのジョージの家は、村はずれの大きな杉の木の上にあった。

おいどんが重い身体を引きずってどうにか上によじ登ると、わらで作ったベッドにジョージがあぐらをかいて待っていた。

「それで、金色パンダのことをおれっちに聞きたいってえのか?」

ふたりからいままでのいきさつを聞くとジョージは、べらんめえ口調でいいはなった。

「ええ。ぜひ」

「お願い、ジョージさん、ね、ね!」

ピンキーは、神にすがるような目でジョージを見た。

「そこまでいわれちゃあ、おれっちも教えてやらんこともねえけどよ。ただ、あいにくとおれっちも直接金色パンダを見たことがあるわけじゃねえのよ。噂に聞いただけでな……」

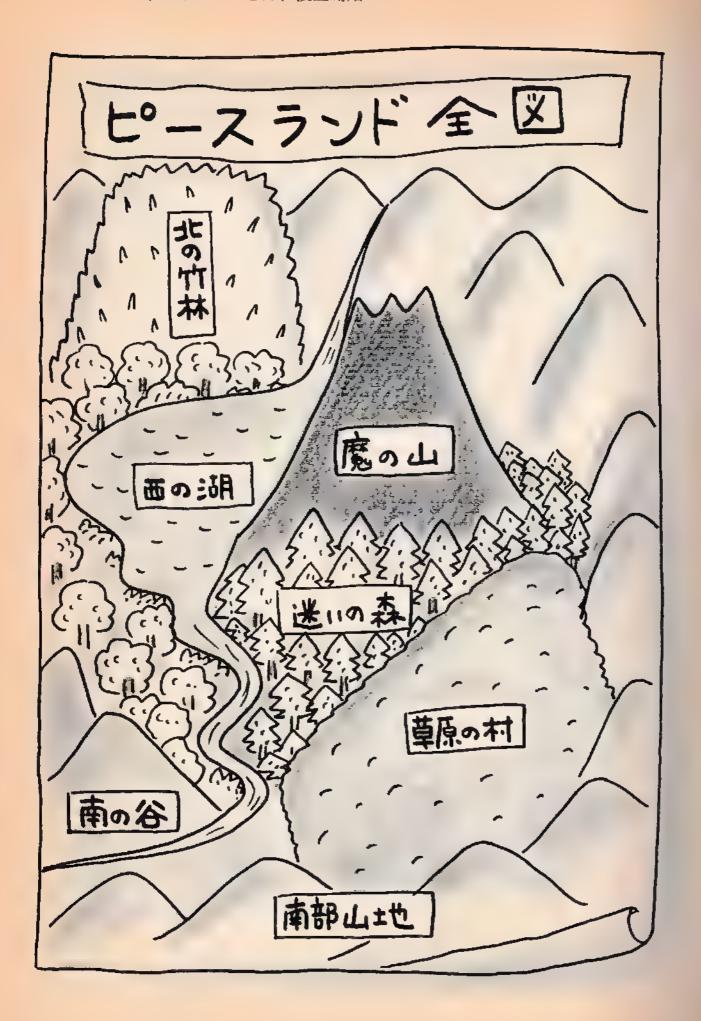
「どんな噂なんですか?」

「あれは、確か三年半くれえ前になるかなあ。『北の竹林』に金色のパンダがやってきたって、大評判になったことがあったのよ」

「北の竹林」というのは、この「草原の村」からはるか北方に位置する広大な竹やぶである。

パンダたちの格好の住み家になっているという話を、おいどんやピンキーも聞いたことがあった。
「まあ、このあたりにゃ、その評判もあまり届かなかったらしいがな。『迷いの森』の北部や、『魔の山』の周辺じゃけっこう騒がれてたみたいだぜ」
「『魔の山』というと……」
おいどんが地名をつかめないで口ごもっていると、ジョージはベッドの下から一枚の地図を取り出した。
「これが『魔の山』。で、これが『北の竹林』だな」
ジョージは、自分で作ったらしい手書きの地図の上を指さしながら説明した。
地図には、広大なピースランドの全景が描かれていた。
おいどんとピンキーは身を乗り出して地図に見いった。じつをいうと、これだけくわしいピースランドの地図を見るのは、ふたりとも生まれて初めてなのである。
ピースランドは、草原や森、湖や山など、いくつかのエリアに分かれており、動物たちは、自分たちが暮らすエリアから外へ出ることはめったにない。生活の環境もちがうし、ほかのエリアでは、いつおそろしい敵に狙われるとも限らないからだ。
だから、動物たちが普通に暮らすぶんには、ピースランド全体の地図は必要ない。本屋で売っているのも、せいぜいが「草原の村」の全体図どまりだ。ほかのエリアについては、噂

話程度でしか聞いたことがない。
「どうでい、たいした地図だろう。これを作るにゃ苦労したぜ」
ジョージは得意気にいった。確かに、郵便配達をしているジョージならではの労作だ。
「ここが『草原の村』ね」
ピンキーは、地図の一点を指さした。
地図の下方、つまり南部に草原が広がっている。ピンキーのいうとおり、これが、おいどんたちの住む「草原の村」である。
その北方には広大な森林がどこまでも続いている。これが「迷いの森」。一度迷いこんだら二度と出られないという伝説もある、うっそうたるジャングルだ。
ここには、巨大なアナコンダや狂暴なピューマが棲みつき、至るところに底なし沼や洞窟が口を開けているという。
「迷いの森」の中央には高山がそびえ立っている。これが「魔の山」。おそろしいバゲタカが徘徊しているといわれる地区だ。
「魔の山」の西方と「迷いの森」のあいだには、「西の湖」と記された広い湖がある。
地図で見ると、のどかそうに感じられるが、ここにもどんなおそろしい動物が潜んでいるかわからない。
そして、その北方にパンダたちの住む「北の竹林」がある。「迷いの森」から見るとはる

ピースランド全図
北の竹林
魔の山
西の湖
迷いの森
草原の村
南の谷
南部山地

か彼方だ。確かに、これだけ離れていると、金色パンダの噂は届きにくいかもしれない。
「それで、金色パンダはそのあと、どうなったんですか？」
おいどんが聞いた。
「それがな、どうやら死んじまったらしいんだな」
「死んだ？」
「えーっ！　じゃあ、ココンや店長が見たのは、おばけだったの？」
ピンキーが大声でわめいた。
「おい、ピンキー、落ち着いて、落ち着いて」
おいどんがあわててなだめる。
「だってえ！」
ピンキーの興奮はおさまらない。おいどんはピンキーをなだめるのはあきらめて、ジョージに噂の真偽を確かめてみた。
「それは確かなんですか？」
「まあ、それも噂だけどよ、事情通のあいだじゃ、それが定説になってるぜ」
「それは、いつごろのことです？」
「ちょうど三年くれえ前か。つまり、ピースランドにやってきて、半年もたたねえうちに金色パンダは死んじまったってわけだな」

「死因は？」
「そこまではわからねえ」
「生きているという可能性はないんですか？」
「まあ、あくまでも噂だからな、その可能性がまったくねえっていったらうそにならあ。けどよ、そのあと、金色パンダの噂はプッツリ聞かなくなっちまったわけよ。おれっちも郵便配達のついでに、一回『北の竹林』にいってみたことがあるんだが、金色パンダはいなかったぜ」
「パンダたちはなんていってるんです？」
「あいつらはなにも教えてくれねえよ。金色パンダのことを聞いても知らぬ存ぜぬの一点張りだしよ、金色パンダなんか、最初からいねえっていいやがる。まあ、なにかかくしているってえのは確かだろうぜ」
「かくす？　なんのために？」
「そんなことはわからねえ。それを知るにゃ、あいつらをとことん問い詰めてみるしかねえな。だが、パンダたちにゃ、あまりかかわらないほうがいいぜ。あいつらは特別だからな。うかつに手を出すと、こっちが痛い目にあっちまう。なんにせよ、『北の竹林』には近づかねえこった。あそこはほかの動物がいくところじゃねえよ」
ジョージの話を聞きながら、おいどんは考えをまとめていた。

いずれにしても、金色パンダが、ココンや伊太郎のつくりだした妄想(もうそう)でなかったことだけはこれではっきりしたわけだ。

しかし、それが三年前に死んでいるとなると……。

やはり、ピンキーのいうように、金色パンダの亡霊(ぼうれい)が現れたのだろうか？

謎(なぞ)は深まるばかりだった。

第三章　おいどん、旅立つ

ゴン占殺害事件が起きてから二日目の朝がきた。
午前七時三十分――。
開店まもないコンビニエンスストアに、サファリジャケット姿にリュックサックをかついだおいどんがふらりと現れた。
「どうしたの、おいどん。そんな格好しちゃって」
レジにいたピンキーが目を丸くして聞いた。
「これから『北の竹林』にいってくる」
「えーっ！」
おいどんの言葉を聞いて、ピンキーは大声を出して飛び上がった。
「なんですって！　本気なの？」
「本気だ」
おいどんは平然といいはなった。
「だって、『北の竹林』っていったら、ずっとずっと遠くなのよ」

「わかっている」
「一度入ったら二度と出られないっていう『迷いの森』を抜けていかなくちゃならないのよ」
「わかっている」
「途中にどんな猛獣が潜んでいるかもわからないのよ」
「わかっている」
「それなのにいくの？」
「そうだ。昨日、カラスのジョージの話を聞いてて思ったんだ。これは、どうしても『北の竹林』にいって、金色パンダの存在を確かめなくちゃならないって」
「それはそうかもしれないけど……。でも、ジョージだっていってたじゃない。『北の竹林』には近づかないほうがいいって」
「オレには関係ない」
「そんなことといったって……。だいいち、迷わずにいけるの？」
「ジョージに写させてもらった地図がある。ジョージにだっていけたんだ。オレにいけないわけがない！」
おいどんは力強くいいきった。思いこみの激しいタイプだ。
「でも、ジョージは空が飛べるからいいけど……」

「そのかわり、オレにはこれがあるサ」
おいどんは、自分の鼻を指さした。
「昨日、ゴン吉さんの死体からいくつかの匂い（におい）が嗅（か）ぎとれたといっただろう。そのうちのふたつは、きみとココンのものだった。だけど、もうひとつ、いままで嗅いだことのない匂いが、死体についていたんだ。それがおそらく、ココンが見たという金色パンダ、つまり犯人のものだろう。その匂いをたどっていったら、庭から裏の森へと続いていたよ。裏の森はそのまま『迷いの森』へとつながっている。まちがいなく犯人は北に向かって逃げているんだ。匂いをたどっていけば迷うこともないし、たとえ金色パンダが『北の竹林』にいなくても、その居場所を見つけ出せる可能性は高い」
「でも、こっちで調査することはもうないの？　聞きこみとか……」
「ひとつだけ、気になる点があることはあるんだ。それは、ゴン吉さんと金色パンダのつながり。この両者に、どんな接点があったのか？」
「それについて、なにかわかった？」
「昨日、あれからいろいろと村の動物たちに聞いてみたよ。だけど、金色パンダのことを知っているのは、ジョージ以外にはいなかったね。ただ……」
「ただ……？」
「ゴン吉さんは昔、射撃（しゃげき）を趣味にしていたらしくてね。射撃なんてこのあたりじゃ危なくて

できないから、森の奥に出かけていくことが多かったというんだ。ときには遠出をすることもあったらしくて、『迷いの森』のほうまで足を延ばすこともあったかもしれない。そのときに、金色パンダと接触を持ったという可能性はあるね」
「そういえば、昔、そんな話、聞いたことがあるような……。でも、変ね、ゴン吉さんの家に、射撃の道具はなかったような気がするんだけど」
「オレも家の中を調べてみたんだけど、それらしきものはなにも出てこなかった。でも、話によると、ゴン吉さんは三年くらい前に、射撃をやめてしまったらしい。だから、銃なんかも必要なくなったんだろう」
「ふーん」
「そこまではわかったけど、ゴン吉さんが金色パンダのことをしゃべったのを聞いたことのある動物は、この村にはだれもいないんだ。こうなるとやっぱり、村の外に出ていってみるしかない」
「どうしてもいくの？」
「どうしてもいく」
おいどんの決心は変わらない。
「わかったわ」
ピンキーはあきらめのため息をついた。

「わかってくれたか」
「うん。そのかわり……」
「なんだ？」
「わたしもいく！」
ピンキーはきっぱりといった。

「えーっ！」
今度はおいどんが飛び上がって驚く番だった。
「なにをバカなことをいいだすんだ、ピンキー」
「だって、おいどんひとりじゃ、心配なんだもん」
「みくびってもらっちゃ困るな。オレひとりで大丈夫だ」
「でも、ひとりよりふたりのほうが心強いでしょ」
「そりゃそうだけど、『北の竹林』っていったら、ずっとずっと遠くなんだぞ」
「わかってるわ」
「一度入ったら二度と出られないっていう『迷いの森』を抜けていかなくちゃならないんだぞ」

「わかってるわ」
「途中にどんな猛獣が潜んでいるかもわからないんだぞ」
「わかっているわ」
「それなのにいくのか？」
　先ほどとは、完全に立場が逆転してしまった。
「そうよ。みんなこわがって『迷いの森』には近づかないけど、案外、たいしたことないのかもしれないわ。金色パンダだってそこを抜けてここまでやってきたわけだし、ゴン占さんだって何回か射撃にいったことがあるわけでしょ。きっと、なにもおそれることはないのよ」
「そ、そうはいってもなあ……」
「それに、わたし、おいどんの助手だもん。おいどんが困ったとき、少しでも役に立ちたいの。だから、ね！」
　ピンキーはじっとおいどんを見つめた。
「う、ううむ……」
　おいどんの心がぐらつき始めた。
　本音をいうとピンキーに一緒にきてもらいたいのはやまやまなのだ。だからこそ、まっ先にこの冒険のことをピンキーに知らせにきたのである。

しかし、万一のことを考えると、女を危険にさらすようなマネは、男として許すわけにはいかない。
今朝だって、（オレはひとりでこの冒険を決行するぞ！）と固く心に誓って、家を出てきたのだ。
「ね、連れてってくれるでしょ」
「うーむ……」
悩んだ末、おいどんは決心した。
やはりピンキーを連れていくわけにはいかない。本心はどうあろうと、こんな危険な旅に女を連れていっては、男の沽券にかかわる。女にせがまれて、ほいほいと連れていくのもしゃくだ。
よし、ここは、男らしく、きっぱり断ろう。ピンキーに、男の決心の固さを見せてやらなければいけない。
おいどんはピンキーの目を真正面から見つめた。
「だめだ、ピンキー」
「およっ」
そういったのは、おいどんとは別の男の声だった。
見事にタイミングをはずされてずっこけたおいどんが横を見ると、イノシシの伊太郎が立

っていた。
「て、店長。こんなに早くからどうしたんですか？」
ピンキーが驚いて聞く。
「わしは今日から早起きになったのだ。それよりもピンキー、旅にいくとかいっとったが、それだけはわしが許さんからな」
「ひどおい。少しくらい休暇をとったっていいじゃないですかあ」
「なにをいうか。昨日だって店をほっぽりだしおって。罰として、二週間は休暇なしだ」
「そんなあ……」
「これはわしの命令だ。さからうことは許さん」
伊太郎の決意はそう簡単に崩せそうもない。
ピンキーは懐柔作戦に出ることにした。すがるような目で、両手を合わせる。
「お願い、店長。ほんのちょっとだけ休暇をくれればいいの。そうしたら、そのあとは一週間でも三週間でも休暇なしでいいから。ね、ね！」
しかし、伊太郎は頑としていいはなった。
「どんなに頼まれても、だめといったらだめだ！」
「ぶー」
さすがのピンキーもついに音をあげたようだ。

「おいどんくん」
伊太郎はおいどんに向き直った。
「きみも男なら、こんなか弱い女の子を危険にさらすようなマネはしたくないだろう。うん？」
「は、はあ。まったくおおせのとおりで……」
おいどんは頭をかいてうなずいた。じつに情けない。
そのとき、おいどんの足元からかわいい声が聞こえた。
「おねえちゃんがいかなくても、ぼく、いくよ！」
いつの間にか、ココンがそこにいた。

「ココン！　いつからここにいたの？」
ピンキーがびっくりした表情でココンを抱き上げた。
「ずーっと前から、ここにいたよ」
ココンが小さいのと、話に夢中になっていたせいで、どうやら気づかなかったらしい。
「ねえ、おいどん。金色パンダを探しにいくんでしょ。ぼくもいく！」
ピンキーの腕の中でココンはおいどんを見ながら、元気よくいった。昨日とはうってかわ

り、すっかり悲しみから立ち直っている様子だ。
「だめだ、ココン。きみはここにいなくちゃ」
「どうして？」
「おいどんはね、ずっとずっと遠いところまでいくんだからね」
「遠くても、ぼくだいじょうぶだよ」
「途中にはね、こわいところもたくさんあるんだぞ」
「こわくても平気だもん」
「トラとかライオンとかワニとかがいるかもしれないんだぞ」
「そんなの平気だい！」
ココンはどうしてもおいどんについていくといいはっている。これは、ピンキーより強敵かもしれない。
「ね、ココン。ココンみたいな小さな子がついていったら、おいどんが迷惑するでしょ。だから、おいどんが帰ってくるまで、おとなしくここで待っててましょ」
「いやだい、いやだい、いやだいッ！」
おいどんの困った表情を見て、ピンキーが助け舟を出したが、どうやら焼け石に水だったようだ。
それでもピンキーはあきらめずに、説得を続ける。

「ダメっていったらダメなの！」
「いくっていったらいくもん！」
「いいかげんにいうことを聞きなさい！」
「やだっ！」
「ききわけのない子ね！」
「ふんっ。おねえちゃんなんかだいっきらいだいっ！」
「なんですってぇ！」
だんだん喧嘩になってきた。
「ピ、ピンキー、冷静に、冷静に……」
おいどんと伊太郎が必死になだめる。
しかし、ピンキーは完全に頭に血が上ってしまったようだ。
「もう、勝手にすればいいでしょ！」
抱き上げていたココンをついに投げ出してしまった。
「わーい、じゃあ、いってもいいんだね」
床の上をコロコロと数回転してから、見事にぴょこんと立ち上がったココンはバンザイをした。
「い、伊太郎さん」

おいどんはすがるような声を出した。
ピンキーが機嫌(きげん)をそこねてしまったいまとなっては、あとは伊太郎にまかせるしかない。
「うむ、わかっておる」
伊太郎は床の上のココンを持ち上げると、しっかり両手で押さえつけた。
「おいどんくん、いまのうちに……」
「は、はい。あとはよろしく頼みます」
リュックサックをかつぎ上げると、おいどんはそそくさと店を飛び出した。
「わー、わー、わー!」
背後から、伊太郎の腕の中で暴(あば)れまわるココンのわめき声が聞こえてくる……。

それにしても、とんだ旅立ちになったものだ。
コンビニエンスストアから二十メートルも離れていない森の入り口で、おいどんはリュックサックを降ろすと一服した。
冒険はこれからだというのに、すっかり疲れてしまったような気がする。
「ふう……」
煙草(たばこ)を吸いながら、おいどんは、あらためて心の準備を整えた。

（しょっぱなから、ペースを崩されてしまった。これではいかんぞ）
おいどんは、自分にいい聞かせた。
（いいか、これからが正念場だ。気をひきしめていかねば）
腹に力を入れる。そして、目の前の森をきっ、と見すえた。
（よし！）
煙草を吸い終わると、おいどんはふたたびリュックサックをかつぎ上げた。
ゴン吉の家の真裏。ここから深閑たる森が始まっているのだ。そして、例の匂いもこの奥へと続いていた。
（いくぞ！）
気をひきしめて、おいどんは、いよいよ森の中へと足を踏み入れた。
森の中は、鳥たちのさえずりが聞こえるだけで、ひっそりと静まり返っていた。頭上から差しこむ木もれ陽が気持ちいい。
このあたりは、まだ「迷いの森」と呼ばれる場所ではなく、村の動物たちもよく散策を楽しむのどかな森林地帯だ。木々はどこまでも茂っているが、不気味な雰囲気はまるでない。
おいどんはゆっくりと歩いた。
一時間ほど歩いたころ、突然森が終わり、視界が大きく開けた。
「おっと！」

思わず足を止めるおいどん。
一歩先は、断崖になっていた。
その崖の下には、うっそうと茂った緑の木々が、まるで大海原のようにどこまでも続いている。
これこそ「迷いの森」！
そして、その中央には、周囲を見下ろすかのような、茶色い岩山がそびえ立っている。
「魔の山」だ。
その左手の木々のあいだからは、ところどころに青い水面がきらきら輝いているのが見える。あれが「西の湖」なのだろう。
あまりにも雄大な光景に、おいどんはしばし時を忘れて見とれていた。
この樹海を越えて、あの山の先までいかなければならないのかと思うと、正直いって気が遠くなってくる。
しかし、いかねばならぬ！
おいどんは武者震いをすると、下に降りられそうな場所を探して、ふたたび歩き始めた。
やがて、ほかと比べて、斜面がなだらかな場所が見つかった。注意してみると、何者かがここを降りた痕跡がある。例の匂いも嗅ぎ取れる。
まちがいなく、金色パンダはここを降りていったのだ。

おいどんは、斜面に向かって腹ばいになると、ゆっくりと下に降りていった。多少はなだらかといっても、かなりの急斜面である。一歩足を踏みはずせば、死ぬことはないにしても、かなり痛いにちがいない。

ところが、運が悪いというか、なんというか、その心配が現実のものになってしまった。半分ほど降りたところで、ずるっと足が滑ってしまったのである。

「うぎゃあああああああああああああ～っ！」

おいどんは腹ばいになった状態のまま、斜面をズザザーッと滑り落ちていった。

みるみるうちに、足元の樹海へと吸いこまれていく。

ぐしゃっ！

崖下まで滑り落ちて、後方に一回転してから、ようやくおいどんの落下は停止した。

「うううううう～……」

しばらくはうつぶせになったままで起き上がれない。

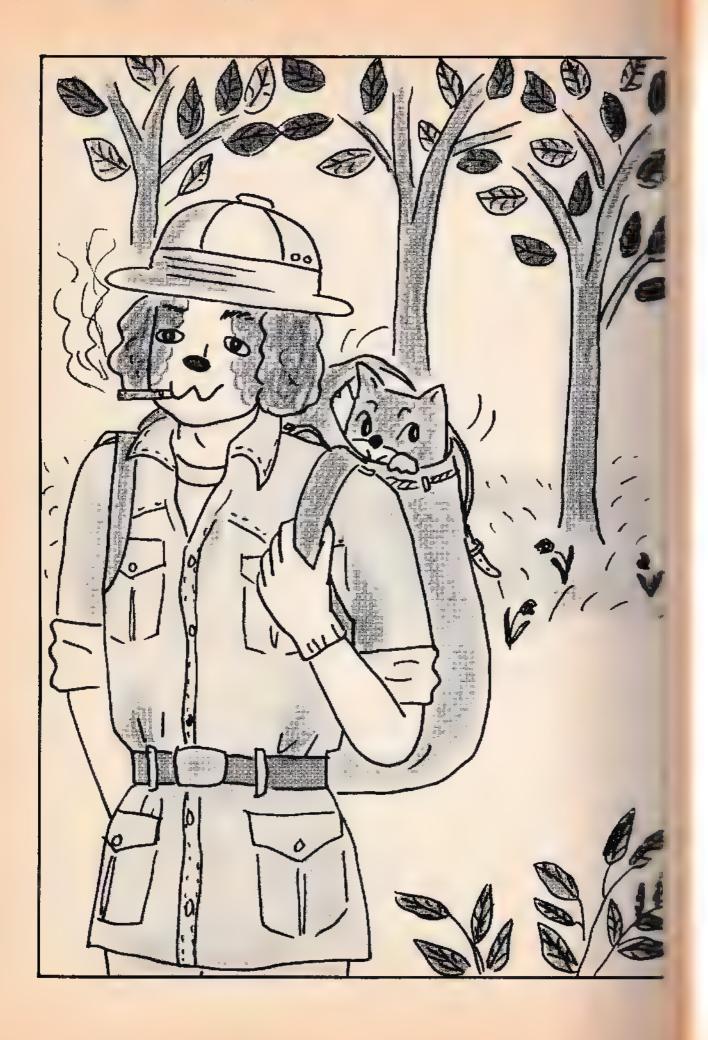
一分たった。

まだ起き上がれない。

二分たった。

まだ起き上がれない。

三分たった。

おいどんはあいかわらず起き上がれないが、背中のリュックがもぞもぞと動き始めた。
四分たった。
リュックのふたが中から押し上げられ、レーズンのような黒い鼻先がちょこんと飛び出した。
やがて、中から小さな動物がはい出してくる。
ココンだ。
完全にリュックの外へ出てしまうと、ココンは地面にぴょんと飛び降りて、左右に首を動かした。
それから、いまだに動かないおいどんの顔の横まできて、ほっぺたを右手でツンツンと突っつく。
「う〜ん」
やっとおいどんが目を開けた。
目の前で、ココンが首をかしげて自分の顔をのぞきこんでいるのが見えた。
「うわっ!」
おいどんがいきなり飛び上がる。
「コ、ココン!」
尻もちをついておいどんは、信じられないといった表情でココンを見た。

「なんで、こんなところにいるんだあ？」
ココンは黙って、リュックサックを指さした。すでにリュックはおいどんの肩からはずれて、地面に口を開けたまま転がっている。
「リュックの中に入ってたっていうのか？」
ココンはうなずく。
「いつ、どこで？」
「おいどんがぼくんちの裏で煙草吸ってたでしょ。あのとき」
（うかつだった！）
おいどんは心の中でさけんだ。
旅立つ前の心の準備を整えているあいだに、そんなことが起こっていようとは！
しかし、それにしても伊太郎はなにをやっていたのだろう。ココンのことはあれだけ頼んでおいたのに……。
まったくあの人は、きびしいようでいて、どこか抜けている。まあ、おいどんもあまりひとのことはいえないが……。
「ううむ……」
おいどんは腕を組んでココンを見下ろした。
「どうしてもオレについてくるのか？」

おいどんは気をとり直してココンに聞いた。
「うん!」
元気よくうなずいたココンを見て、おいどんはため息をついた。いまさら帰すわけにはいかなかった。
「ここまできてしまったら、しかたがないな。……わかった。オレについてこい」
「わーい!」
喜ぶココンを横目に見て、おいどんは立ち上がった。驚きのあまり、痛さはどこかに吹き飛んでしまっている。
ところが、リュックサックを持ち上げようとして、おいどんは愕然とした。
からっぽなのである!
中身がなにも入っていない。
「に、荷物は……」
おいどんがボーゼンとしていると、ココンはこともなげにいった。
「ぜんぶ捨てちゃったよ。だって、そうしないと中に入れなかったんだもん」
「な、なんだってぇ〜!」
どうりでリュックを持ち直したとき、ココンが増えたのに重さを感じなかったはずだ。
それにしても、荷物がまるごとなくなっているとは……。

「この中には、テントや飯盒や地図が入ってたんだぞぉ〜！」
「なくちゃいけないの？」
ココンはちょこんと首をかたむけて聞いた。
「あたりまえじゃないかぁ〜！」
おいどんはからっぽになったリュックサックを抱きしめて、地面に打ちしおれた。
「おいどん、泣かないでね」
ココンは、少しも悪びれた様子もなく、おいどんの肩に手をかけてなぐさめている……。

第四章　暗黒樹海「迷いの森」

おいどんは崖の下を西に向かってとぼとぼと歩いていた。その後ろをココンが元気よくついてくる。
おいどんの表情はいまだにさえない。
(うう〜。テント、飯盒、地図……)
小さな子供のやったことだし、過ぎてしまったことをいつまでもくよくよ悩んでいてもしかたがないことは、おいどんにもよくわかっている。
しかし、今夜、野宿しなければならないことを思うと、どうしても気持ちが暗くなってしまうのだ。
それでも、おいどんの鼻は例の匂いをたどるのをおこたってはいなかった。
さすがに金色パンダも「迷いの森」の奥に踏みこむことはできるだけ避けたかったのだろう。匂いは、森のはずれの崖に沿って続いていた。
「ねえ、おいどん。なんか音が聞こえるよ」
「うん？」

ココンにいわれて耳をすますと、確かに前方からさざめくような音が聞こえてくる。音は歩くにしたがってだんだん大きくなってきた。なにかがうねるような激しい音だ。やがて、突然右手の森がとぎれ、ドドドドド……という轟音が耳元でこだました。

滝だ。

左手の崖の上から、巨大な滝が落下している。

ココンがなにかいった。

だが聞き取れない。滝の音が大きすぎて話が通じないのだ。

おいどんは、ココンの言葉にはかまわずに周囲を見わたした。

滝はそのまま川となって、右手の森の中へ流れている。流れは、かなり速い。

おいどんは川辺に鼻をこすりつけてみた。金色パンダの匂いは、川に沿って下っていた。

言葉でいっても通じないことがわかっていたので、おいどんは川下に向かって指をさしてみせた。

ココンがうなずく。

ふたりは歩き始めた。

「すごかったね」

滝の音が遠ざかると、ココンは無邪気にいった。ココンにとっては、見るものすべてが新鮮に感じられるのだろう。

川沿いを歩いているうちに、前方に丸太の橋が見えてきた。匂いは橋を渡っている。
「ココン、この橋を渡るぞ」
「うん!」
おいどんは四つんばいになってそろりそろりと橋を渡り始めた。そのあとにココンが続く。
細い丸太の橋はコケでぬるぬるしている。下手(へた)をすれば、川へドボンだ。
川幅は広くないが、水深は深そうだし、流れもかなりきつい。落ちたらかなり先まで流されてしまうだろう。
おいどんはふと、いやな予感に襲(おそ)われた。さっきもそんなことを考えていて崖から滑(すべ)り落ちたのだ。
(いかん、いかん)
おいどんは、丸太を握る手に力をこめた。
ぐっ!
その瞬間(しゅんかん)、悪い予感が当たった。
「ひえっ!」
おいどんの身体(からだ)が丸太からずるっと滑り、水しぶきを上げて川に落下した。
やっぱり今日はツイテない!
おまけに次の瞬間、

「わーい!」
なにを思ったのか、おいどんとちがい、それまでスイスイと丸太の上を渡っていたココンまで、歓声を上げて川の中に飛びこんだ。
ザブン!
ココンは川に落ちるとすぐおいどんにすがりついた。だが、その顔はおびえているというより、どう見ても楽しんでいる。
「な、なにを考えているんだ、ココン」
おいどんはいおうと思ったが、水が口に入って声にならない。
「うひー!」
そんなことをしているあいだにも、ふたりはどんどん川下に流されていく……。

三十分後――。
おいどんとココンはびしょぬれの身体を川辺に横たえ、荒い息をついていた。
どのくらい流されたのかはわからない。
しかし、どうにか離ればなれにならず、ふたりとも無事に岸に着けたことだけは確かだ。
「ふーう……」

呼吸が静まってきたところで、まず、おいどんが身体を起こした。
そのとたん、
「うげっ！」
いきなり、身体のふしぶしに痛みが走った。
流される途中、何回か岩にぶつかった記憶がある。身体中、傷だらけになっているにちがいなかった。
しかし、そこは人間とちがって犬のこと、身体に柔軟性がある。動けないほどの重傷は負っていない。傷といっても、かすり傷程度だろう。
おいどんが身を起こした気配に気づいて、おいどんの足にすがりついていたココンも顔を上げた。
「くしゅん！」
一回くしゃみをしたあと、ココンはおいどんから離れると、ぶるぶるっ、と全身をふるわせて水を振り払った。
「ケガはなかったか？」
「だいじょうぶだよ」
ココンはケロッとした顔でいいはなった。
実際、ココンのほうはかすり傷ひとつ負っていないようだ。流されるあいだじゅう、ずっ

とおいどんにしがみついていたのが幸いしたらしい。
ココンは何事もなかったかのようにあたりをキョロキョロ見回して聞いた。
「ここ、どこ？」
いわれておいどんもようやく周囲を見わたす。
川の反対側を振り返ると、そこに道はなかった。
そのかわり、巨大な熱帯性の樹木がはてしなく生い茂り、地面には朽ちはてた木が幾重にも折り重なって倒れていた。
頭上には空がなかった。
見えるのは、ツタのからまる幹からタコの足のように伸びる枝と、その先におおいかぶさるように茂った濃緑の葉ばかり。
二十メートルくらい先になるともう真っ暗で、その奥にはなにが潜んでいるのかわからない。
森と呼べるようななまやさしいものではなかった。
ジャングルだ。
この中に一歩でも足を踏み入れたら最後、二度と出られなくなるのではないだろうか。
そんな思いさえいだかせてしまうほど、不気味な雰囲気をただよわせた密林だった。
「これからどうすんの？」

ココンは密林の奥をのぞきこむようにして聞いた。
「う、うむ……」
おいどんは、応うなずいてみせたが、これからどうするかなんてことは、まだなにも考えていない。
「道、わかんなくなっちゃったの？」
いわれておいどんは、あわてて頭を振った。
ココンに不安をいだかせてはいけない。それが保護者たる自分の役目だ。
「いや、そんなことはないさ、ココン。オレには自慢の鼻があるからね」
おいどんは自分の鼻の頭を指さした。
「この鼻で金色パンダの匂いをたどっていけば、どんな場所にいても決して迷う心配はないんだ」
そういっておいどんは地面に鼻をこすりつけた。
ところが次の瞬間、おいどんの顔色が変わった。
「げげっ！」
匂いがないのである。
例の金色パンダの匂いがどこにもない！
考えてみれば、あたりまえの話である。

金色パンダは、おいどんたちが滑り落ちた丸太の橋を渡っていったとしても、ここからはるか下流のこんな場所に、匂いなどついているはずがないではないか。
そんなことさえすっかり忘れていたとは、なんというかつ！
おいどんはボーゼンとその場に立ちつくした。

「ねえ、おいどん、どうしたの？」
さっきからココンが何回もジャケットの裾を引っ張っている。
どうしたもこうしたもない。
匂いがなくてはどっちにいっていいのかまったくわからないではないか。
川沿いに歩いて、橋のあったところまで戻るか？
そう思って川べりを見てみたが、とても歩けそうな道はなかった。
こうなったら、残された方法はふたつだけだ。
ふたたび川に飛びこみ、橋のあった場所まで泳いでいくか、それとも、ジャングルの中に入っていくか……。
おいどんは首をヨコに振った。
どちらにしても、自殺行為としか思えない。

「ぐぐぐぐ……」

おいどんは、心底泣きたくなってきた。

「ねえ……」

おいどんがどうするか決めかねているのにじれてきたのだろう。ココンは森の中を指さした。

「こっち、いこ」

「えっ！」

「もう、お水の中に入るの、あきちゃった。今度は歩くのがいいや」

こんなときは、子供の無邪気さがうらやましい。ジャングルに対する恐怖心はまったくないらしい。それどころか、おもしろがってなかに入っていこうとしている。

「ねえ、はやくいこ」

「う、うむ……。よし！」

ココンに臆病だなどと思われてはいけない。おいどんはつい、頭をタテに振ってしまった。

（ええい、ままよ。こうなったら、いってみるだけ！）

おいどんは先頭に立って、おそるおそる森の中に足を踏みこんだ。

いざ中に入ってみると、ジャングルは想像以上に歩きにくかった。

幾重にも折り重なった腐った木をまたいでいかなければならないし、[illegible]ところには身の丈近くある草が生い茂っている。おまけに地面はぬかるみだらけだ。
「ひえっ！」
「ぐえっ！」
一歩前進するごとにおいどんは足をもつれさせて、さけび声を上げる。
十メートルも進まないうちにふたりの足は泥にまみれ、手は木の枝や草の葉にひっかかれて傷だらけになってしまった。
それでもココンだけは少しもおどおどするところなく進んでいく。いつの間にかココンが先頭を歩くようになっていた。
「おい、ココン。ちょっと待て……」
おいどんが後ろから呼びかけてもココンはかまわずスイスイと進んでいく。身体が小さいだけ歩きやすいのかもしれない。
それに比べて、おいどんは草やぬかるみと悪戦苦闘を続けている。これでは、どっちが先導者だかわかりゃしない。
そのとき突然、前方でココンのさけび声が上がった。
「きゃんっ！」
「どうした、ココン！」

前を歩いていたココンの姿がいつの間にか見えなくなっていた。
おいどんはあわてて、声のした草むらに飛びこんでいった。
「きゃん、きゃん、きゃん！」
ぬかるみの上で泥んこまみれになりながらココンが転げ回っていた。
「どうしたんだ、ココン」
ココンを助け起こそうと身をかがめたとき、おいどんも同じようなさけび声を上げた。
「ぎゃんっ！」
首筋に冷たい感触が走った。
手を後ろに回してみる。
ぬるっ、とした小さな生物が指先に触れた。
ヒルだった。
湿った木の枝から、真っ赤なヒルがポタポタと落ちてきているのだ。
注意してみれば、地面の上には無数のヒルがあちこちにうごめき回っている。ヒルの群生地帯に入りこんでしまったにちがいなかった。
「ひえっ。こ、こりゃたまらん！」
おいどんはココンを抱え上げると、身をかがめたまま走り出した。
こんなところにいたら、いくら払いのけても次から次へとヒルが落ちてくる。

「ふう……」
ヒルのいる場所からようやく抜け出して、ふたりは倒れた大木の上に腰を落ち着けた。
「大丈夫か？」
おいどんが聞くとココンは黙ってうなずいた。
見ると、まだココンの身体の何ヵ所かにヒルがへばりついている。
おいどんはそれを払ってやりながらココンの顔を見たが、ココンの目に涙は浮かんでいなかった。がまん強い子だ。
が、突然、その目がまん丸に見開かれた。
振り返ると、目の前の木から巨大な枝がボトンと地面に落ちるのが、おいどんに見えた。
おいどんが本当に驚いたのはそのあとだった。
落ちた枝がゆっくりと動き始めたのである。
「！」
それは枝ではなかった。
巨大なアナコンダだった。
「うわあっ！」

おいどんはココンを抱き上げると、はじかれたように立ち上がった。
アナコンダは全長十メートル近くあるだろうか、その巨大な身体を波打たせて、かま首をゆっくりと持ち上げた。
「よくも昼寝の邪魔をしてくれたなあ〜」
地の底から響くような低い声でアナコンダがさけぶ。
おいどんはあわてて、身につけていた拳銃を取り出そうとした。
が、その瞬間、おいどんの顔があおざめた。
ない！　拳銃がないのである。
川に流されてしまったにちがいなかった。
まったく、ツイてないときは、どこまでもツイてない。おいどんは自分の不運を呪わずにはいられなかった。
そんなことをしているあいだにも、アナコンダは、真っ赤な口からふたまたに分かれた舌をシューシューと揺らめかせながら、こちらに近づいてくる。
「ひえーい！」
おいどんはココンを抱きしめたまま、一目散に走り出した。
あんな大蛇に巻きつかれたら、それこそ一巻の終わりだ。
ドドドドドドド……。

倒れた木の上だろうが、[illegible]だろうが、[illegible]だろうが、おいどんはただまっすぐにどんどん走った。

どこをどう走っているのか、そんなことは知ったことじゃなかった。とにかくアナコンダから逃げなければ……。

「おいどん、おいどん、おいどん……」

腕の中でココンに何回も呼びかけられて、おいどんはやっと我にかえった。

ようやく走るのをやめる。

「ぜいぜいぜい……」

ココンを降ろしたおいどんはその場にうずくまって息をついた。

「おいどん、だいじょうぶ？」

「ああ……。アナコンダは？」

「もういないよ」

どうやら、アナコンダから逃げることには成功したようだ。

しかし、あまりにもめちゃくちゃに走ったので、場所がすっかりわからなくなってしまった。

それまでは密林の中といっても、なるべく川沿いに歩くことを心がけてはいた。

しかしいまは、ここがどこいらへんなのか、まったくわからない。

周囲はあいかわらず、木々が生い茂る深いジャングル。頭上は厚い葉でおおわれ、太陽の光さえ届かないため、方角も知ることができなかった。

どうやら、完全に迷ってしまったようだ。これからどっちへ進んでいいかなんて、とても見当がつかなかった。

おいどんが途方に暮れていると、ココンが話しかけてきた。

「おいどん、おなかすいた」

(う〜、こんなときに……)

おいどんは思ったが、いわれてみれば確かに空腹である。

考えてみれば、冒険に出発してから、なにも食べていないのだった。

しかし、食料はココンが捨ててしまったため、まったく残っていなかった。

「そうだな……」

おいどんはあたりを見回しながら鼻をきかせた。

こういうとき、おいどんの鼻はじつに便利である。食べられるものとそうでないものの区別くらい、簡単に嗅ぎ分けられる。

「これなら食えそうだ」

おいどんは腐った木に生えていたキノコを数本むしりとって、ココンに差し出した。

それにしても、「迷いの森」とは途方もないジャングルである。
いくらいけども、同じような光景が延々と続くばかりで、まったく終わりが見えてこない。
もっとも、方角がわからないので、同じ場所をぐるぐる回っているだけなのかもしれないが……。
いつしか日も暮れ、周囲は真っ暗。おいどんの足もいいかげん疲れてきた。
「今晩はここで野宿だ」
おいどんは、木と木のあいだが多少広めの場所を見つけて、そこに腰を下ろした。
「ぼく、まだ歩けるよ」
ココンはあいかわらず元気である。あれだけ歩いたのに、まだ余力が残っているとみえる。
「森の中では、日が暮れたら決して歩き回らない。これが迷わないための鉄則なんだ」
おいどんはきっぱりといいきった。
(決まったな)
思えば、旅に出て、ココンに初めて示した男らしさである。もっとも、すでに迷ってしまっているのだが……。

「つまんないの」
ココンもしかたなく湿った草の上に腰を下ろした。
「さあ、早く休んで明日に備えるんだ。いいな」
「ぼく、まだ眠くないよ」
「いいから寝るんだ」
おいどんがゴロンと横になると、ココンもしぶしぶ草の上に横たわった。
最初は草の上でガサゴソ音をたてていたが、やがて静かになった。どうやら眠ったようだ。
しかし、おいどんは眠るつもりはなかった。
なにが潜んでいるかわからない密林の中である。昼間のアナコンダのようにいつ襲ってくるとも限らない。
おいどんは黙って耳に神経を集中させていた。
静かである。
ときおり風に揺られて木々のさざめく音、遠くから聞こえてくるフクロウの声。それ以外はなにも聞こえなかった。
「ねえ、おいどん……」
しばらくたってからココンがささやいた。

「うん……」
「だめじゃないか」
おいどんはたしなめたが、ココンはかまわず話を続けた。
「ママに会えるかな」
「え？」
おいどんは耳を疑った。ママに会えるかとはどういうことだろう。ココンの母親は三年前に亡くなったはずだが……。
「ママに会いたいの……」
そうか、この子は死んだ母親の幻影を追い求めているんだ。
「ココン、きみのママはもういないんだ。強く生きなければいけないよ」
かわいそうだとは思ったが、おいどんは、はっきりといってやることにした。それがココンのためになると思ったからだ。
しかし、ココンは意外な言葉を返してきた。
「ちがうよ。ママは生きているの」
「えっ？」
ココンは死んだ母親が生きていると思いこんでいるのだろうか。それとも……。
「ぼく、知ってるよ。パパがママを死んだことにしちゃったけど、本当はママは生きている

の」

これは思わぬ展開になってきた。おいどんは興奮をおさえながら聞いた。

「どういうことなんだい、それは？」

「昔ね、パパとママが喧嘩しちゃったの。それで、ママが家を出ていっちゃったの。でも、パパはそのことをみんなに知られたくなかったから、ママが死んだことにしちゃったんだ」

「でも、お葬式をやったはずだけど……」

おいどんも憶えている。ココンの母親の葬式を。

「あれはうそのお葬式なの。本当はママは家を出て、どっかいっちゃった」

それは本当のことなのだろうか。もし本当だとすれば、母親を探し出して、ゴン吉の過去を聞き出す必要がある。

「で、ママはどこにいったのかはわからないのかい？」

「うん。でも、おいどんについていけば、もしかしたらママに会えるかもしれないと思ったの」

「だから、あんなに強引についてきたのか？」

「うん」

そうだったのか。ココンには、自分の父親を殺した犯人を突きとめるとともに、母親を探し出すという大きな目的があったのだ。

だから、あんなに積極的に森の中を歩いていくことができた。あれだけ歩いても、休みたいなどとひとこともいわなかったのだ。

「ココン……」

呼びかけてみたが、いつの間にかココンは安らかな寝息をたてていた。

いままで心の中にしまっておいたものをはき出して、すっきりしてしまったのだろう。

「母親か……」

おいどんはひとりつぶやいた。

おいどんには母親の思い出はひとつもなかった。もの心ついたときは、ほかの動物たちに囲まれて、「草原の村」で暮らしていたような気がする。

自分の両親はいったいどうしてしまったのだろう？　生きているのか、死んでしまったのか、それさえもわからない。

おいどんが感傷(かんしょう)にふけっているとき、木の影(かげ)でキラリと光るものがあった……。

草の上で休むおいどんとココンに、何者かが近づきつつあった。

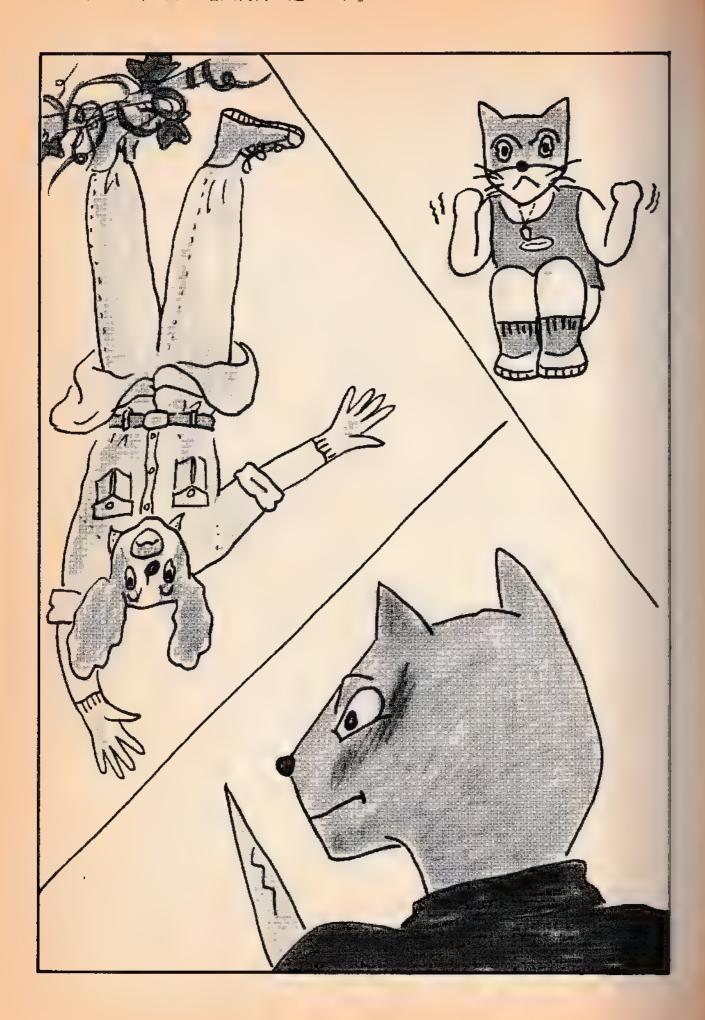
そろり、そろりと、足音もたてずに、そいつはふたりに接近してくる。

その距離が五メートルほどにせばまったとき、おいどんが気配(けはい)を察した。

！」
おいどんが振り向いた瞬間、目の前をものすごいスピードで黒い影が横切った。
「だれだ！」
おいどんはココンをかばいながら、影の動きを追った。
が、それも途中までだった。それほどまでにそいつの動きは速かった。
「どうしたの？」
眠そうに目をこすりながらココンが起き上がった。
「しっ！」
おいどんは口に指を当てて、ココンに合図した。
「……」
おいどんは息を殺してあたりの様子をうかがった。ココンもただならぬ気配を察してじっとしている。
十秒、二十秒……。
なにも起こらないまま、刻々と時間だけが経過していった。
いつの間にか、フクロウの声はやんでいた。
あたりは完全な静寂に包まれている。
しゃっ！

いきなり、頭上の木の枝から黒い影が飛びかかってきた。
「うっ！」
おいどんの頬がなにか鋭いもので引き裂かれた。
とっさによけたから傷は浅かったものの、そうでなかったら、致命傷になっていたかもしれない。
おいどんは血をぬぐいながら顔を上げた。
月明かりに照らしだされたそいつは、三メートル前に立っていた。
闇の中にらんらんと光る目。
むだな肉のないひきしまった肢体。
口の中からのぞく鋭いキバ。
ピューマだ。
真っ黒な革のベストに身を包んだピューマが、鋭利な短刀を右手にかまえて立っている。
「なにをする」
おいどんがいったが、ピューマは返事をしなかった。
こちらのスキをじっとうかがっている。
おいどんも臨戦態勢を整えて、相手をにらんだ。
しかし、こちらは丸腰である。

まともに戦っては勝ち目がない。
おいどんは、徐々に上体をかがめていくと、地面に落ちていた枯れ枝に手をかけた。
「とおっ！」
枯れ枝を振りかざしたおいどんは、ジャンプしながら、思いっきりピューマにたたきつけた。
バキッ！
が、ピューマの動きは素早かった。木の枝は地面にたたきつけられて、まっぷたつに折れた。
しかも、そのあとがいけなかった。
あまりにも勢いよく枯れ枝をたたきつけたため、おいどんの身体が反動でふっとび、大木の枝に逆さ吊りになってしまったのである。
「バカめ……」
ピューマは、口元に嘲笑を浮かべると、ゆっくりとおいどんに近づいてきた。
（南無三……）
おいどんは観念した。片足がツタにからまって、身動きがとれない。もはや、逃げようがなかった。
そのとき、ピューマの後ろから、ココンのうなり声が聞こえてきた。

「うー」
ココンが背中の毛を立てて、背後からピューマをにらんでいた。
(バカなマネをしなければいいが……)
おいどんがそう思ったとき、うなり声に気づいたピューマが、ココンのほうを振り返った。
その瞬間、ココンの小さな身体がピューマめがけてジャンプした。
「やめろ、ココン!」
さけんだ拍子に、おいどんの足にからまっていたツタがほどけた。
「ぐっ!」
地面に落下するおいどん。が、ときすでに遅く、ピューマもまた、ココンを狙って宙に舞っていた。
「ぎゃっ!」
ふたつの身体が空中で交差した瞬間、苦悶のさけびがこだました。
ココンとピューマがもつれあうように地面の草むらに落下する。
おいどんは、思わず顔をしかめた。
結果は見えていた。子ギツネのココンがピューマにかなうはずがない。
「ココン!」
おいどんは絶望のさけびを上げながら、二匹が落下した草むらにかけ寄った。

が、意外にも、草むらから立ち上がったのは、ココンの小さな姿だった。
「コォーーーーーーーン！」
天に向けて、勝利の雄叫びを上げるココン。
「ココン！」
もういちど、おいどんはココンの名を呼んだ。今度は、喜びに満ちた声で。
「だいじょうぶだったのか！」
かけ寄ってココンを抱き上げると、足元にピューマの身体が倒れていた。
見ると、その背中に短剣が突き刺さっている。
ココンが刺したものとは思えなかった。すると、だれが……？
そのとき、おいどんの背後から声が聞こえてきた。
「危ないところだったね」
振り返ると、木の後ろから黒い影が姿を現した。
身体にぴったりフィットした革のツナギに身を包んだヤマネコだった。
ヤマネコはおいどんたちのほうにしなやかな足取りで歩いてくると、倒れているピューマの背中からゆっくりと短剣を引き抜いた。
そして、その血をぬぐい、慣れた手つきで腰のベルトに差す。
「きみは……？」

ヤマネコはおいどんに顔を向け、ニヤリと笑った。メスのヤマネコだった。

第五章　危険地帯「魔の山」

「見ない顔だね」
と、ヤマネコはいった。
「『草原の村』のおいどんという。こっちはココン。ふたりで旅をしている」
「あたしはペルー。この森で賞金稼ぎをしているんだ」
「助けてもらって礼をいうよ」
「こいつはこの森のおたずね者でね。指名手配中の凶悪犯だったんだ。これで賞金も手に入るし、あんたたちも助けることができたんだから、一石二鳥ってわけだね」
ペルーは足元に倒れているピューマの死体をつま先でさし示した。
「それにしても、どうしてこんなところで野宿なんかしてたんだい？　わざわざこいつの餌食になるようなもんじゃないか」
「それにはいろいろとわけがあるんだが……」
「まあ、いいや。どうせ今夜は泊まるところがないんだろう。よかったら、あたしのうちに

「ふーん、そんな事情があったのか……」
森の中にポツンと建てられた小さな家の中で、おいどんから話を聞き終わったペルーは興味深げにうなずいてみせた。
「そうなんだ」
話し終わったおいどんはというと、鼻の下をデレーッと伸ばしている。
というのは、暗がりではよくわからなかったのだが、こうして明かりの下で見ていると、ペルーがとびきりの美人、いや美猫だったからである。
どことなく憂いをたたえた大きな瞳、まっすぐに伸びた鼻先、意思の強そうな口元。おいどんはこういうタイプにめっぽう弱い。
おいどんとしては一生懸命気取ってみせようとしているのだが、つい、顔に本性が出てしまうのだった。
そんなおいどんの態度を、横に座っているココンが不思議そうな顔で、まじまじと見つめていた。
「その金色パンダのことならね、あたしも聞いたことがあるよ」

ペルーがいった。
「それは本当か？」
「ああ。あたしの聞いた話によるとね、三年前に金色パンダは殺されたってことだったけどね」
「殺された？」
では、金色パンダが死んだという噂は、本当だったのか？　しかも、その死因が殺しだったとは……。
だとすると、ココンや伊太郎が目撃した金色パンダは、なんだったのだろう？
「じゃあ、ぼくが見た金色パンダはおばけだったの？」
ココンも、目をまん丸にさせて聞いた。
ピンキーも同じことをいっていたが、おいどんには幽霊なんて信じられなかった。だいいち、幽霊が匂いを残すはずがない。
「そんなばかなことがあるはずはない。ペルー、その三年前の事件について、くわしく話してくれないか？」
「それがね、あたしにもよくわからないんだよ。いっとき、だれかが捜査してるって話は聞いたことがあるけどね、犯人がつかまったって話は聞かないし、金色パンダがどこで、どういうふうに殺されたかってことも知らないんだ。ここはあんたのいうように、『北の竹林』

にいって、パンダたちに直接聞いてみるよりほか、方法はないだろうね」
「そうか……。で、ここから『北の竹林』まではどのくらいあるんだい？」
「かなりあるね。『魔の山』を越えていかなくちゃならないから」
「『魔の山』を越える!?……。とすると、ここは？」
おいどんはなくした地図を頭の中で思い返してみた。
「ここは『魔の山』の南東だよ」
ペルーの返事を聞いて、おいどんはすっとんきょうな声を上げた。
「な、なんだって！」
はじめ、おいどんたちは西に向かって歩いていたはずだ。
やがて滝にぶつかって、そこから川に沿って北上した。
その後、川に流されたり、森で迷ったりしたが、どう考えたって、位置的には「魔の山」の西側にいるものとばかり思っていた。
それがまったく正反対の場所にきていたとは……。
考えられる原因はただひとつ。アナコンダに出会って逃げまくったときだ。あのとき、あとさきのことを考えず、それこそむちゃくちゃに走ったので、とんでもない方向に向かってしまったのにちがいない。
まったく我ながら、なんというドジ！

おいどんは自分を呪ったが、いまとなってはもう遅かった。

一応、最初につまづいた丸太橋のこともペルーに聞いてみたが、彼女はそんな橋などぜんぜん知らないという。

ここは川からはかなり離れた場所にちがいなかった。

こうなったら、橋に戻って金色パンダの匂いをたどることは考えずに、ペルーのいうとおり、「魔の山」を越えて「北の竹林」に向かうしか方法はないだろう。

おいどんがあまりにも気落ちしているのを見かねたのか、ペルーが声をかけてきた。

「なんなら、あたしが案内してやろうか？」

「えっ、本当に！」

おいどんは心の底からうれしそうに声を上げた。それは助かる！

しかし、こういうときおいどんは、いつものクセで、つい見栄を張ってしまうのだ。

(おっと、こんなことでにやけてはいかん。ここは、申し出をきっぱり断って、おいどんの男らしさを彼女に見せつけねば……)

おいどんは椅子から立ち上がると、ペルーに背を向けていった。

「好意はありがたいが、助けてもらったうえ、そこまできみに迷惑をかけるわけにはいかない。明朝、ココンとふたりで旅立つよ。」

「えーっ！　ぼく、おねえちゃんと一緒にいきたいよぉ」

わめいたのはココンだった。
「わがままいっちゃいけないよ、ココン。彼女にも仕事があるんだ」
「べつにあたしはひまだけど」
「ね、おねえちゃん、一緒にいこ！」
「だめだ、ココン。オレたちはふたりでいく。これは男の旅なんだ」
「へーえ、たいした心がけだね」
「まあな。ふっ……」
「そこまでいうんならしかたないね」
「うむ。残念だが……」
「明日、あんたはここに残っておくれ」
「えっ？」
「あたしとこの子ふたりでいくよ」
「わーい！」
喜んだのはもちろんココンである。
おいどんは驚いて振り返った。
「な、なんで……？」
「あんた見てると不安なんだよ。さっきみたいにこの子が襲われても、あんたじゃ助けられ

ないだろ」

「そ、そんなことは……」

「もうないというのかい？」

「も、もちろん」

「約束できるかい？」

「誓（ちか）って！」

「本当だね？」

「ああ。それに、犯人の匂（にお）いを知っているのはオレだけなんだ。このオレの世界一の鼻さえあれば、必ず犯人を捕まえられる！」

「よおし、わかった。そんならしかたがないや。あんたも連れていってやるよ」

「ほ、本当に！　よかった……」

おいどんはペルーの手を握って感謝した。

ペルーといい、ピンキーといい、おいどんは結局、女に頭が上がらない。

翌朝、三人は、ペルーの家をあとにした。

食料もたっぷり持ったし、テントも調達することができたので、今回は万一迷うことがあ

っても、野宿だけはしなくてすみそうだ。
もっとも、荷物はすべて、おいどんが持つことになった。いつの間にか、連れていってもらう立場になってしまったのだからしかたがない。
おいどんは重い荷物を背に、ペルーとココンのあとを必死についていった。
「お、おい、待ってくれよ」
ただでさえ歩きにくい森の中を、重い荷物をかついで歩くのだから、どうしてもおいどんだけほかのふたりよりペースが遅くなってしまう。
「ぐずぐずしてんじゃないよ。男だろ」
数メートル先で待っていたペルーは、おいどんがぜいぜいいいながら追いつくと、背中をたたいてハッパをかける。かといって、荷物を持ってくれる気配はまったくなかった。
「おいどん、早く、早く」
ココンも調子に乗って、おいどんのお尻をピシピシたたく。
「く〜、なんでオレだけがこんなめに……」
「なにぶつぶついってんだい。いやならついてこなくてもいいんだよ」
「いや、そういうわけじゃ……」
「それならさっさと歩きな」
「う、うむ……」

まったく、おいどんにとっては踏んだり蹴ったりの旅であった。
しかし、おいどんにとって本当の地獄はこのあとに待っていた。
ペルーの家を出発して一時間くらい歩いたあたりから、地面が上り坂になり始めたのである。
「も、もしや、これは……」
いつまでたっても地面は平坦にならない。それどころか、傾斜はますますきつくなるばかりだ。おいどんの脳裏に悪い予感がよぎった。
「ペルー、この坂はどのくらい続くんだい？」
おいどんはおそるおそる聞いてみた。
「これから先、ずっとだよ。なにしろ『魔の山』を登ってるんだからね」
ペルーが、おいどんのおそれていたことを平然といってのけた。
(やっぱり、これが「魔の山」！)
おいどんは絶望感で目がくらみそうになった。
平坦な場所でさえ、あれほどつらかったというのに、そのうえ山道とは、あまりにもむごい。この世に神も仏もないものか。
「で、でも山頂までそんな距離はないんだろう？　そうだよね」
最後の希望を賭けて、おいどんは聞いてみる。

しかしペルーの答えは残酷だった。
「あたしの足でも五時間はかかるね」
がーん！
これから五時間以上も、こんな重い荷物をかついで山道を登っていかなくてはならないのか。そんなことはとてもできそうもない。
おいどんは思わずその場にへたりこんでしまった。

「なにやってんだよ」
尻もちをついているおいどんの頭上から、ペルーがやれやれといった表情で声をかけてきた。
「これから五時間も山道を登るなんて、そんなことができるかあ！」
おいどんは、地面に座りこんだままわめいた。これからどうなろうが、知ったことじゃなかった。
「だらしがないねえ」
ペルーが腰に両手を当てていった。
「そんなことじゃ、おいてっちま

「だまれい！」

「本当にいいのかい？」

「いい！」

「なにがなんでもついてくるっていった意気込みはどうしたんだよ」

「そんなものは知らん！」

「なさけないねえ」

「うるさい！」

「それでも男かい？」

「ふん！」

「自分が恥ずかしいと思わないのかい？」

「むむ……」

「意気地（いくじ）なし」

「ぐぐっ……」

あまりにもペルーが好き勝手なことをいうので、おいどんはさすがに腹が立ってきた。

「泣き虫こむし、ベロベロバアー！」

「ぬぬぬ……。もう我慢（がまん）ならん！」

おいどんはすっと立ち上がった。

「おっ、どうする気だい？」
「こんな山道がなんだ。こんな荷物がなんだ。いくらだって歩いてやらあ！　オレは男だぞ！」
そういっておいどんは、ズンズンと歩き出した。
「ははは……、えらい、えらい。ちゃんと歩けるじゃないか」
ペルーは笑いながら、おいどんを見ている。
おいどんはかまわず進んでいった。
「もういいよ、おいどん。あんたの男らしさとやらはわかったから、少し休もう。荷物も持ってやるよ」
だが、おいどんはすでに意地になっていた。ペルーの言葉になど、耳は貸さない。
「おい、待ちなよ、おいどん」
ペルーが追いかけていくと、おいどんは走り始めた。
ドドドドド……。
「まったく困ったにいさんだねえ」
おいどんはものすごい勢いで走る。
ぬかるみだろうが、木の上だろうが、かまわずに走る。

一言、[illegible]
「ふえ〜」
「だからいっただろ、待ちなって」
追いついてきたペルーが笑いながらいった。
「お遊びはこれまでだ。あたしたちも荷物を持つよ」
「頼む。これが限界だ」
おいどんもついに音をあげた。
「まあ、あんたの心意気は充分わかったからね。さあ、ココンも持つんだよ」
「うん」
坂道の途中で荷物の分配が始まった。
それでも、おいどんの持つ分量がいちばん多いことに変わりはなかったが、さっきまでと比べれば天と地ほどの差がある。休憩もとったし、おいどんの身体に気力がみなぎってきた。
「これなら五時間でも十時間でも歩いてみせるさ」
「五時間も歩く必要はないよ。あたしたちは山頂めざしてるわけじゃないんだ。『北の竹林』にいくには、山腹を回っていけばいいんだからね」
それを聞くと、おいどんの気持ちはますます大きくなってきた。

「なあんだ、そうだったのか。それならこんな坂道、なんてことはないじゃないか。はっははは……」

さっきまで意気消沈していたのがうそのように、おいどんはずんずんと先にたって歩き始める。

「おーい、遅いぞ。さっさとついてこないとおいていくからな」

「本当におかしなにいさんだ」

ペルーはしきりに苦笑している。

そのときおいどんが、いきなり大声を上げた。

「うひゃあ！」

最初は、おいどん自身にも、なにが起こったのかわからなかった。

突然目の前が真っ白になったのである。

まぶしい、という感覚だけがおいどんの網膜に焼きついていた。

しばらくして、周囲の明るさに目が慣れてくると、ようやくおいどんも冷静な判断力を取り戻せるようになった。

くなってしまったのである。

「ここからが『魔の山』の本番だよ」

後ろからやってきたペルーがいった。

その言葉のとおり、目の前に巨大な岩山がそびえ立っていた。

いままでとはうって変わって、木一本生（は）えていない荒涼（こうりょう）たる岩山。その中腹（ちゅうふく）近くにおいどんたちはいるのだった。

「うわーい！」

切りたった巨大な奇岩の上では、ココンが元気よく飛び跳（は）ねている。久しぶりにお天道（てんとう）さまを拝（おが）んだ開放感でいっぱいなのだろう。

「ココン、いくよ」

ペルーのかけ声で一行はふたたび歩き始めた。

「おっとっとっと……」

舞台が岩山に変わって、おいどんのペースがまたもや乱れ始めてきた。

大小さまざまな岩が行く手をはばみ、歩きにくいことこのうえないのである。

ペルーやココンは身が軽いからひょいひょいと進んでいくが、おいどんの体重では、岩ひとつ乗り越えるのもひと苦労だった。

そのうえ、容赦なく照りつける直射日光の強烈さといったら。
じりじりじりじりじり……。
十分も歩かないうちに、おいどんの身体は汗まみれ。
こんなつらさを味わうくらいなら、「迷いの森」を歩いていたときのほうがまだましだったような気がしてくる。
山の麓に広がる緑の樹海がとたんに恋しく感じられてくる。
やがて左手はるか下に、緑色の水を満々とたたえた湖が見えてきた。
「西の湖」だ。
しかし、そのあたりへくるころには、おいどんはすっかり息をきらしていた。
「おいどんの兄さん、こんなところでへばったりしないでくれよ。これからちょいとばかし危険地帯に入るからね」
おいどんが追いつくのを待って、ペルーがいった。
「えっ？」
このうえ、まだやっかいな場所があるのかと思うと、おいどんはぞっとした。
「この先にハゲタカの棲み家があるんだ。ここが『魔の山』と呼ばれているのはやつらのせいでね。いままでやつらに襲われて何匹もの犠牲者が出ているんだ」
「そこを避けて通るわけにはいかないのか？」

「やつらの棲み家の反対側は崖だからな。見つかったら最後、やつらに食われるか、崖へ転落するか、ふたつにひとつだよ。だから、くれぐれも気をつけてくれよ。わかったね」

「あ、ああ」

「ココンも気をつけるんだよ」

「うん」

視界をふさいでいた巨岩をぐるっと回りこんで進んでいくと、左側の斜面上方に数本の木が立っているのが見えた。その枝に群（むら）がっているのは、まさしく不気味（ぶきみ）なハゲタカたち！

「きゃっ！」

ココンが思わず声を上げたのも無理はなかった。

木の根元には、白骨と化した動物の死体がゴロゴロと転がっていたのだ。ハゲタカに襲われた、哀（あわ）れな犠牲者なのだろう。ああはなりたくなかった。

「しっ！」

ペルーがココンをいましめる。そしてささやくようにいった。

「これからしばらくは声をたてるんじゃないよ。あいつらに見つからないように、岩の陰（かげ）にかくれて進むんだ」

ペルーは身を縮めると、右側の岩にへばりつくようにして慎重（しんちょう）に足を進めた。

おいどんとココンもそれに続くが、左側は気の遠くなるような断崖（だんがい）。その下は湖だ。ここ

から落ちたら、まず助からないことは目に見えている。

二人はそろりそろりと岩陰を進んでいった。

「……」

足場の悪い岩場を、身を縮めながら、息を殺して進んでいくというのは想像以上につらい作業だった。しかも、背中には強い日光が直接照りつけているのだ。途中、もうハゲタカに見つかってもかまわないから、背筋を伸ばして大声でさけびたくなる衝動を何度もこらえながら、おいどんは足を進めていく。

そんなふうにして、どれくらい歩いたのだろう。

何百メートルも歩いたような気もするが、実際は数メートルしか進んでいないのかもしれない。

突然ココンが悲鳴を上げた。

「きゃんっ！」

ペルーもおいどんも凍りついたように足を止めた。

「どうしたんだ、ココン」

「アリ！」

そういってココンは手をはっていたアリを大きなアクションで振り払った。

その瞬間、バサバサッ、という激しい羽ばたきの音が頭上で

「しまった、気づかれたな！」

早くも、羽のハゲタカが頭の真上に迫っていた。

「逃げるんだ！」

ペルーがさけび終わらないうちにおいどんとココンは走り出していた。こうなったら岩蔭にかくれている必要なんてまったくない。ただひたすら走って、危険地帯を突破するのみだ。

岩場だろうがなんだろうが、足場を確認している余裕なんてない。三人はつまずこうがよろめこうが、かまわずに走り続けた。

しかし、空を自由に飛び回れるハゲタカをそう簡単にまけるものではなかった。おいどんたちの足元には、つねに黒い巨大な影がつきまとう。

そのしつこさに耐えられなくなったのか、ココンがいきなりハゲタカめがけて小石を投げつけた。

「ばかなまねをするんじゃない！」

おいどんがたしなめたが、もうあとの祭りだった。

挑発されて顔面を真っ赤にしたハゲタカが猛然とココンめがけて舞い降りてきた。

鋭いツメがガシッ、とココンの背中をつかむ。
「きゃんきゃんきゃん！」
必死に暴(あば)れ回るココンだが、ハゲタカの強い握力からは逃れられない。
ふわっ、とココンの小さな身体(からだ)が空中に持ち上げられた。
「いかん！」
ココンの危機を見たおいどんが、空中に舞い上がっていくハゲタカの身体にジャンプいちばん飛びついた。
バサバサバサッ！
いきなりおいどんの体重が加わって、あせったハゲタカは大きく羽ばたきをする。それでもココンの身体を離さないのは、ハゲタカの意地か。
「この野郎！」
おいどんはハゲタカの身体に左手でしっかりとしがみつきながら、ハゲタカの脚(あし)に何度も何度もチョップをくらわせた。
「キキッ！」
ハゲタカはブレーキがきしむようなさけび声を上げて、やっと片足のツメをココンから離した。
「きゃんっ

空中にぶらんとたれ下がったココンが思わず悲鳴を上げる。

「もう少しだ、がんばれ！」

おいどんはココンを励まして、ハゲタカのもう一方の脚に思いっきりチョップをたたきつけた。

「ギャッ！」

さすがに耐えきれなくなったハゲタカは、残っていたもう片方の脚もついにココンから離した。

（やったぜ！）

見事、ココン救出に成功したおいどんは心の中で快哉をさけんだ。

が、それも束の間。次の瞬間、おいどんは落ちていくココンを見て、自分が大きな過ちをしでかしてしまったことに気づいた。

「しまった！」

いつの間にかハゲタカが空中高く舞い上がっていたのを、おいどんはまったく気づいていなかったのだ。

ココンは地上十数メートルの高さから真っ逆さまに落下していく。

「うわーん！」

かる見込みは、ない！
「ココン！」
まだハゲタカにしがみついているおいどんと、地上にいるペルーは、思わず目をつぶった。
「うわー！」
ココン自身、自分がどうなっているのかまったくわからなかった。身体が吸いこまれるように、地上に向かってぐんぐん進んでいく。
行方不明になった母親のこと、殺された父親のことが、パノラマ現象となって目の前をぐるぐる回る。
もうダメだと思った。自分は死ぬんだ、と思った。
が、そう思った次の瞬間、ココンの身体は、柔らかいなにかに包まれていた。
もう、落下していく感覚はなかった。大きなクッションに横たわっているようで、気持ちよかった。
ぼくは死んじゃったんだろうか？　ここは天国なんだろうか？
そう思って、ココンはおそるおそる目を開いた。
目の前に、ふさふさとした白い毛があった。

ゆっくりと顔を上げて、上を見てみる。
そこに、大きなパンダの顔があった。
「ココン！」
そのとき、自分を呼ぶペルーの声が聞こえてきた。顔を反対側に向けると、ペルーが心配そうな顔をして走ってくるのが見える。
「ココン、大丈夫かい！」
ココンの身体(からだ)は、ペルーの胸に抱(だ)きかかえられた。
横を見ると、白いはんてんを着て編(あ)み笠(がさ)をかぶったパンダが立っていた。
(このパンダがぼくを助けてくれたんだ)
「あんたは……？」
ペルーがパンダの顔をじっと見つめて聞いた。
「そんなことはあとでいい。それよりも、早くこっちへ！」
パンダはペルーの手を引いて走り出した。
前方に森が見えていた。
「魔の山」を取りまく「迷いの森」だ。
パンダのいうとおり、こんな危険地帯でのんびりと話をしているヒマなどなかった。

そのころ、おいどんはまだハゲタカの身体にしがみついて、空中を飛び回っていた。
ずっと地上の様子を見ていたから、ココンが、岩陰（いわかげ）から突然現れたパンダに抱きとめられて助かったことは知っている。
今度は、おいどんが地上に飛び降りなければならない番だった。
「おい、ハゲタカ、もっと下に降りろ！」
おいどんは体重をかけて、ハゲタカが空高く舞い上がろうとするのを阻止（そし）していた。
「なんだと、ひとさまのエリアに勝手に入りこんでおいて命令するとは、生意気（なまいき）な野郎だな」
ハゲタカはどうにかして上へ飛ぼうとするが、おいどんの体重が重くて、なかなか思うようにはいかない。
ハゲタカをかなり下降させておいてから、おいどんは、ペルーたちが逃げこんだ森の方角めがけて飛び降りた。
「とおっ！」
だが、それでも地上までは十メートル近くあった。

「ぐえっ！」
身体を丸めて、背中から地上に激突したおいどんは、そのまま斜面をゴロンゴロンと数回転してから、岩にぶつかって大の字になった。せめてもの救いは、落下した場所が固い岩の上ではなく、土の上だったことだろう。
「さあ、こっちへ！」
森の入り口で待ちかまえていたペルーが素早く飛び出してきて、おいどんの手を引っ張った。背中の痛みをこらえて立ち上がったおいどんは、夢中で森の中へかけこんでいく。
「ふうー」
森の中へ入ると、おいどんは前のめりにつっぷした。
上空を木々でおおわれた森の中に入ってしまえば、ハゲタカは襲ってくることができない。
どうやら危険地帯突破には成功したようだ。
「まったくむちゃするんだから。大丈夫かい？」
ペルーがおいどんの顔をのぞきこんだ。
「ああ……」
起き上がろうとした、その瞬間、
「うっ、いてっ！」

「[illegible]」

そういったのは、さっき、ココンを救ったパンダだった。彼は、背中にかついでいたズタ袋の中から大きなビンを取り出した。とたんに強い匂いが鼻をつく。

「これは？」

ビンを受け取ったペルーが不審な顔をした。

「湿布薬だ。打撲傷にはよく効く」

「ところで、あんたの名前をまだ聞いていなかったね」

「おれか。おれはベンベンという」

「ベンベン？」

「そうだ。旅芸人をしながら、各地を歩き回っている。さっきおれも、岩蔭を通って『魔の山』を抜けようとしていたんだ。すると、反対側からきたあんたたちがあんな目にあっているのに出くわしたってわけさ」

ベンベンは語った。

「それについては礼をいうよ」

ペルーが、おいどんの背中に湿布薬を塗りながらいった。ベンベンの相手はもっぱらペルーがしている。背中を痛めて、口をきくのもつらいおいどんにはありがたかった。

「で、もしかしてベンベンさん、あんた『北の竹林』からきたんじゃないのかい？」

「ああ、そうだ。おれたちパンダの住み家は『北の竹林』にあるからな」
「じゃあ、金色パンダについては知っているね」
「金色パンダ？」
とたんにベンベンの顔色がくもった。
「おまえたち、金色パンダについて知りたいのか？」
「ああ」
「ぼく見たんだよ！」
横からココンが口を出した。
「なにっ？」
ベンベンは眉をしかめた。
「おまえ、金色パンダを見たのか？」
「うん」
「いつだ？」
「三日前の夜！」
「三日前の夜……？」
ベンベンの表情がきびしさを増していった。
「じゃあ、おまえが見たのは幻だ。金色パンダはとっくに死んでいるんだからな」

「やっぱり！」
ペルーがさけんだ。
「やっぱり金色パンダは三年前に殺されていたんだね」
ベンベンは答えなかった。じっとなにかを考えこんでいる。
「ねえ、頼むから教えてくれよ、金色パンダのことを」
「おれの口からはいえない」
「じゃあ、ほかのパンダにならいてもいいんだね」
「……しかたがない。おれが、『北の竹林』に案内してやろう」
「それはありがたい！」
思わずおいどんが立ち上がった。「北の竹林」へ、住人であるパンダに案内してもらえるなら、これほど心強いことはない。背中の痛みもふっとんでしまった。
「おいどん、大丈夫なのかい？」
「ああ、この湿布が効いてね、もうすっかり大丈夫さ。さあ、いこう！」
「まったくあきれた男だね、あんたは……」
すっかりピンピンしているおいどんを見て、ペルーが微笑んだ。
「でも、さっきはあんたのこと見直したよ。必死でハゲタカに立ち向かっていったもんね」
ペルーはまぶしそうな顔をして、おいどんを見つめた。

第六章　ついに到達、「北の竹林」

あれから、おいどんたち一行の旅は順調そのものだった。
ベンベンの案内によって、夕方になるころには、「迷いの森」を抜け出ようとしていた。
「『北の竹林』は、すぐそこだ」
ベンベンがそういったとき、目の前に川が現れた。
昨日、おいどんとココンが流された川の下流にあたるのだろう。川幅は多少広かったが、流れはおだやかだった。
「わーい、お水だ！」
ひさしぶりに清流を見て、ココンがうれしそうに水の中に飛びこんでいった。
川底も深くはなさそうである。おいどんとペルーもココンのあとに続いて、川の中に足を踏み入れた。
川の向こうに、風に吹かれてさわさわと揺れる竹林が広がっていた。
「あれが……」
おいどんの言葉にベンベンがうなずいた。

「そうだ。『北の竹林』だ」
ついにおいどんは、目的の地に達したのである。

川を渡って竹林の中を歩いていくと、やがて、中国の宮殿のような建物が見えてきた。
「ここがおれたちの家だ」
「すごいところに住んでいるんだなあ」
おいどんが思わず感心したほど、そこは豪壮な建物だった。いままでおいどんが見たことのあるもっとも大きな家はゴン吉の屋敷だったが、ここはその十倍以上はあると思われた。
しかも、ゴン吉の家が古びていたのに対し、ここは外装も新しく、きらびやかな光彩を放っていた。ゴン吉の家が過去の栄光を物語っているとすれば、こちらは現在の栄華を物語っているといえるだろう。
「まあ、中に入りな」
ベンベンの案内で玄関を通り抜けると、そこは広大なロビーになっていた。三階分はあると思われる高い天井からは豪華なシャンデリアが吊り下げられ、部屋全体には心地よくエアコンが効いている。
その中央に置かれたソファには、二匹のパンダが座っていた。

「あら、ベンベン、その方たちは？」
そういって立ち上がったのは、若いメスのパンダだった。
「ちょっとそこで出会ったもんでな」
ベンベンがいうと、ソファに座っていたもう一匹のパンダも立ち上がった。
年老いたオスのパンダだった。
「お客さんとは、これは珍しい」
だが、ベンベンが、
「おれたちに金色のパンダのことを聞きたいそうだ」
というと、二匹のパンダはそろって顔をしかめた。
「金色パンダ？」
「ええ」
おいどんとパンダたちは、立ったまま、視線を交わした。

「まあ、お座りなさい」
老パンダは、おいどんたちにソファを勧めた。
「金色パンダについて聞きたいとは、どういうことかの？　まず、事情を説明してもらいた

い」

老パンダは、おいどんたちが腰を下ろすと、自分もソファに身を沈めてたずねた。

おいどんは、自己紹介をかねながら、ゴン占殺害事件のこと、いままで入手した情報のことなどをくわしく語って聞かせた。

老パンダの名はホェンホェン、メスのパンダはその娘でリンリンといった。彼女は、ベンベンの婚約者でもあった。

「なるほど、それであんたたちは金色のパンダのことを……」

おいどんの話を聞き終わると、ホェンホェンがいった。

「ええ。もし、本当に殺されているのであれば、そのときの状況をくわしく話していただきたい」

おいどんがいうと、ホェンホェンはしばらく考えこんでいる様子だった。

「おじさん、もうかくしてもしょうがないのではありませんか?」

横からベンベンがホェンホェンの顔色をうかがった。リンリンも心配そうにホェンホェンの顔を見ている。

「そうだな……」

と、ホェンホェンはつぶやいた。

「二年前のあの事件のことは、外部の者には決していうまいと心に決めていたが、こうなっ

た以上、かくしておくわけにもいかんじゃろう」
「助かります」
おいどんが礼をいった。
「金色パンダというのはな……」
ホェンホェンは、あごの下で両手を組んで話し始めた。
「ルンルンといって、わしの娘だったんじゃ」
「では、リンリンさんとは姉妹……？」
「うむ。双子の姉妹じゃった」
「双子……」
おいどんがリンリンを見ると、彼女は静かにうなずいた。可憐な雰囲気をただよわせた娘だった。
「双子だというのに、どうして片方だけあんな金色のパンダが生まれたのかはわからない。とにかくルンルンは、生まれたときから目のさめるような金髪で、みなの注目の的じゃった」
ホェンホェンは、チラリとリンリンに視線を送ってから、話を続けた。
「リンリンとルンルンの母親は早く死んでしまってのう、わしらは親子三人で仲よく生きてきた。そして二年半前、わしらはこの竹林にやってきたんじゃ」

カラスのジョージのいってたとおりだった。金色パンダは、二年半前にこのピースランドにやってきたのだ。

「わしら二人は、大歓迎されたものじゃ。金髪のルンルンのもの珍しさもあったのじゃろうが、あのころはいろんな動物たちがわしらに会いにきてくれた。ここにいるベンベンくんもふたりの娘をかわいがってくれたし、いい時代じゃったよ……」

ホェンホェンは遠くを見るような目つきで語った。

「それまで、おれはひとりでここに住んでいたからな。いっぺんに三人も仲間が増えて、おれもうれしかったんだ」

話の引き合いに出されたベンベンも思い出を語る。

「すると、パンダというのは、ルンルンも入れて四人しかいなかったんですか?」

おいどんが聞くと、ホェンホェンはうなずいた。

「そうじゃや。いまはもうルンルンはおらぬから、ここにいる三人が、ピースランドのパンダ全員ということになるな」

たった三人で、この大邸宅。ぜいたくな身分だなと、おいどんは思った。

だが、そんな思いは顔に出さずに聞く。

「で、その後、ルンルンさんはどうなったんです?」

「あれは、ここへきてから、半年ほどたったころじゃった」

ホェンホェンの表情が暗くなった。
「散歩に出ていたルンルンが夜になっても帰ってこないので心配していたら、死体で発見されたというニュースが飛びこんできたんじゃ。しかも、殺されたということじゃった……」
ルンルンは殺されていた。噂（うわさ）は本当だったのだ。
「やはり、ルンルンさんは……」
おいどんがいうと、ホェンホェンは目を閉じてうなずいた。
「そうじゃ、殺された……。知らせを受けたとき、わしは信じられなかったよ。あのルンルンが死んだなんて……。しかし、ここに運ばれてきたルンルンは、わしがいくら呼んでも、なにも答えてはくれなかった……」
ホェンホェンは、目頭（めがしら）を押さえて、言葉を詰まらせた。
「お父さん、大丈夫……？」
娘のリンリンが、肩に手をかけて、ホェンホェンを気づかう。ホェンホェンは、ただうなずくばかりだ。このまま話を続けてもらうのはどうやらむずかしそうだった。
おいどんの困惑した思いを悟ったのか、リンリンが顔を上げた。
「すみません、おいどんさん。父はこれ以上、とても話せそうにありません。続きはわたし

が話します。よろしいでしょうか？」
「リンリン……」
心配そうな顔をしたのは、ベンベンだった。
「おれから話そうか？」
「いいえ、いいの、ベンベン。わたしが話すわ」
ベンベンの申し出を断ると、リンリンはおいどんに顔を向けた。
「お願いします」
おいどんがうなずくのを待って、リンリンは話し始めた。
「ルンルンの死体は、この竹林の南にある『西の湖』のほとりで発見されました。ルンルンは、よくあのあたりまで散歩にいくことが多かったのです。死因は射殺でした。何者かに、背中からライフルで撃たれたのです。でも、結局わかったのは、それだけでした。犯人は、見つからずじまいだったんです」
「すると、迷宮入り？」
「ええ……。森の保安官が一生懸命捜査してくれたんですが、結局、わからずじまいでした」
「ルンルンには、なにか、殺されるような理由でもあったんですか？」
「そんな理由なんてありません。素直で、とてもかわいい人気者だったんです」

リンリンがいうと、それまで肩を落としていたホェンホェンが、ボツリとつぶやいた。
「妬(ねた)みじゃよ……」
「お父さん……」
リンリンにかまわず、ホェンホェンはゆっくりと顔を上げた。
「さっきは感情的になってすまなかったな。年をとると、つい涙もろくなっていかん。が、もう、だいじょうぶじゃ。おいどんさん、話を続けましょう」
「ええ」
おいどんはホェンホェンを見つめた。
「妬みとは、どういうことです？　ルンルンさんはだれかに妬まれていたんですか？」
「ルンルンだけじゃない。わしらパンダ全員が妬まれておった。ほかの動物全部にな……」
「え？」
「この宮殿みたいな家を見たまえ。広くて静かな竹林を見たまえ。これらすべてを、このわずかな数のパンダだけで独占しておる。ほかの動物に妬まれて、あたりまえだとは思わんか？」
（確かに……）
と、おいどんも思った。さっきもそんなことを考えていたばかりだ。
すると、ホェンホェンは、おいどんの胸のうちを見すかしたようにいった。

「あんたも、この家がうらやましいじゃろう」
「いえ、そんな……」
「無理しなくてもわかっておる。みんな、そうなんじゃ。ほかの動物たちはみな、わしらパンダのことを羨望と嫉妬の入り混じった目で見ておる。わしが、そのことに気づいたのは、ルンルンが殺されたあとじゃったよ」
「と、いうのは？」
「ルンルンの葬式には、大勢の動物たちが集まってくれた。だが彼らは、みな一様にどこかうれしそうな顔をしているんじゃ。なぜだかわかるか？　彼らは心の中で、ざまあみろと思っていたんじゃよ」
「そんな……」
「ちがうというのか？　わしはこんな噂を聞いたことがあるぞ。ある動物が、わしらのことをこういっていたそうじゃ。『あれだけぜいたくな暮らしをしているんだから、少しくらい悲しい目にあったって、しかたないわよね』……。わしはそれを聞いて、初めてわかった。ほかの動物たちは、けっして本心からわしらを歓迎してくれていたわけではなかったんだと。みんな、わしらをうらやましがっていただけなんじゃ。妬ましく思っていただけなんじゃ。それなのに、みんなからちやほやされて、いい気になっていたわしらがバカじゃった。とく

[illegible]？」

「……」

「だからわしは、あの事件のことは、だれにもしゃべらない決心をしたんじゃ。すでに知ってしまっている者はしかたがない。だが、知らない者にまで、事件のことを話して、そのたびにざまあみろ、と思われるのはいやじゃからな。ルンルンが死んだあと、金色パンダは本当にいたのかと訪ねてくる者も何人かあった。しかしそのたびにわしは、そんなものは最初からいなかったと、答えることにしたんじゃ。わしのこの気持ちがおわかりかな？」

そうだったのか。金色パンダはそんな理由から、いままで闇の中に閉ざされていたのだ。おいどんは、パンダたちの悲しい宿命に、少なからず同情の念がわいてきた。しかし、おいどんには感傷にひたっているひまはなかった。いまは、ゴン吉殺害事件の犯人を突きとめることが第一だ。そしてそのためには、事件当夜、現場付近に出没した金色パンダの正体を暴かなければならないのだった。

「では、ホェンホェンさん、今回のゴン吉殺害事件に登場する金色パンダについてはどうお考えになります？」

「それについては、わしはなんともいえん。わしが知っている金色パンダはルンルンだけじ

や。だが、ルンルンはもういない。それを知ってもらうために、今日は禁を破って、あんたがたにルンルンのことを話した。ルンルン以外の金色パンダが現れようと、それはわしらにはまったく関係のないことじゃや。おおかた、ほかの動物のイタズラじゃろう」

そうなのだろうか？

そうなのかもしれない。

しかし、もし何者かが金色パンダに変装（へんそう）をしていたとすれば、その可能性がいちばん高いのは、ここにいる三人のパンダだ。彼らについては、もう少し調べてみる必要があった。

「失礼なことをお聞きしますが、三日前の夜、あなたたちはどうしていました？」

おいどんがたずねると、ベンベンが表情を硬くした。

「おれたちを疑っているのか？」

「いや、そういうわけじゃないが、一応、念のためにね」

「まあ、いい。変にかくしだてをして、疑われたくないからな。三人一緒にいたのは、夜の九時までだ。そのあとおれは、夜中の二時ごろまでリンリンと一緒に外で星を見ていたよ。それから寝たんだ。なっ」

ベンベンがリンリンに同意を求めた。

「ええ。わたしも、それから部屋に帰って寝ました」

「わしはベンベンとパンパンが元気に出ていったあと、すぐ寝てしまったから」

とホェンホェン。

「夜中の二時まで、この家から出ていくものはだれもいなかったぜ。それ以降、出ていったものがいたとしても、夜のうちに『草原の村』にいくことなんて無理な話だ。翌朝は六時にみんなで顔を合わせたしな。つまり全員にアリバイがあるってことさ。これで満足したかい」

確かにベンベンのいうとおり、夜中の二時以降にここを出発したのでは、夜明けまでに「草原の村」に着くことはとうてい不可能だ。

しかし、だれかが犯人をかばって偽証していることもあり得る。

おいどんは最後の切り札を使うことにした。

「わかりました。だが、あとひとつだけ失礼をお許しいただきたい」

「なんだね？」

「みなさんの匂いを嗅がせていただきたいのです」

「匂い？」

「そうです。おいどんは事件の現場で犯人らしき動物の匂いを嗅いでいます。その匂いが、ここにもないか、確かめさせてもらいたいのです」

「いいじゃろう」

ホェンホェンが了解した。

もし、ここに犯人がいるなら、これで確実にわかる。

おいどんは自信に満ちた表情を浮かべて、まずホェンホェンに近づいた。

「では、お言葉にあまえて……」

ところが、いざ匂いを嗅ごうとした瞬間、おいどんの顔がこわばった。

「あれ？」

「どうしたんだい、おいどん？」

それまでおいどんとパンダたちのやりとりを、横で黙って聞いていたペルーが心配そうに聞いた。

「匂いがわからない！」

「なんだって！　だっておいどんの鼻は世界一だって自慢してたじゃないか」

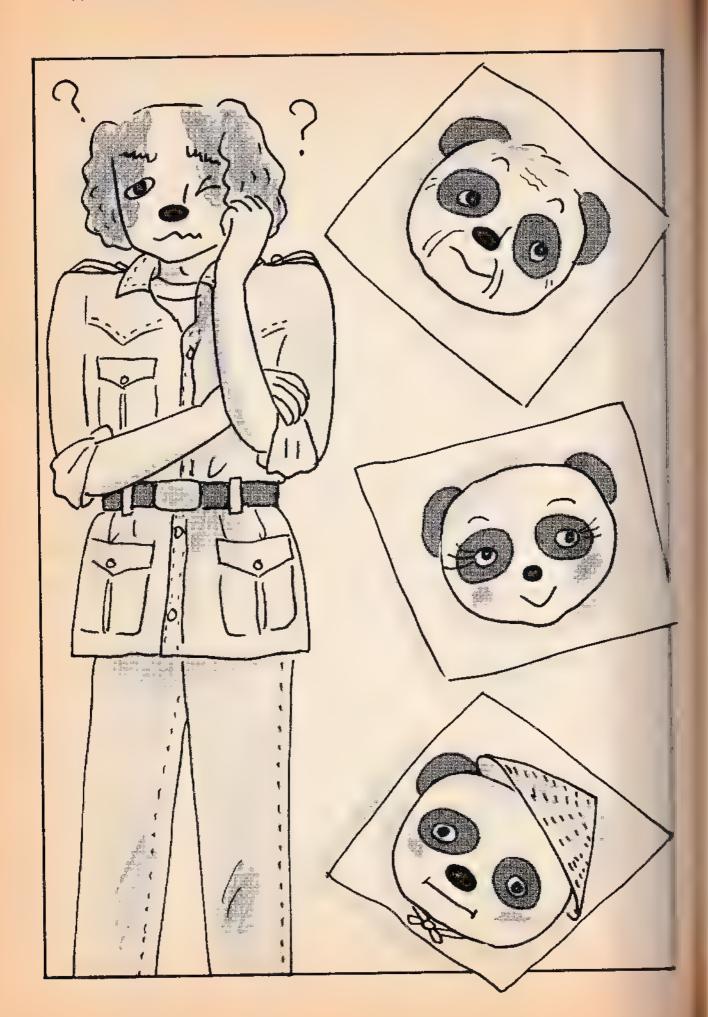
「そうはいっても、湿布の匂いが強すぎて……」

おいどんのけがを治すため、背中に塗りたくった湿布薬！　その強烈な匂いのため、おいどんの鼻孔に刻まれていた犯人の匂いがかき消されてしまったのである。

肝心かなめのときになって、自慢の鼻が役に立たなくなるとは！
おいどんはショックのあまり、思わずその場に立ちつくしてしまった。
「ど、どうすればいいんだ……」
「ごめん、あたしがなにも考えずに塗りまくったからいけないんだ」
いつになく、ペルーがすまなそうな顔をしている。
「いや、そうとは知らずに湿布薬を渡したおれにも責任がある。すまない」
ベンベンもあやまっている。
しかし、だからといってペルーやベンベンを責めるわけにはいかなかった。
ベンベンが湿布薬をくれなかったら、そして、ペルーが湿布薬を塗ってくれなかったら、とてもここまで歩いてこれなかったかもしれないのである。
「困ったことになったようじゃの……」
ボーゼンとしているおいどんを見て、ホェンホェンがいった。
「しかし、そう気を落とすことはあるまいて」
「なにかいい方法でもあるんですか？」
「二度手間にはなるが、もういちど、現場に戻って、匂いを嗅ぎ直してくるというのはどうじゃ。そのあとで、またここにやってくればいい。わしらは逃げもかくれもせん。いつでも匂いを嗅がせてしんぜよう」

事件の現場は、ピンキーによって荒らされないように保護されている。確かにあそこに戻れば、もういちど犯人の匂いを鼻にインプットすることはできるだろう。
しかし、ここまでくるのに、森を越え、山を越え、丸二日もかかったことを思うと、おいどんの気持ちはめいってしまう。
だがホェンホェンは、そんなおいどんの絶望感を吹き飛ばすようなことをいってのけた。
「いくら遠いといっても、同じピースランドの中じゃ。『草原の村』からなら、片道五時間もあればこれるじゃろう」
「五時間？」
「そうじゃ。わしは昔、いちどだけ『草原の村』のほうまで歩いていったことがあるが、確かそのくらいの時間でたどり着いたはずじゃ」
「そ、それは本当ですか？」
「うむ。そこの川をたどっていけばそんなもんじゃ。あんたがたもそうやってきたんじゃないのかね？」
「いや、まあ、そんなところですが……。ははは」
そんな距離を丸二日もかかってくるとは、よっぽど変なルートを通ってきたにちがいない。
いまさらながら、おいどんは、自分の方向音痴を痛感した。

こそんなにつらくはない。
おいどんに希望がわいてきた。
「わかりました。また出直してくることにします」
「うむ。じゃが、今日はもう、日暮れも近いな。どうしなさる？」
窓の外を見ると、すでにあたりは薄闇に包まれ始めていた。
いまからここを出発すると、いくら「草原の村」まで五時間といっても、森の中で夜をむかえてしまうことになるだろう。
「今夜はここに泊まっていったらどうかね？」
おいどんが迷っていると、ベンベンが声をかけた。
「しかし、それはあまりにもうしわけない」
「いや、かまわんさ。ねえ、おじさん」
「そうじゃな……。そうなさるがよかろう」
「では、お言葉にあまえて……」
おいどんが横を見ると、ペルーもココンもうなずいていた。
容疑者の家に泊めてもらうというのも変なものだが、また野宿をして危険に身をさらすことを考えると、この際、しかたがなかった。

「どう思う？」
深夜、ふたりきりになった客間で、おいどんはペルーに聞いてみた。ココンはすでに隣の寝室で寝かせてある。
「金色パンダが死んでいたとなると、考えられるのはただひとつだね」
窓辺（まどべ）に立って、風に揺れる夜の竹林を見ていたペルーがいった。
ここは、ペルーに与えられた寝室だった。
ココンを寝かしつけたあと、おいどんはパンダの証言をまとめるために、この部屋を訪れたのだった。
ロビーと同じく客室も広く、豪勢（ごうせい）だった。
「だれかが金色パンダに変装（へんそう）して、ゴン吉の家に現れた……。そうだろう？」
「ああ。そして金色パンダに変装するとなると、それがいちばん簡単なのは、ここにいるパンダたちだ」
「うん。オレもそう思っていた。ほかの動物が金色パンダのぬいぐるみをかぶっていたということも考えられるが、それはあまりにもバカげている。その点、パンダなら毛染め薬でも使えば、すぐに金色パンダに変装できるからな」
「だとすると、犯人はあのパンダのうちのだれかひとり……」
「うん。オレはこういうふうに考えてみたんだ。三年前、ルンルンを殺したのはゴン吉だっ

たんだとね。その復讐をはたすために、パンダのだれかが、ゴン吉を殺した……」
「そして、その動機がいちばん強いのは……」
「ホェンホェンだろう。彼は、ほかの動物を憎んでいるふしがあるからね。みずからの手で、実の娘を殺された恨みを晴らしたとしても不思議ではない」
「あたしはベンベンがくさいと思っているんだ」
「ベンベンが？」
「ああ。一見あたしたちに好意的に装ってはいるけど、どうも本心はちがうような気がするんだ。なんか、心の底でたくらんでいるような気がしてね……」
「うん。だが、いずれにしても、三人ともアリバイがある。一時から六時までの四時間では、ここから『草原の村』まで行って帰ってこれるはずがない」
「リンリンが偽証しているとすれば？」
「だとしても、使える時間は、夜の九時から朝の六時までだ。たった九時間しかない。いくら『草原の村』まで五時間でいけるとしても、殺人を犯して往復九時間で戻ってくるのは無理だろう」
「三人の共犯ということも考えられるんじゃないかな？」
「それはないだろう。そんなことだったら、夕食に毒でも入れて、オレたちを殺しているはずさ」

「とにかく、真犯人を突きとめるためには、三年前のルンルン殺しも捜査してみる必要がありそうだな。できれば、当時捜査をしていたという保安官に会えればいいんだが……」
「うん」
「とりあえず明日、帰りがけに、ルンルンが殺されたという『西の湖』に寄ってみよう」
「それがいいだろうね」
「じゃあ、今夜は遅いから、そろそろ部屋に戻るとするか」
おいどんは立ち上がった。
「おやすみ」
あいさつをしてペルーの部屋を出ると、廊下にリンリンが立っていた。
「リンリンさん、どうしてここに……？」
おいどんが不審な表情を向けると、リンリンはすまなそうに目を伏せた。
「すみません。おふたりの話を聞いてしまいました……」
「なぜ、そんなことを……」
「悪気はなかったんです。通りかかったら、話し声が聞こえたもので、つい……。ただ……」
「ただ？」

「これだけはいっておきます。父やベンベンは決して犯人なんかじゃありません」
「そういいきれる根拠(こんきょ)が、あなたにはあるのですか？」
おいどんが聞くと、リンリンは顔をそむけてなにも答えなかった。
「リンリンさん……」
おいどんはいった。
「あなたはだれかをかばっているのじゃありませんか？」
だが、リンリンは無言のままだった。
「リンリンさん、犯人を捕まえるのが、わたしの仕事です。もしかしたら、あなたにはつらい結果が出るかもしれない。しかしわたしはあくまでも真実を追求します。では、おやすみなさい」
おいどんは、リンリンの脇(わき)を通り抜けて寝室へ向かった。
「おいどんさん……」
リンリンがおいどんの背中から声をかけた。
「気をつけてくださいね……」
おいどんは寝室に入った。

第七章　絶体絶命！「西の湖」

翌朝早く、おいどん、ペルー、ココンの三人は出発の準備を整えた。

「ありがとうございました。匂(にお)いを嗅(か)ぎ直したら、また戻ってきます」

おいどんは、ホェンホェン、リンリン、ベンベンの三人に向かってそう告げると、パンダの家をあとにした。

ホェンホェンにいわれたとおり、おいどんたちは川に沿って南下していった。

竹の葉が積もった川沿いの道はとても歩きやすく、散歩気分で歩くことができた。行きのつらい行程(こうてい)がうそのようだった。

しばらく進むと、川辺(かわべ)の竹林は森に変わり、パンダ以外の動物たちの足跡(あしあと)もいくつか見受けられるようになった。「北の竹林」が終わり、「迷いの森」に入ったのだ。

森に入ると間もなく、道が細くなり、川べりぎりぎりのところまで木々が迫ってきた。

川の向こう岸もうっそうたる森である。その奥には、巨大な岩山がそびえ立っているのが見えた。昨日、さんざんな目にあった「魔の山」である。

さすがに歩きにくくなってきたが、それでも川に沿って歩いている限り、敵に襲(おそ)われる心

配は少ないし、道に迷うこともない。おいどんたちは順調に歩を進めていった。
「くるときもこっちを通ってくればよかったね」
おいどんとペルーは、気軽に話しながら歩いた。先頭ではココンが軽快に飛び跳ねている。
「おい、ココン、あんまり先にいくんじゃないぞ」
おいどんの注意にも答えず、ココンはふたりを尻目に、どんどん先に進んでいった。
「うわーい！」
前方からココンの声が聞こえてきた。
このあたりは、川が蛇行をくり返しているので、おいどんのいる位置からは木にさえぎられて、ココンの姿は見えなかった。
何事かと思って川べりを曲がってみると、岸に、一艘のカヌーがつないであった。
ココンが中に乗りこんで、おいどんたちに手を振っている。
「こら、なにやってるんだ、ココン！」
おいどんがたしなめたが、ココンは意に介する様子はなかった。それどころか、
「おいどん、これに乗っていこ」
なんていっている。
「このあたりで川遊びをする動物でもいるのかねえ。おもしろそうだから、ちょっと拝借しちゃおうか」

ペルーものんきなことをいう。
が、おいどんは、
「遊んでるひまはないんだ」
と、いって、カヌーの中からココンを抱え上げた。
「つまんないの」
不機嫌そうなココンの手を引っ張って、おいどんはカヌーから離れた。
本当は、カヌーの漕ぎ方を知らないだけだったのだが……。
そんなこんなで、一時間ほど歩いていくと、道がふたまたに分かれていた。
ひとつは川沿いの道、もうひとつは川から離れて、左の坂を登っていく道である。
「どっちにいけばいいのかな？」
「湖にいくんだったら、川に沿っていったほうがいいだろう」
おいどんは、川沿いの道を選んだ。
「うわー！」
そのまま進んでほどなく、ココンが感嘆の声を上げた。
前方の視界が急に開けて、そこに湖が広がっていたのである。
「『西の湖』だね」
真近で見る「西の湖」は、エメラルド色の湖面に太陽の光をキラキラと反射させて、じつ

に美しかった。
ここで血なまぐさい殺人事件が起こったなんて、とうてい信じられない。
湖の両側は切り立った崖(がけ)になっていた。
右側の崖の上は「迷いの森」。左側は「魔の山」に通じる断崖(だんがい)である。昨日は、あの絶壁(ぜっぺき)の上をハゲタカの目を盗みながら通ってきたのだ。
「ルンルンが殺されていたっていうのは、どのあたりなんだろう？」
「崖の下の岩の上って聞いてきたけどな……」
「あれじゃないか？」
ペルーが指さす先に、やぶに囲まれて大きな岩が見えた。
ほかにそれらしき岩は見当たらなかった。おそらくあの岩にまちがいないだろう。
しかし、岩までどうやっていったらいいのかがわからなかった。
水辺(みずべ)はずっとやぶが続いている。道なんかあるのだろうか。
おいどんとペルーが思案しているとココンがふたりを呼んだ。
「こっち、歩けるよ！」
ココンの指さすほうを見ると、水際(みずぎわ)の草むらの中に獣道(けものみち)があるのがわかった。
「いってみよう」
二人は獣道を歩き始める。

ところが十メートルも進まないうちに、三人はこの道を選んだことを後悔し始めた。
そこは、とうてい道と呼べるような代物(しろもの)ではなかったのである。
道らしきものがあったのは最初だけで、あとは完全にやぶの中だった。
頭の上ではやぶ蚊(か)がぶんぶん飛び回り、足元は水たまりだらけ。
「こりゃたまらん」
しかし、そうはいいながらも、いまさら戻るのはしゃくだから、草をかき分けながら、三人は前方の岩めざして進んでいく。
「おや？」
おいどんのつま先に、なにか硬(かた)いものがコツンと当たった。
「どうしたんだい？」
「ちょっと待ってくれ」
おいどんは身をかがめて、草におおわれた足元をまさぐった。
「ややっ、こ、これは！」
おいどんが拾い上げたものは、さびたライフルだった。
「これは……」

ライフルを見て、ペルーもおいどんと同じさけび声を上げた。
「まさか、ルンルン殺害に使われた凶器……？」
ふたりは顔を見合わせてうなずいた。
「とにかく、ここじゃなんだから、あの岩のところまで急ごう」
おいどんたちはペースを上げて岩に向かった。
「ふう……」
やぶを脱出して、岩によじ登ると、最初に出たのがため息だった。
「さてと……」
おいどんは、岩の上に座りこむと、さびたライフルをためつすがめつしてながめた。
「このさび具合から見て、二、三年くらい、あそこに捨てられてあったってかんじだな」
「するとやっぱり、ルンルンはこのライフルで……」
「うん。おそらくね」
おいどんはうなずいてから、背後の崖を見上げた。
「おそらく犯人は、あの崖の上から、ここにいたルンルンを撃ったのだろう。そして、凶器であるライフルを下のやぶの中に投げ捨てた。犯人としては、証拠を隠滅するため、本当は湖の中に沈めてしまいたかったのかもしれない。でも、狙いがはずれてやぶの中に落ちてしまった、とも考えられるな。だけどそうかといって、あの崖の上からじゃ、下に降りてライ

フルを拾いにくるのはいくらなんでも大変すぎる。それでそのままになってしまったんだろう」
「でも、よくいままで見つからなかったもんだね」
「あのやぶの中ではね。オレが見つけたのもほんの偶然だったから……。もしかしたら、あとで犯人はライフルを探しにきたことがあったかもしれない。でも、やぶに埋もれて見つからなかった……。うん？」
「どうしたんだい？」
「まだ、弾が残っているぞ……」
おいどんはライフルの中から数発の弾丸を取り出して、てのひらに乗せた。
「あっ！」
それを見て驚きの声を上げたのはココンだった。
「どうしたんだ、ココン？」
「それ、ぼくも持ってるよ」
「えっ？」
ココンは首にぶら下げていた大きなお守り袋を開けると、中からキラキラ光る小さなものを取り出した。
「ほら」

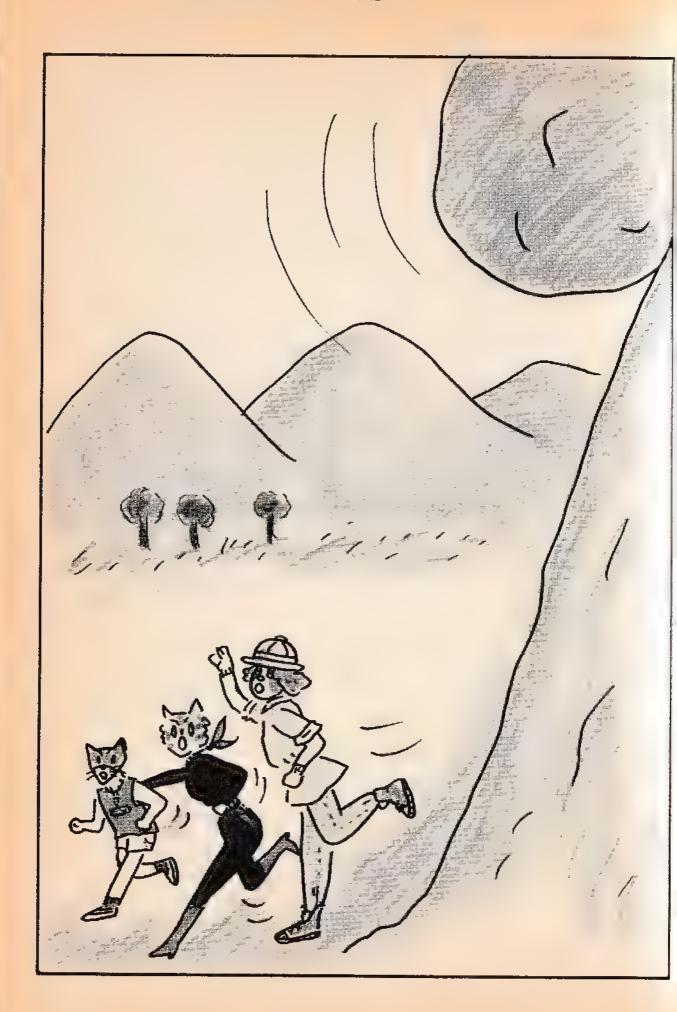
「ちょっと見せてくれ」
おいどんはココンの手から薬莢をひったくるように奪うと、ライフルから取り出した弾丸と比べてみた。
「まったく同じ薬莢だ……。ココン、これはどうしたんだい？」
「パパからもらったんだよ」
「なんだって！」
おいどんとペルーは同時に大声を上げた。

ココンの父親であるゴン吉は、このライフルから出てきた弾丸の薬莢と同じ薬莢を持っていたのだ。
「ということは……」
おいどんとペルーは顔を見合わせた。
このライフルはゴン吉のものではないのか？
だとすれば、やはりゴン吉こそルンルン殺害の犯人だったということになる。
そういえば、ゴン吉はかつて、射撃（しゃげき）を趣味にしていたというではないか。それが、三年ほ

ど前からプツリと射撃(しゃげき)に手を出さなくなったという。
二年前といえば、ルンルン殺害と時期的にピタリと一致する。
それをきっかけにして、ゴン吉が射撃から手を引いたのは、証拠隠滅(しょうこいんめつ)のため、ライフルをここに捨ててしまったからではないのか。
もちろん、それはあくまでもおいどんの推測である。いまの時点で、ゴン吉こそルンルン殺害の犯人だと断定することはできない。
ゴン吉がココンに渡した薬莢(やっきょう)は、偶然、どこかで拾ったものかもしれないし、だれかからもらったものかもしれない。
たとえ、この薬莢がゴン吉のライフルで使用されたものだとしても、それでルンルンを撃ち殺したと決めつけるわけにはいかないのだ。
確かに、このピースランドでライフルを所持している動物は多いとは思えないが、同じ型のライフルを持っている動物だっているかもしれない。それに、このライフルが本当にルンルン殺害に使われたものかどうかでさえ、まだ憶測(おくそく)の域を出ていないのだ。
(しかし……)
と、おいどんは思う。
昨夜(さくや)、おいどんがペルーに語った、ゴン吉に対するパンダの復讐(ふくしゅう)説。ゴン吉がルンルン殺しの犯人だったと考えると、話はすっきりまとまるのだ。このライフルと薬莢は、それを

裏づける重要な証拠品だった。
「なあ、ココン。これはいつ、パパからもらったんだい？」
おいどんは薬莢を指さしてココンに聞いた。
「ずいぶん前だよ。ママがいたころ。だいじに持ってなさいって、ぼくにくれたの」
（ココンの母親がいたころといえば、やはり三年近く前……）
おいどんが考えにふけっていると、その横で、ココンがポツリといった。
「やっぱり、パパが金色パンダを殺したのかな……」
「え？」
おいどんとペルーが驚いて、ココンを見た。
「金色パンダのルンルンって、この鉄砲で殺されたんでしょ。それだったら……」
おいどんは激しいショックを受けた。
ココンもまた、昨日のホェンホェンの話を聞いて、自分なりに推理を組み立てていたのだ。
その結果、自分の父親が殺人犯であるかもしれないという思いに至ったのだろう。
ココンがそこまで考えているとは、おいどんはいままで思ってもみなかった。いまさらながら、ホェンホェンの話をココンに聞かせてしまったことが悔まれる。
いま、ココンの胸のうちは、おいどんの想像以上につらいにちがいなかった。それを考えると、おいどんは必死になぐさめの言葉を探さざるを得なかった。

「いや、ココン。それはまだわからないぞ。同じ型のライフルなんて、いくらでもあるからね」
「じゃあ、なんでパパは殺されたの？」
「いや、それはだな……」
おいどんが口ごもっていると、ココンの毛がいきなりピーンと逆立った。なにかに気づいた気配で、後ろを振り返る。
「あっ、金色パンダだ！」
「えっ！」
おいどんとペルーが驚いてココンの指さす方向を振り向いたその瞬間、崖の上から巨大な岩が三人めがけて落ちてきた。
「うわあーっ！」
その瞬間、おいどんは確かに見た。
崖の上で、一瞬キラリと光った金色パンダの姿を！

あれは幻でも、目の錯覚でもない。
ほんの一瞬ではあったが、おいどんは金色パンダの姿を、自分の目で確かに見たのである。

しかし、いまはそれどころではなかった。
土煙（つちけむり）をあげて落下してくる巨岩をよけるため、三人はいっせいに湖の中に飛びこんだ。
ドッボーン！
三つの水しぶきが上がった直後、ひときわ大きな水しぶきが湖面に舞い上がった。
巨岩もまた、湖に落下したのである。
湖面に波の渦（うず）が、打ち上げ花火のように広がっていく。
その後しばらくはなにも起こらなかった。
十秒、二十秒、三十秒……、と時間が経過していく。
やがて、湖面にぷかっと小さな頭が浮かんだ。
「ぷーっ！」
ココンである。
続いてペルーが、そして最後においどんの頭が浮かび上がった。
どうやら、みんな無事だったようだ。
ほっとひと安心した瞬間（しゅんかん）、ココンの頭がぶくっと湖面に沈んだ。
「ココン！」
おいどんとペルーが同時にさけんで、ココンの頭が沈んだ方向へ泳いでいく。
ココンは水面下で、両手両足をめちゃくちゃに動かしてもがいていた。

それをおいどんがさっと救い上げる。

「ココン、大丈夫か？」

「ケホン、ケホン」

おいどんに抱き上げられたココンは飲みこんだ水をしきりにはき出した。

「さあ、しっかりつかまって」

ココンを抱いたまま、おいどんは岸に向かって泳ぎ始めた。

ところがその瞬間、おいどんの背中に激痛が走った。

「ぶげっ！」

おいどんはすっかり忘れていたのだ。昨日、背中を痛めていたことを。

そんな状態で水泳のような全身運動をしたものだからたまらない。背骨がグキッ、と痛んで、おいどんはココンとともに水の中に沈んでいった。

「おいどん！」

ペルーがあわてて泳いでいくが、おいどんとココンのふたりを助けるのは容易ではない。

まずココンから助けようとすると、おいどんがしがみついてくる。

おいどんを水上に持ち上げようとすると、ココンが引っ張る。

「ぶげげげげ……」

「あばばばば……」

「ぐぼぼぼぼ……」
水中でくんずほぐれつしているうち、ペルーまで水を飲んでしまった。これでは、だれがだれを助けていいのか、まったくわからない。
腹の中にたらふく水を飲みこんだ三人は、どんどん湖の中に沈んでいく。
ぶくぶくぶくぶくぶくぶく……。
ここまできておきながら、三人そろって溺死してしまうのか。
おいどん、絶体絶命のピンチ！
薄れゆく意識の中で、おいどんはココンの身体を必死で抱きしめた。と、そのとき、おいどんの身体が強い力によってズボッと水上に持ち上げられた。
「うげぼっ！」
水をはきながら、驚きの声を上げるおいどん。
いつの間にかおいどんの身体は、腕の中のココンとともに空中に浮かんでいた。
横を見ると、ペルーの身体も空中に浮かんでいる。
しかも、眼下の水面がみるみるうちに下へと遠ざかっていくではないか。
「な、なんだ、こりゃあ！」
ふと上を見上げると、そこに不気味に曲がった巨大なくちばしがあった。
「うわぁーっ！」

おいどんたち三人は、ハゲタカにつかみ上げられていたのである。
「たすけてくれーっ！」
おいどんは、ハゲタカの足に首根っこをつかまれたまま、無我夢中で身体を揺さぶった。
腕の中では、ココンが「きゃーきゃーきゃー」とわめいている。
一難去ってまた一難とはこのことである。
溺死を逃れることができたとはいえ、ハゲタカにつかまってしまっては少しも助かったことにはならないではないか。
だが、ハゲタカの声は意外にもおだやかだった。
「おいおい、そんなに暴れるな。落っこちてしまうじゃないか」
「そ、そんなことといったってぇ」
「人がせっかく助けてあげようっていうのに、こわがるんじゃない」
「助けてくれるだって？」
おいどんには、ハゲタカのいっている意味がわからなかった。
「そうよ」
ハゲタカは激しく羽ばたきすると、おいどんとペルーの身体をつかんだまま、崖の上に舞

い降りた。
「ふえーっ」
やっと地上に降ろされたおいどん、ペルー、ココンの三人は、解放感と脱力感で、その場にへたりこんだ。
「あんた、昨日のハゲタカだろ」
ペルーが、目の前で翼を休めているハゲタカをにらみつけながらいった。
まだ、警戒心は解いていない。
「そのとおり」
「昨日はあたしたちを襲っておきながら、今日は助けるって、どういうことなんだい」
「昨日はあんたたちが悪いんだぜ。おれたちのテリトリーに無断で入りこんできたんだからな」
「べつに悪気があったわけじゃ……」
「いいわけ無用。どんな理由があろうと、おれたちのテリトリーに無断で入りこんでくるやつには容赦はしねえ。おれたちにも生活っていうもんがあるんだからな。よそものに荒らされたくないってわけよ」
「……」
「だが、今日はちがう。あんたらがいたのは湖の上、いや、中っていったほうがいいかな。

「いずれにしろ、おれたちのテリトリー外だったわけだ。おれもべつに、獲物を探してたわけじゃない。ただ、ちょっと散歩してただけでな。そしたらあんたらが、溺れかかってるじゃないか。ほっとくわけにはいかんだろう。だから助けたのさ」
「ふうん……」
話を聞いてみれば、このハゲタカも悪いやつではなさそうである。
おいどんたちの警戒心もしだいに解けてきた。
「それにしても、なんで湖の中になんか飛びこんだんだい？　まあ、暑いのはわかるけどよ」
「そうだ！」
ハゲタカの言葉を聞いて、おいどんは立ち上がった。
「確かに金色パンダがいたのはこのへんだよな」
といいながら、湖に面した崖っぷちのほうへかけていく。
「ここだ！」
おいどんがひざまずいた地面には、岩を転がした跡がなまなましく残っていた。
崖の下をのぞきこむと、さっきまでおいどんたちが座っていた水辺の大岩が見える。まちがいなく、金色パンダはここからおいどんたちめがけて岩をつき落としたのだ。
「おい、あんたいま、金色パンダとかいったな」

おいどんの後ろからハゲタカが声をかけた。
「ああ。それがなにか……」
「金色のパンダについてなら、めちゃくちゃくわしい男をおれは知ってるぜ」
「えっ！」
「この森の奥に住んでいる元保安官のコアラでね。ちょっと変わり者だけど、根はいいおっさんだぜ。なんなら、おれがこれから案内してやろうか」
そのコアラこそ、リンリンがいっていた、ルンルン殺しを捜査していた保安官かもしれない。
「どうする、おいどん？」
ペルーがいった。金色パンダを追うか、コアラのところにいくか、聞いているのだ。
「コアラに会いにいこう。いまから金色パンダを追っても、おそらく追いつかないだろう。それに、オレには金色パンダの正体は、だいたい目星がついているしね。いまは、少しでも、多くの手がかりをつかんでおきたいんだ。ハゲタカさん、頼むよ」
「よおし、それなら、もういっちょ空中散歩を楽しむか」
翼を広げたハゲタカを見て、ペルーが微笑（ほほえ）んだ。
「そういえば、まだ助けてもらったお礼をいってなかったね。あらためて感謝するよ」
「なあに、いいってことよ。ああ、それからおれの名はギョロっていうんだ。ギョロ目だか

らな」

ギョロは、大きな目をギョロッとさせて笑みを浮かべた。

第八章　おいどん、推理する

危険はないとわかってからの空の旅は爽快そのものだった。

雄大なパノラマを眼下に見下ろしながら、おいどんたち三人をつかんだハゲタカのギョロは、「迷いの森」の上空を快適に進んでいく。

「うわーい！」

とココンが、おいどんの腕の中で大喜びしている。

ギョロは、三人をしっかりと両足で抱えながら、大きなカーブを描くと、ゆっくりと高度を下げていった。

眼下の森の中に、小さな公園ほどの空き地が見えた。

ギョロは、周囲の木々をよけるようにして、そこへ舞い降りていった。

「ここだぜ」

おいどん、ペルー、ココンの三人は、ギョロの足から地面へ飛び降りた。

と突然、頭の上のほうからダミ声が聞こえてきた。

「よお、ギョロじゃねえか。そんなにお客さんを連れてどうしたんだい」

声のしたほうを見ると、木の枝に腰かけて酒を飲んでいる浴衣姿のコアラがいた。
「おっさん、あいかわらずだな」
ギョロはニヤリと笑って、コアラのいる木のほうへ歩いていった。
コアラというから、おいどんは、もっとかわいらしい顔を想像していたのだが、予想は大きくはずれた。
枝の上で酒瓶を片手にしているのは、コアラはコアラでもひねた目つきをした赤ら顔の老コアラだった。かわいらしいというより、むしろ、憎たらしいといったほうがいいくらいだ。
「金色パンダのことで、こいつらがおっさんに話を聞きたいというんでね」
コアラに向かって、ギョロがいった。
「金色パンダ？」
その言葉を口にしたとき、コアラの眉間にしわがよった。
「ああ。おっさんが昔、いつもおれに話してくれた金色パンダのことよ。あのころは、おれもよく捜査にかりだされたもんだったぜ」
だが、コアラの返事は意外にもつれなかった。
「そんなことはもう、忘れちまったね」
そういって、プイと顔をそむけると、ふたたび酒を飲み始める。
「なにいってんだ、おっさん。以前はしょっちゅう、そのことを話してたじゃないか。金色

パンダを殺した犯人を必ず見つけてみせるんだって」
「昔の話だ」
なぜかコアラは金色パンダのことには触れたくない様子である。
「そいつは困ったな……」
ギョロは自分がおいどんたちを連れてきてしまった手前、困惑して頭をかいた。
「まあ、いいや。一応おれの友だちを紹介しとくぜ」
ギョロはおいどんたちをコアラに紹介した。
「で、この人がコアラのおっさん。いまは引退しちまったけど、昔はこの森の名保安官だったんだ」
「はじめまして。で、お名前は？」
おいどんが聞くと、コアラは酒をあおりながら、めんどうくさそうにいった。
「名前なんかねえよ。好きに呼んでくれていい」
まったく無愛想（ぶあいそう）な男である。
だが、そんな老コアラもなぜかココンにだけは興味を示したようだった。
「おい、ぼうず、おめえ、確かココンとかいってたな」
「うん」
ココンの返事を確かめると、コアラは意味ありげにうなずいた。

「なにか、ココンのことで……？」
おいどんが探りを入れると、コアラはまた酒を飲みだした。
「いや、なんでもねえ。ただ、ちょっとな……」
「それよりもおっさん、さっきの話なんだけどさ……」
会話がとぎれてしまったので、なんとか間をもたせようと、ギョロが横合いから口を出した。
コアラはまた、渋い顔つきをした。
「金色パンダのことか。それならさっきもいったように、なにも話すことはないぜ」
「そう、つれないこといわずにさ。こいつらも遠くからわざわざやってきたんだ。話だけでも聞いてやってくれよ」
「悪いが、お断りだね。おれはもうその話はしたくないんだ。帰ってくれないか」
コアラはあくまでもかたくなである。
その様子を見て、ついにたまりかねたようにペルーがいった。
「コアラのおっさん、あんたももとは保安官なんだろ。それだったら殺人事件の犯人探しに協力してくれたっていいじゃないか」
「昔の殺人事件なんて、おれにはもう、どうでもいいことだ」
「昔の殺人事件じゃないよ。あたしたちが調べてるのは今の事件なんだ。この子の父親が金

色パンダに殺されたんだよ！」
「なに、ゴン吉が殺されたって！」
コアラが持っていた酒瓶（さかびん）が地面に落ちて割れた。
さすがに、ゴン吉殺害のニュースは、まだこのあたりには届いていなかったようだ。
しかし、なぜこのコアラは、ココンの父親がゴン吉だということを知っていたのだろうか。
そんなことは、だれもひとこともいっていないのに。
「それは本当か！」
枝から飛び降りたコアラは、ペルーに詰め寄った。
「ああ。それにさっきあたしたちも、金色パンダに殺されそうになった……」
「まさか……」
コアラは信じられないといった様子で絶句したが、やがて言葉を続けた。
「わかった。話を聞こうじゃないか」
「それはありがたい！」
おいどんが瞳（め）を輝かせて、横からコアラの手を握った。
が、コアラはピシッとその手を払いのけた。
「気やすくさわんじゃねえ」
「は、はい。すみません……」

「まあ、ここじゃなんだから、おれんちへきな」
　おいどんは肩をすぼめながら、コアラのあとについていった。

　コアラについて森の中を進んでいくと、前方に、南方の王宮を思わせる大きな建物が見えてきた。パンダの家ほどではないが、手入れもいき届いた、かなり豪華な建物だった。
「あれがコアラさんの家ですか。立派なんですね」
　おいどんがいうと、コアラはまた不機嫌そうな声を出した。
「あんなのは、おれの家じゃねえ」
　コアラは建物の脇を通り抜けると、その裏手の木の下に建っている、ほったて小屋のような小さな家に入っていった。
「おれの家はここだ」
「だから変わり者っていっただろ。本当はあのでっかい家がおっさんの家なんだけど、あんなとこにゃ住めねえっていって、自分でつくったこのほったて小屋に、家族と別に住んでるのよ」
　おいどんの耳元でギョロがささやいた。
　小屋の中は、三畳ほどの汚い部屋がひと間しかなかった。家具と呼べるようなものはなに

コアラ、おいどん、ペルー、ココン、ギョロの五人が座ると、あとは、身動きできるスペースもなかった。

「さてと、話を聞かせてもらおうか」

上座（かみざ）であぐらをかきながら、コアラがいった。

「ちょっと待ってください」

おいどんが、横に座ったココンに目をやった。

これからおいどんがしゃべろうとしている話には、ゴン吉犯人説もふくまれている。湖でのこともあるし、そんな話をココンに聞かせるわけにはいかなかった。

「ココン、あたしと一緒に、外で遊ぼう」

おいどんの気持ちを察したペルーが立ち上がったが、ココンは首を横に振った。

「ぼく、ここにいる」

「おいどんたちには、大人（おとな）の話があるんだ。だから……」

「パパが金色パンダを殺したかもしれないってことでしょ。だったら、ぼくも聞く！」

ココンはきっぱりといいきった。うろたえたのは、むしろおいどんたちのほうだった。

「そ、そんなことじゃないんだ。ココン、お願いだから、おとなしく外でペルーと遊んでてくれないか」

「やだっ！　ぼくは本当のことが知りたいんだ！」

ペルーが抱き上げようとしても、ココンはてこでも動かない。
「わがままいわずに、ココン、いこ」
「やだ、やだ、やだ！」
ココンとおいどんたちのやりとりを見ていたコアラが横から口を出した。
「いいじゃねえか。この子にも聞かせてやれば」
「しかし、そうはいっても……」
「もう、この子もある程度のことはわかってんだろう。それなら、いまさらかくしだてする必要はねえよ。本当のことを話して、現実を知らせてやったほうが、この子のためにもなる。なあ、ぼうず」
「うん！」
ココンの返事を聞いて、コアラは微笑んだ。
「よし。それでは、おいどんとやら、あらためていう。話を聞かせてくれ」
「わかりました……」
ついに、おいどんも折れて、話を始めた。いままでのいきさつ、自分の考えをこと細かに、コアラに説明していく。その中には、もちろん、ゴン吉犯人説もふくまれていた。
話がその件に至ったとき、ココンはおいどんの顔を見つめていった。
「やっぱり、パパが金色パンダを殺してたんだね」

おいどんはいったが、ココンは口を真一文字に結んでなにも答えなかった。
話がすべて終わると、コアラは感慨深げにうなずいてみせた。
「なるほどね……」
途中の反応から見て、このコアラが三年前の事件についてかなりくわしく調査していたのは疑いようがなかった。
しかしコアラは、自分の意見はなにひとつ述べず、おいどんに質問した。
「で、おめえは、何者かが金色パンダに変装して、ゴン占に復讐したと考えているんだな」
「ええ。そして、真相を悟られるのをおそれた犯人は、『西の湖』で、オレたちを殺そうとたくらんだ。これがオレの考えです」
「そこまで考えたんなら、犯人の目星もついているんだろう」
コアラがいうと、横からペルーも口を出した。
「さっき、あんたもそんなことをいっていたね」
「ああ」
おいどんはうなずいた。
「で、だれなんだい、犯人は?」
ペルーが聞くと、おいどんはゆっくりといった。

「ベンベンです」

「ベンベン？」

ペルーの問いかけに、おいどんはうなずいた。

「どうしてわかったんだい？」

「『西の湖』に現れた金色パンダだよ」

おいどんはいった。

「前にもいったとおり、今回の金色パンダは、『北の竹林』にいる三人のパンダのうち、だれかが変装(へんそう)しているものだと、オレは思っていた。そんな考えをいだきながら、『西の湖』にいくと、崖(がけ)の上に金色パンダが現れた。おそらく、オレたちのあとをつけていたんだろう。『西の湖』にいくとき、途中に分かれ道があったよね。あそこを左にいくと、崖の上に出るのにちがいない。金色パンダは、オレたちが、湖の岸へ向かうのを確かめてから、崖の上に登っていったんだ」

「そうしておいて、崖の上からあたしたちに岩を落としたんだね」

「うん。だが、そのおかげでオレは、金色パンダの正体をつかむことができたんだ」

「というのは？」

「考えてもみたまえ。あれだけの巨岩を落とすには、かなりの力が必要だ。老人や女ではとても無理だろう。となると、実行可能なのはただひとり……」
「そうか。確かにベンベンしかいないね」
「それに、オレたちに、『北の竹林』に泊まっていけといったのもベンベンだ。おそらくやつは、オレたちをひきとめておいて、襲うチャンスを狙っていたんだろう」
「そう考えると、あの湿布薬もあやしいね。あれは、おいどんの鼻を効かなくするための罠だったんじゃないのかな」
「たぶんね。ただ、ベンベンにしてみれば、オレたちがケガをすることは予測できなかったわけだから、どういうつもりで湿布薬を持ち歩いていたのかはわからない。まあ、そのあたりのところは、本人をとっちめてみるしかないだろう」
「でも、ベンベンにはアリバイがあるよ」
「それについても、見当はついている。やつはカヌーを使ったのさ」
「カヌー？」
「川の途中にあっただろう。犯行の帰り道、ベンベンは、あのカヌーを使って、川を下ってきたにちがいない。川の流れは早い。地上をいくより、かなり時間を短縮できるはずだ」
「だけど、いくらなんでも四時間で往復するのは……」
「夜中の二時まで、星を見ていたというのは、リンリンに偽証させたんだろう。だとすれば、

夜の九時から、朝の六時まで、まるまる九時間は使える。行きはともかく、帰りにカヌーを使えば、九時間で『北の竹林』と『草原の村』を往復するのは不可能ではないと思う。コアラさん、どう思います？」

おいどんが意見を求めると、コアラはうなずいた。

「まあ、おめえのいうとおりだろうな。金色パンダの正体は、ベンベンにまちがいあるめえ。だが、いまの推理だけじゃ、ベンベンを逮捕できるだけの決定的な証拠にはならねえぞ」

「それはわかってます。しかし現場に戻って、匂いを嗅ぎ直してくれば問題はないでしょう」

するとコアラは、否定的な意見を口にした。

「そううまくいくかな。もし、ベンベンが犯人なら、おめえが『草原の村』で匂いを嗅ぎ直してくるのをおとなしく待っているほど、ばかじゃないと思うがね」

「というと……」

「どっかに逃げちまうかもしれねえってことよ」

「そうか！」

おいどんは初めてその可能性に気づいて、立ち上がった。

「こうしちゃいられないぞ！」

あわてて家を出ていこうとするおいどん。

それを、横で話を聞いていたギョロが押しとどめた。
「まあ、あわてなさんな。あんたはまだ、コアラのおっさんとの話が残っているだろう。『北の竹林』にはおれがいって見張りをしててやるから、あんたは話を続けてな」
「それは助かる」
「じゃ、いってくるぜ」
ギョロはVサインをつくって、家から飛び出していった。

ギョロを見送ったおいどんは、コアラに向き直った。
「ところでコアラさん、あなたはどうして、三年前のルンルン事件から手を引いてしまったんです？」
その話題になると、コアラは急にさみしげな表情をした。
「おめえにゃわからねえよ」
「あなたにも、あの事件の犯人の目星はついていたんじゃ……」
「そうかもな……」
「やっぱり、ゴン吉さんが……？」
コアラは答えなかった。

「知っているのなら教えてください。わたしの意見をさんざん聞いておいて、自分だけなにもいわないというのは、フェアじゃないですよ」
「そうだよ、おじさん。ぼくに本当のことを教えてよ！」
おいどんだけではなく、ココンにも詰め寄られると、コアラはあきらめたようにため息をもらした。
「このぼうずにかかっちゃかなわねえな。それに今回の事件は、三年前の事件をちゃんと片づけておかなかったおれにも責任がある。おめえらに会わせたいひとがいるから、ついてきな」
コアラは立ち上がると、重そうな足どりで家の外へ出ていった。
「どこへいくんです？」
だが、コアラはなにもいわずに歩いていく。おいどんたちは、しかたなく、そのあとにしたがった。
「どこへいくの？」
ココンがおいどんに聞く。
「さあ……」
おいどんたちの不審をよそに、コアラはどんどん森の奥へ進んでいった。
やがて、小さいが品のいい木造の家が、木陰に見えてきた。
「ここは？」

おいどんの問いかけには答えずに、コアラは家の戸をノックした。
「ユキさん、いるかい？」
「はーい、どなた？」
中から女の声が聞こえてきた。
その声を耳にしたココンの毛が、電流に打たれたように逆立った。
内側からドアが開けられた。出てきたのは、上品なメスのキタキツネだった。
「ママ！」
ココンがさけんだ。

「……！」
キタキツネの婦人は、目を見開いて、ボーゼンとその場に立ちつくした。
しばらくは、目の前に幻（まぼろし）でも見ている様子だった。
しかしやがて、顔をくしゃくしゃにゆがめると、ココンに走り寄った。
「ココン！」
「ママ！」
ココンも、母親に向かってかけ出していた。

が、突然、ココンの中でなにかがはじけた。
ココンの足が止まり、出かかっていた涙が止まった。
それどころか、抱きしめようとする母親の手を払いのけると、一歩後ろに飛びのいた。
「ココン……？」
両手のもっていきばを失った母親は、信じられない、といった表情で、ココンを見つめた。
その瞬間、悲しみに満ちたさけび声が、ココンの口をついて出た。
「どうしてぼくを捨てたんだ！」
ココン自身、思いもよらなかった言葉だった。
どうしてそんな言葉が出てしまったのだろう？
あれほど会いたかった母親なのに……。
ただ、いざ母親を前にしてみると、素直にその胸に飛びこむことは、どうしてもできないのだった。三年前、自分を捨てて家を出ていった母親に対して、深いわだかまりを持っていたことを、ココンは初めて知った。
ココンのさけびを聞いた母親は、なにかに打たれたように肩をふるわせた。そして、スローモーションのように、地面にひざまずいた。
「ごめんなさい……ココン……」
消え入るような声で、母親はいった。

ココンは、母親の姿を見下ろしながら、歯をくいしばって、必死に涙をこらえていた。いまのココンには、それ以上のことはなにもできなかった……。

「そうですか……。主人は亡くなりましたか……」
家の中で、おいどんから事情を聞いたココンの母親ユキは、静かに目を閉じた。横ではココンが、じっと床の一点を見つめていた。あれからココンは、ひとことも口を聞いていなかった。
「ぼうず、おまえの母さんはな、ずっとおまえのことを心配してたんだぞ。いいかげん、許してあげたらどうだ」
コアラがココンの頭に手をかけたが、ココンの表情は変わらなかった。
「いいんです。この子に許してもらおうとは思いません。すべてわたしが悪いんですから……」
「どういうことです？　話してもらえませんか」
「ええ……」
ユキは目を伏せると、静かに話し始めた。
「あれは、いまから三年ほど前のある夕方のことでした。その日、射撃を楽しみに森へ出か

けていた主人が真っ青な顔をして戻ってきたんです。いまにして思えば、それが、そもそもの始まりでした……」

ユキの言葉に、おいどんはうなずいた。ココンも初めて顔を上げて、母親の話に耳を傾けていた。

ユキは話を続けた。

「主人は頭をかかえながら、こういいました。『とうとう、やってしまった』と。でも、そのときはそれ以上のことは、なにも教えてくれませんでした。ただ、出がけに持っていったはずのライフルがないのが、わたしには気がかりでした」

「ゴン吉さんは、ライフルを持たずに帰ってきた？」

「ええ。ライフルはいつまでたっても出てきませんでした。どこにやったのか聞いても、教えてくれません。それどころか翌日、ほかに持っていた銃もすべて処分してしまったのです。あんなに大好きだった射撃を、その日以来主人は、いっさいやらなくなりました」

おいどんは黙ってうなずいた。

「主人が毎晩うなされるようになったのもその日からです。そして次第にノイローゼ気味になっていったんです。やがて主人は、わけのわからないことを口走るようになりました」

「わけのわからないこと？」

「『金色の亡霊がおれを殺しにくる』というんです。わたしにはなんのことか、さっぱりわ

かりませんでした。そんなある日、アランさんがうちにたずねてきたんです」
「アランさん？」
おいどんが聞くと、ユキは不思議そうな表情をして、老コアラのほうを見た。
コアラは困ったような顔をして、ユキから視線をそらした。
どうやら、アランというのが、このコアラの本名らしかった。しかしかれは、自分にあまりにもふつり合いな名前が照れくさいのにちがいなかった。
「その当時、保安官だったアランさんは、金色パンダが殺された事件を調べているので、主人に会わせてほしいといってきました。それを聞いて、初めてわたしは、主人が殺人事件の容疑者になっていることを知ったんです」
「金色パンダのことは、あなたも知っていたんですか？」
「ええ。そのころ主人が、よく話していましたから、射撃をしに森のほうへ出かけることの多かった主人は、金色パンダの噂をよく耳にしていたようでした。そんなとき主人は、いつも不機嫌になって帰ってくるんです。あんなパンダのどこがいいんだ、ただもの珍しいだけじゃないかって」
「ゴン吉さんは、金色パンダの人気を妬んでいた？」
「はい。金色パンダが、宮殿のような屋敷に住んでいるらしい、というのも気に入らないようでした。主人は、とてもプライドの高い性格でしたから……」

「なるほど」

「ただわたしは、金色パンダが殺された事件というのは、アランさんに聞くまで知りませんでした。それに、主人とアランさんがどういう会話をしたのかもまったく知りません。だけど、アランさんにいわれて、主人に対する疑惑が芽生えたのは確かです。アランさんが帰ったあと、わたしは主人に問いただしました。あの日、あなたは金色パンダを殺してきたのではないかと……」

ユキはそこで、いったん口をつぐんだ。

ココンを見た。

ココンは黙って、ユキを見つめていた。

ユキは、深呼吸をしてから、話を続けた。

「当然のことながら、主人は怒りました。おれを疑うのかって。でもわたしは、引きませんでした。主人に対する疑惑が次から次へとこみ上げてきて、おさえることができなかったのです。いつの間にかわたしたちは、大喧嘩をしていました。そして、感情がたかぶってきたわたしは、つい、家を出るといってしまったのです」

「……」

「翌日、わたしは主人とココンを残して家を出ました。ココンのことは気になりましたけど、感情的になっていたわたしには、とにかく家を出ることが第一でした。……そうなんです。

わたしは自分の感情だけにとらわれていて、ココンの気持ちを考えてあげることができなかったんです。母親として、失格ですよね。こんな母親を、ココンが許せないのは、あたりまえです……」

ユキの言葉は、消え入るように小さくなっていった。

話を聞いていたココンは、細かく視線をさまよわせた。心が揺れ動いているのがわかった。

「そんなに自分を責めるんじゃない、ユキさん。あんたは、いつもココンのことばかり心配していたじゃないか」

コアラがユキの肩に手をかけた。

「家を出てから、ユキさんはどうしたんですか？」

おいどんが聞いた。

答えたのは、コアラだった。

「このひとはな、いくあてもなく、森の中を歩いていたんだ。そんなとき、おれと出会った。そこでとりあえず、ここへ連れてきたってわけよ」

「アランさんには本当に感謝しています。身を置ける場所を与えてもらったばかりか、何度も、家へ帰れって説得していただいて……。だけど、わたしは意地でも帰るつもりはありませんでした。そうしてここで暮らすようになったんです……」

「だけど、三日もしたら、あんたは帰るっていい始めたよな。ココンをひとりにしてはおけ

ないからって。ところが、帰るに帰れない事情ができちまった……」
「なにがあったんです？」
「葬式だよ、ユキさんのな……」
「葬式？　にせの葬式のことですか？」
「そうだ。ゴン占というのは非常にプライドの高い男でな。妻に逃げられた男なんていわれたくなかったんだろう。それで、ユキさんを死んだことにしてしまったんだ。そうなるとユキさんは、帰りたくても帰れなくなった。のこのこと帰っていこうものなら、幽霊にされちまうのがオチだろう。どう考えても、いままでどおりの生活に戻れるわけがねえ。ユキさんが帰らなかったのは、そういう理由があったからなのさ」
「そのあとは、ずっとここで？」
「ええ」
ユキはうなずいた。
その横から、コアラが口を出す。
「おれは知ってるぜ。あんたが何度か、ココンに会いにいっていたことをな」
「知ってらしたんですか？」
ユキは驚いて顔を上げた。
「ああ、夜中にあんたが『草原の村』のほうへ走っていくのを、何度か見たことがあるからな」

―でも、ココンに直接会う勇気はありませんでしたわ。いつも、家の外から部屋をながめるだけで……」
ユキはうつむいた。
「なあ、ココンのぼうずよ」
コアラは腰をかがめて、ココンの目を真正面から見つめた。
「おまえもこれで少しはわかっただろう。母さんが、どんな思いで家を出ていったか、どんなにおまえのことを思っていたかがよ。どうだ、もうそろそろ、母さんを許してやっちゃ」
ココンはしばらく、なにもいわずに立っていたが、やがておずおずと母親の胸に頭をこすりつけた。
「ココン！」
ユキがしっかりとその身体を抱きしめると、ココンは小さな声でつぶやいた。
「ママ……」
その目からは大粒の涙が流れていた。おいどんが初めて見る、ココンの涙だった。

「その後、ゴン吉さんとはいちども連絡をとらなかったんですか？」
ココンとユキの和解が一段落すると、おいどんは質問を再開した。

いまココンは、母親の横に、寄りそうように腰を下ろしていた。
「いえ、家を出て一年ほどたってから、いちどだけ主人から手紙がきたことがありました」
ユキはいった。
「手紙？　ゴン吉さんは、あなたがここにいることを知っていたんですか？」
「おれが教えたのさ」
コアラがいった。
「あなたが？」
「ああ。あのころおれは、ルンルンを殺したのはゴン吉にまちがいねえとにらんでいた。だが、やつを捕まえるためには、決め手となる証拠がなかったんだ。そこでおれは、ユキさんがここで暮らすようになってからも、ゴン吉の家に通い続けて、やつがボロを出すのを待った。おれは、あんたみてえに有能じゃねえから、凶器のライフルを発見することなんてできなかったしな」
コアラに有能といわれたおいどんは、
「いやあ」
といって頭をかく。
コアラはそれにはかまわず話を続けた。
「だけどゴン吉は、いつまでたってもボロを出さなかった。そこでおれは、やつにユキさん

の居場所を教えたわけよ。そうすれば、やつがここにすっとんできて、ユキさんにだけは犯行を自白するかもしれねえって考えたんでな。だが、おれのそのもくろみは見事にはずれた。やつはいちどたりともここにはこなかったんだ。そのかわり、手紙がきたってわけさ」
「手紙には、なんて書いてあったんです？」
おいどんが聞くと、ユキは静かに口を開いた。
「わたしに対する、主人からのお願いが書いてありました」
「お願い？」
「ええ」
「どんなお願いです？」
「口で説明するよりも、手紙を読んでもらったほうがいいと思います」
そういってユキは、壁際の物入れタンスの引き出しから、一通の封筒を取り出した。
「これです」

ユキから封筒を受け取ったおいどんは、はやる気持ちをおさえながら、中の便箋を取り出した。そこには、達筆で次のようにしたためられていた。

「ユキよ、きみは私をさぞかし恨んでいることだろうね。
　自分の世間体のためだけに、きみを死者にしてしまったのだから、なんと思われようと、わたしにはいいわけの余地がない。いまでは、きみに対する謝罪の気持ちでいっぱいだ。
　しかし、いまさらあやまってみてもどうにもならないことは、私にもわかっている。きみだってここに戻ってくるつもりはおそらくないだろう。私たちは、もう二度と会わないほうがいいのだろうと思う。
　だが、私には、どうしてもきみにいっておきたいことが残っている。
　それは、あの事件のことだ。
　そう、金色パンダ殺害事件のことだよ。
　いまさらきみにかくしだてしてもしかたのないことだ。正直に告白しよう。
　金色パンダを殺したのは、私だ。
　あの日、私はいつものように、森へ射撃の練習に出かけた。しかし、いまになって思えば、つい調子にのって、『西の湖』まで足を延ばしたのがいけなかったのかもしれない。
　湖を見下ろす崖の上から、空に向かって、一発目の弾を撃ったときだ。崖の下から女の声が聞こえてきた。
　崖の下を見下ろすと、水辺の岩の上に金色パンダが座っていた。
　そして、私に向かってこういったのだ。

『だれかと思ったら、人気落ち目のキタキツネさんじゃない。でも、こんなところで鉄砲撃つのはやめてくださらない。うるさくて、昼寝もできやしないわ』
そういうと、金色パンダは、私に背を向けて、岩の上に寝そべってしまった。
私の中で、金色パンダに対するいいようのない憎しみがふくれ上がってきた。
人気落ち目、人気落ち目……。
金色パンダは、私のいちばん気にしていることを口にしたのだ。
私は衝動のおもむくまま、金色パンダに向かって発砲していた。
気がつくと、岩の上で、背中から血を流した金色パンダが動かなくなっていた。
私はボーゼンとして、崖の上に立ちつくした。
ライフルが、力の抜けた私の手から滑り落ちた。ライフルはそのまま、崖の下のやぶの中に落ちていった。
その音で、私はやっと、自分のしたことの重大さに気がついたのだった。
あわてて周囲を見わたし、だれもいないのを確かめると、地面に落ちていた薬莢を拾い、足跡を消した。
しかし、崖下に落ちたライフルを拾いにいくだけの余裕は私には残っていなかった。
私は、一目散に森を抜けて、家にかけ戻った。
そのあとは、きみも知っているとおりだ。

家に帰ってくると、私は後悔の念におそわれ、毎晩のようにうなされた。ライフルが発見されはしないだろうかということも心配だった。
やがて私はノイローゼ気味になり、金色パンダの幻覚さえ見るようになった。
きみが家を出ていったのはそんなときだ。世間体のためとはいえ、きみを死んだことにして、にせの葬式まで出したのは、ノイローゼのせいもあったかもしれない。
きみには本当にすまないと思っている。そしていままでは、自分の身勝手な思いこみで殺してしまった金色パンダにも、謝罪の気持ちでいっぱいだ。
いずれ私は自首するつもりでいる。しかし、いまはまだ、その時期ではない。
そう、私にはココンを育てるという使命が残っているからだ。
ココンが一人前の大人になるまでは、私がめんどうを見なければならないのだ。
ココンが一人前の大人に成長したとき、私はいさぎよく自首し、法の裁きを受けよう。
だからそれまでは、私をそっとしておいてほしい。私の気持ちをわかってくれとはいわないが、それがきみに対する私の唯一の願いだ」

「これは……」
手紙を読み終わったおいどんは、思わずツバを飲みこんだ。

「これは犯行の告白文じゃありませんか！　見てください」
おいどんは興奮した面持ちで、手紙をコアラに差し出した。
だが、コアラは平然といいはなった。
「おれはいい。それよりも、ココンに読ませてやりな」
「え、いいんですか？」
「かまわんさ。な、ユキさん」
「ええ」
ユキが手紙を渡すとココンは熱心に読み始めた。
「どうだ、ぼうず。そこに書かれていることが真実だ」
ココンが手紙を読み終わると、コアラがいった。
ココンはうなずいた。だが、その目に悲しみの色は見えなかった。現実をしっかりと見すえている強さが、ココンの瞳にはこもっていた。
「強くなったな、ぼうず」
コアラは満足そうに目を細めた。
それを見ていたおいどんが、不思議そうな顔でコアラに聞いた。
「コアラさん、あなたはもしかして、この手紙の内容を？」
「ああ、知っているさ。とっくの昔に読ませてもらったからな」

「なんですって！」
「そうなんです……」
ユキが説明した。
「この手紙が届いたとき、わたしはどうしようか迷いました。アランさんに見せるべきかどうか……。この手紙をアランさんに見せれば、それは主人への裏切り行為になります。でも、このことを自分ひとりの胸にしまっておくのは、わたしにはあまりにも重すぎたのです。結局わたしは、アランさんに見せることにしました。それに、アランさんが主人を捕まえてくれれば、ココンを引き取ることができる。そういう気持ちもなかったといえばうそになるでしょう」
「しかし、それならばどうして、ゴン吉を捕まえにいかなかったんです？」
おいどんはコアラに詰め寄った。
そのとたん、コアラは顔をしかめた。なにも答えなかった。
おいどんはもういちどたずねた。
「ねえ、なぜです？　この手紙があれば、ゴン吉を捕まえる証拠（しょうこ）になるじゃありませんか」
「その手紙を読んじまったからだよ……」
コアラは下を向いて、ボソリといった。
「え？」

「おれはずっと、ゴン吉を捕らえるための証拠を探すのにやっきになっていた。だがな、その手紙を読んでおれは、ゴン吉を捕まえる気がなくなっちまったんだ……」
「なぜです？　ココンがいたからですか？」
コアラはため息をついた。
「ちがうよ。おめえにゃ、わからねえか？」
「わかりませんね」
「確かにゴン吉はルンルンを殺したかもしれねえ。だけど問題はそんなことじゃねえんだ」
「？」
いったいコアラはなにをいいたいのだろう？
おいどんには、コアラのいっている意味がまるでわからなかった。
「それだけいってもわからねえか。ならしかたねえな。とにかくおれは、それ以来、ルンルン事件の捜査からは手を引いたし、保安官もやめた。むなしくなっちまったんだよ……」
「いったい、なにが……」
おいどんは首をひねった。
この手紙は、コアラにどんな影響を与えたというのだろうか。
なにが、コアラをむなしくさせたというのだ。
おいどんには理解できなかった。

そのとき、家の外から声が聞こえてきた。
「おーい」
窓の外を見ると、ギョロがこちらにかけてくる。「北の竹林」での見張りはどうなったのだろうか。
「どうしたんだ、ギョロ」
窓を開けておいどんが聞くと、ギョロは息せききって答えた。
「どうしたもこうしたもねえよ。ベンベンとかいうパンダの野郎、どっかに雲隠(くもがく)れしちまったんだ！」

「なにっ！」
ベンベンが行方(ゆくえ)不明(ふめい)！
おいどんは窓から飛び出して、ギョロを問い詰めた。
「それは本当か？」
「ああ。おれが『北の竹林』に着いたとき、ベンベンはもういなかったんだ。ほかのパンダに聞いても、まるで知らねえっていうしよ。こいつはどっかにかくれやがったなと思って、あたりを飛び回ってみたんだが、どこにも見あたらねえ。いくらおれでも、森の中全部を調

べ回るのは無理だしな。それで一応、おめえに知らせといたほうがいいかと思って、戻ってきたわけよ」

「そうか、ひと足先に逃げられたか……」

おいどんは舌打ちした。

「どうする？　これから森の中を徹底捜索してみるか？　なんだったら、おれの仲間を総動員させてもいいぜ」

ギョロが申し出た。

「頼めるか？」

「ああ。だが、日が暮れちまうとまずいな。おれたちゃトリ目だからよ、夜になると、まるっきり目が見えなくなっちまうんだ」

「それなら、急いだほうがいいな。ペルー、いこう！」

「ああ」

ペルーも表へ飛び出した。

だが、それに水をさしたのはコアラだった。

「待ちな」

おいどんが窓ごしに振り返ると、家の中からコアラはいった。

「ベンベンを探して、どうするんだ？」

「捕まえるにきまってるでしょう」
「それでおめえは気がすむのか？」
「なにがいいたいんです？」
おいどんは憮然とした表情で、コアラの返事を待ったが、相手はなにも答えなかった。
「オレは警察官です。犯人を捕まえるのが、オレの仕事です」
「けっ、かっこいいこといってくれるよ。おれには絶対はけねえセリフだな」
コアラは額に片手をあてながらいった。
「それならおめえの好きなようにするがいいさ。けど、森の中をいくら探したってむだだぜ」
「どういうことです？」
「おめえも警察官なら、考えてみろや。ベンベンがどこにいくかってことをな」
「？」
「おめえはパンダたちの前で、匂いを嗅ぎ直しに『草原の村』へ戻るっていったんだろう？」
「あっ、そうか！」
おいどんにも、コアラのいっている意味がわかった。
「ベンベンは『草原の村』に……」
コアラはうなずいた。それにまちがいなかった。ベンベンの目的はただひとつ。現場に先

回りして、証拠の匂いを消すことだ。
「ペルー、ギョロ、目的地変更だ」
「あいよ」
「『草原の村』だね」
「ああ、急がなければ……」
はやるおいどんに、ふたたびコアラが声をかけた。
「そんなに急ぐことはねえ」
「え?」
「昼間は人目もある。ベンベンが行動するのは夜になってからだろう。それまでは、どこか近くの森にでも潜んでいるにちがいねえ」
「なるほど。しかし、ここにいてもしかたがない。オレたちは『草原の村』へ向かいます」
いまやおいどんは、はやる気持ちをおさえることはできなかった。
「そうか……」
「コアラのおっさん、ユキさん、どうもありがとうございました。それじゃ」
そのとき、ココンが飛び出してきた。
「おいどん、ぼくもいく!」
「だめだ、ココン。今度ばかりは危険すぎる」

「だいじょうぶだよ」
「いけません、ココン。おいどんさんたちの邪魔になるでしょ」
後ろからユキが、ココンを引きとめた。
ココンはユキとおいどんの顔を交互に見つめていたが、やがて、はっきりといった。
「わかったよ、ママ。ぼく、ここで待ってる。でもおいどん、明日になったらいくからね」
「ああ、待ってるよ、ココン」
確かにこの子は強くなった。心の葛藤を乗り越えて、ひとまわり大きくなったんだと、おいどんは思った。
「じゃあな」
おいどんが、ココンに別れを告げているあいだに、ギョロは翼を広げていた。
「しっかりつかまってな」
「たのんだぜ」
ギョロの足につかまるおいどんとペルー。その背中からコアラが声をかけた。
「おいどんよ、これだけは忘れるなよ。いくら犯人をとっ捕まえたところで、それだけじゃ、事件の解決にはならねえってことをな」
だが、その言葉がおいどんの耳に届いたかどうかはわからない。
おいどんの姿は、すでに空中高く舞い上がっていた。

第九章　かくして、事件は……

「草原の村」は、夜の静けさに包まれていた。
村のはずれ、いまでは主のいなくなったゴン吉の家が、月明かりにボウッと浮かび上がっている。
サクッサクッサクッ……。
闇の中で、かすかに足音が聞こえた。
懐中電灯で足元を照らしながら、家のほうにゆっくりと近づいていく小さな影がある。
ピンキーであった。
おいどんが旅立ってから丸三日。ピンキーは毎晩店を閉めたあと、ゴン吉の家の見回りをすることを日課としているのだった。
(う〜、やだなあ。おいどんはいつになったら帰ってくるのよ)
ピンキーは、夜空にこうこうと輝く満月を見上げて、おいどんを呪った。
べつに深夜の見回りは、おいどんに命じられてやっているわけではない。おいどんの留守をあずかる助手の、当然の務めとして、ピンキーが自主的に始めたのである。

とはいっても、かよわい女の子が夜更けにひとりで見回りするのだから、こわくないわけがない。しかも、殺人事件のあった家である。

それでも昨夜までは、伊太郎が一緒に見回ってくれたから、まだよかった。

ところが今夜は、ピンキーひとりである。

（まったく店長ったら、「もう慣れただろう」なんていって、先に帰っちゃうんだから。どうせ、いまごろは、家でお酒でも飲んでるんだわ）

ぶつぶつぶつ……。

ピンキーは胸の中で文句をつぶやきながら、家の裏手に回った。

その瞬間、ゴウッと強い風が吹き、森の木々をざわざわと揺らめかせる。

「ひっ！」

ピンキーは思わず首をすくめた。

風に吹かれて、巨大な生き物のようにざわめく夜の森ほどこわいものはない。奥からは、「ホウホウホウ」とフクロウの鳴く声が聞こえてくる。

（こんなことでこわがってちゃいけないわ。そうよ、わたしは刑事の助手なんだから。おいどんのいないあいだに、だれかがこの家に忍びこんだりしたら大変でしょ！　わたしが見回らなくて、だれが見回る！）

ピンキーはガッツポーズをつくって、みずからを奮い立たせた。

そのとき前方で、
カタン
という音がした。
ゴン吉の書斎（しょさい）のあたりである。
「だれ？」
ピンキーはささやくような小さな声で、闇（やみ）に向かって声をかけてみた。
「だれか、いるの？」
もういちど聞いてみるが、返事はない。
「だれもいないよね。お願いだから、いないといって……」
自分のいっていることが、まったく理屈にあってないことなど、ピンキー自身、気づいていない。
ピンキーはおそるおそる、書斎のほうに近づいていった。なにかいるとこわいから、懐中（かいちゅう）電灯は向けなかった。
前方はしーん、と静まり返っていた。
やがて、窓が見えてくる。ゴン吉殺害当時と同じく、窓ガラスは壊（こわ）れたままだ。
ピンキーは、そーっと、窓から中をのぞいてみた。
暗くて、なにも見えない。

しかし、何者かが潜んでいる様子はなさそうだ。
ピンキーは、ゆっくりと窓から離れた。
さっきの物音は、どうやら気のせいだったようだ。そうでなければ、風でなにかが倒れたのだろう。
ピンキーは、いくぶんほっとして、書斎の角を曲がった。
そのとたん、ピンキーの口から大声が突いて出た。
「た、たいへん！」
壁の横で、真っ赤な炎をたてて、新聞紙が燃えていたからだ。だれかが放火したにちがいなかった。
ピンキーはあわててジャケットを脱ぐと、炎をたたき始めた。
バサバサバサッ！
ほどなくして、火は消えた。壁に燃え移っていなかったのが幸いだった。
「ふうーっ」
額の冷や汗をぬぐいながら、ピンキーは振り返った。
その瞬間、
「！」
ピンキーは棒立ちになった。

目の前に、見たこともない動物が立っていた。
金色の、パンダ！

「きゃーっ！」
ピンキーの悲鳴が夜空にとどろいた。
悲鳴に驚いた金色パンダは、猛然(もうぜん)とピンキーに襲(おそ)いかかってきた。
しかしピンキーは素早い。ひらりとパンダの手を逃れる。
パンダの手が宙をつかんだ。
「たすけて！」
ピンキーはさけぼうと思ったが、喉(のど)がひきつって声にならなかった。
一度目の襲撃(しゅうげき)をかわされた金色パンダは、怒(いか)りを全身に表しながら、ピンキーに迫ってきた。
「きゃっ！」
ピンキーは必死になって、二度目の襲撃もかわした。
そのままジャンプして、壊(こわ)れた窓から書斎(しょさい)の中に飛びこんだ。
中に入ってしまってから、ピンキーは、

(しまった!)
と思った。
なんで、こんな逃げ場のない、しかも真っ暗な場所に飛びこんでしまったのだろう。
これでは、相手の思うつぼではないか。
ガシャンと大きな音をたてて、金色パンダも中に入ってきた。
その巨体に窓から差しこんでいた月明かりがさえぎられ、書斎の中はほとんどなにも見えない状態になった。
ピンキーは手探りで、廊下へ通じるドアを探した。
(あった!)
右手がドアのノブに触れたとき、ピンキーは全身が押しつぶされるような威圧感を感じた。
月明かりを背中に受けて、金色パンダがすぐ間近に迫っていた。
(神さま!)
ピンキーは、ノブをひねりながら、思いっきり強く、ドアを押した。
が、ドアは開かなかった。
(!)
ピンキーは思い出した。このドアが内開きだったことを……。
しかし、目の前に金色パンダがいては、ドアを内側に引くことはできない。

金色パンダは、ピンキーの身体をドアに押しつけるようにして全身をあずけてきた。
ムギュッ！
ピンキーの小さな身体が、金色パンダに押しつぶされる。
頰にパンダの体毛がこすれて、くすぐったかった。
ピンキーの背後にあるドアが、向こう側から激しくたたかれる音が響いてきた。その音に混じって、なつかしい声が聞こえてきた。
「開かないぞ、体当たりするんだ！」
おいどんの声だった。
（おいどんが助けにきてくれたんだわ）
ピンキーは思った。
しかし、いまのピンキーは、逃げることはおろか、身動きすることさえできなかった。
（どうして、いまごろになって助けにくるのよ。助けにくるなら、どうして、もっと早くきてくれなかったのよ。……ばか）
金色パンダの両手が、ピンキーの首にかけられた。
太い指が、ピンキーの喉にぐっと、くいこんでくる。
（もう、だめだ！）
そう思ったとき、どこかで女の声が聞こえたような気がした。

「やめて！」
とたんに、ピンキーの喉にかけられていたパンダの指が解かれていく。
同時にパンダの身体がピンキーから離れ、全身が急に楽になった。
「いまだ！」
ピンキーは、パンダの身体とドアの透き間からスルリと抜け出した。
次の瞬間、パアーンと、ものすごい音をたてて、ピンキーの真横でドアが開いた。
部屋がパッと明るくなる。
周囲に、おいどんの声が響きわたった。
「ベンベン、逮捕する！」

ピンキーの目の前においどんが立っていた。
「おいどん」
ピンキーは夢中でおいどんに抱きついた。いまほど、おいどんが頼もしく思えたことはない。
「ピンキー！」
ピンキーを抱きとめながら、おいどんもさけんだ。

が、ふと我にかえると、おいどんは不思議そうな顔でピンキーの顔をのぞきこんでいた。
「ピンキー、どうしてこんなところにいるんだ？」
「え？」
ピンキーは、腕の中から顔を上げると、おいどんをまじまじと見つめた。
「助けにきてくれたんじゃなかったの？」
「助けにきた？　だれを？」
パシーン！
いきなりピンキーが、おいどんの頬を思いっきりひっぱたいた。
「な、なにをするんだよ……」
ア然としているおいどんに向かって、ピンキーはまくしたてた。
「わたしがこんなめにあったのは、だれのせいだと思ってんのよ！　おいどんがいないあいだに現場を荒らされちゃいけないと思って、見回りをしてたのに！」
「そ、そんなことといったって、オレはピンキーがここにいるなんてこと、ぜんぜん知らなかったぞ……」
「う～」
おいどんとピンキーがにらみ合っていると、ドアの後ろからペルーが姿を現した。
「ちょっと、痴話喧嘩してる場合じゃないでしょ」

「だれ、このひと！」
ペルーの顔を見て、またピンキーがくってかかった。
「こんなきれいな女、どこから連れてきたのよ！」
「い、いや、旅の途中でちょっとな……」
「ちょっとですってぇ」
「だから、その、さ……」
「おい、なにをやってるんだ」
今度は、ギョロが現れた。
「あ、そうだ！」
おいどんはやっと、本来自分がすべきことを思い出した。
「ちょっと話をそらさないでよ！」
ピンキーは依然として突っかかってくる。
「いまはそれどころじゃないんだ、ピンキー」
「あ！」
ピンキーもようやく、事の重大さに気づいたようだ。冷静になって、部屋を見回してみる。
部屋の中央に、二匹のパンダが立っていた。
一匹は金色パンダ、そしてもう一匹は普通のメスパンダ。

おいどんはせきばらいをしてから、金色パンダに歩み寄った。
「やはりきみが金色パンダだったんだな、ベンベン」
「ああ、そのとおりだ」
金色パンダ——いや、正確には、全身の毛を金色に染めたベンベンは、意外に晴れやかな表情で、おいどんに両手を差し出した。
「なかなか往生際はいいんだな」
ベンベンの両手に手錠のかけられる音が部屋中に響きわたった。
おいどんは、もう一匹のパンダに向き直った。
「リンリンさん、どうしてあなたがここに？」
それは、ベンベンの婚約者リンリンだった。彼女は目を伏せたまま、おいどんの問いに答えた。
「ベンベンのことが心配だったんです。早朝以降、姿が見えなくなったし、それに昼ごろ、ハゲタカのギョロさんという方がみえて……」
「そうだったな」
横からギョロが口を出した。
「おれが、ベンベンはどこにいると、さんざんあんたに問い詰めたもんな」
リンリンはうなずいた。

「それで、もしかしてここにきているのではないかと思って……」
「わたしを助けてくれたのは、あなただったのね」
そういったのはピンキーだった。
「どういうことだ、ピンキー？」
「わたしが、この金色パンダに殺されそうになったとき、後ろから声をかけて止めてくれたのよ。ありがとう、リンリンさん——だったわよね」
ピンキーはリンリンの両手を握りしめた。
「そうだったのか。オレからも礼をいわせてもらうよ、リンリンさん。とにかくこれで一件落着だ。さあ、ベンベン、これから署にいって、くわしい話を聞かせてもらうよ」
おいどんは、ベンベンの脇を抱えてドアのほうに歩き出した。
が、そのときにピンキーが強い口調でおいどんを呼びとめた。
「ちょっと待ってよ、おいどん」
「ん？」
「事件は解決したかもしれないけど、まだ大切なことが残ってるでしょ」
「なんだ、ピンキー」
「このひとのことよ」
ピンキーは、ペルーを指さした。

「このひととはどういう関係なの！」
「だ、だから、それは……」
おいどんにとって、いちばんニガ手な問題が再燃してしまった。しかも、よせばいいのにペルーがピンキーの前におどり出てきた。
「あんたこそなんなんだい？。いきなりおいどんに抱きついたりして」
「あたしはれっきとしたおいどんの助手よ。おいどんとは、この村でずっと行動をともにしてきたんですからね」
「あんたみたいな小娘が助手ねぇ。おいどんもさぞかし迷惑だろうね」
「むう〜、生意気な女ねぇ〜」
ピンキーがペルーをにらみつける。そんなピンキーをペルーがことさら挑発したからたまらない。
「へえ、小娘かと思っていたら、威勢だけは一人前だね」
「なんですってぇ！　許さない、もう許さないわよ！」
「ほお、やろうっていうのかい？」
「お、おい待て、ふたりともやめろ！」
おいどんがあわてて止めに入るが、ふたりがおとなしくいうことを聞くはずがない。
「どいてよ、おいどん。あたし、この女だけは許せないの」

「やれるものなら、やってごらん」
「うう〜」
ついに、ピンキーがペルーに飛びかかった。
ヒラリとよけるペルー。
ふたたびピンキーが飛びかかる。
またもやよけるペルー。
そのくり返しが延々と続けられる。
おかげで、もう部屋はメチャクチャ。壁はみるみる傷だらけになっていく。
「やめろ、やめろ、やめろ〜！」
おいどんは必死にふたりを捕まえようとするが、スピードではまったくかなわない。
その様子を、ベンベン、リンリン、そしてギョロの三人はア然と見つめていた。

翌日、おいどんはピンキーとペルーにひっかかれて傷だらけになった顔で、ベンベンの取り調べをおこなった。
警察署といっても、おいどんの住居兼事務所のことである。
この村には、警察官がおいどんしかいないため、彼の家が警察署の役割もはたしているの

だった。

金色の毛染め薬を洗い落とし、普通の白黒パンダに戻ったベンベンは、サバサバとした表情で犯行を自供した。

その内容は、ほとんどおいどんの推理どおりだった。

「ルンルンのかたきを討(う)つため、ゴン吉を殺したんだ」

と、ベンベンはいった。

旅芸人をしているベンベンは、仕事がら、各地を歩き回ることが多い。その道中で情報収集をおこない、ゴン占がルンルン殺しの真犯人であることを突きとめたということだった。

「そしてあの日、金色パンダに変装(へんそう)してゴン吉さんの家に忍びこみ、凶行におよんだというわけか？」

おいどんの問いにベンベンはうなずいた。

ただ、そのことは、婚約者のリンリンにだけは打ち明けたという。そして、リンリンにアリバイの偽証(ぎしょう)を頼んだのである。帰りにカヌーを使って時間を短縮したのも、おいどんの推理どおりだった。このときは、あまり「北の竹林」の近くにカヌーを止めるとあやしまれるので、少し離れた森の中に置いたということだった。そのあとベンベンは、もっぱら妨害工作に専念したという。

「おれがいちばんおそれたのは、匂(にお)いから犯行がばれないかということだった」

と、ベンベンはいった。

「それで、オレの鼻を効かなくするため、あの湿布薬をよこしたんだな」

「そうだ。とにかく、あんたたちが『北の竹林』にたどり着く前に、湿布薬を塗らせなければならないと思った。そこでおれは、最初、川沿いの道を歩いていって待ち伏せしようと思ったんだが、いつまでたっても、あんたたちはこなかった」

ベンベンにすれば、最短のルートで、おいどんたちが「北の竹林」にくるものと思っていたのである。それは当然のことだろう。しかし、おいどんたちは迷いに迷って、まったく逆の方向から「北の竹林」に向かっていた。それがベンベンの読みを狂わせていたとは皮肉なものだった。

「そこでおれは方針を変えて、『魔の山』方面を警戒することにしたんだ。すると案の定、あんたたちと会うことができたってわけさ。そして、すかさず湿布薬を渡したんだ」

「しかし、オレがあそこでケガをするなんてことは、きみには予測できなかったはずだが」

「ケガをしていなかったら、させればいい。そのくらいのことは考えていたさ。あんたたちの行程さえわかれば、途中に罠をしかけることだって不可能じゃないからね」

「すると、あのとききみは幸運だったのかな。罠をかけずにすんだばかりか、オレのケガを治してくれさえした」

「そうだな。罪を重ねるどころか、ひとだすけをしてしまったわけだから」

「そのあとできみは、オレたちをわざわざ『北の竹林』に案内してくれたね。あれはどういう意味があったんだ？　犯人のきみにとっては、むしろ、オレたちを『北の竹林』に近づけないようにするほうが得策だと思うけどね」

「あんたたちはあそこまできていたんだ。いくら邪魔をしても『北の竹林』にはたどり着いただろう。それならば、こっちからふところに引きこんでしまったほうがいいと思ったのさ。すでに湿布薬は塗ってあったから匂いを嗅がれる心配はないし、あんたたちの捜査がどれくらい進んでいるか、知りたくもあったしね」

「最初に会ったとき、きみは金色パンダのことを語りたがらなかったね。ところが、『北の竹林』についてからは、ホェンホェンにそのことを話すよう勧めていた。あれは、どういう心境の変化なんだ？」

「おれは、三年前の事件については、あんたたちに知られてもかまわないと思っていた。しかし、ホェンホェンは、ずっとあのことをかくしたがっていたんだ。だから、ホェンホェンの了解をとるまでは、話すわけにはいかなかったのさ」

「なるほど……」

尋問を続けているうち、おいどんは不思議なことに、ベンベンに好意をいだき始めていた。

この男は、本当はとても心のやさしい持ち主なのではないだろうか。犯罪者にはちがいないが、表面的に悪党ぶっているだけなのだ。

おいどんは質問を続けた。

「では、オレたちにわざわざ泊まっていけといったのは？　あのときもずいぶん、親切な男だと思ったけどな」

「それはありがたいね。だが、本心はその逆だ。おれはあんたたちを足止めさせたかっただけだからな。あの日、あんたは『草原の村』に戻って、匂いを嗅ぎ直してくる決心をした。おれとしては、それを阻止するための準備もあったし、日暮れのあの時間からあんたたちを尾行するのもいやだったからね」

「それで、オレたちの出発を翌日に延ばさせたわけか」

「そうだ。翌日——つまり昨日だな。おれは、あんたたちが出発するとすぐにあとを追った。そして、あんたたちが『西の湖』にいるのを見届けて、崖の上から岩を落としたってわけだ」

「あの事件については、オレも恨んでいるよ。それまでは、ずいぶんと親切にしてもらったけどね。で、そのあとはどうしたんだ？」

「あんたたちが湖から浮かび上がったのは見てたからね、一刻も早く『草原の村』にいかなくちゃいけないと思ったんだ。ところが行動は夜にならなければ起こせない。いくらキタキツネの家が村はずれにあるといっても、昼間じゃひとめもあるからね。裏の森にずっとかくれていたよ。もっともそのあいだ、いつあんたたちが現れるか、びくびくしてたんだぜ。昼

間のうちにあんたが戻ってきて、現場の匂いを嗅がれては元も子もないからね」
「そのときはどうするつもりだったんだ？」
「その場合はしかたがない。昼間でも行動を起こすしかなかっただろうね」
「その行動っていうのは、放火することか？」
「そうだ。匂いを消すのには、火で燃やしてしまうのがいちばんいい」
「なるほどね。しかし、それも不成功に終わったわけだ」
「そう。あのウサギのおかげでね。せっかく夜まで待って、火をつけたというのに、あそこで消されてしまったんだから、おれも腹が立ったよ。うっかり、あのウサギを殺してしまうところだった」
「で、そこにリンリンが現れたというわけだ」
「ああ。リンリンの声を聞いて、おれは我にかえった。リンリンには感謝しているよ。よけいな殺人を犯さずにすんだからな」
「それで全部だね」
「ああ」
「わかった。ただひとつだけ聞きたいことがあるんだ」
「なんだ？」
「『魔の山』で初めて出会ったとき、なぜきみはココンを助けたんだ？　オレの仲間がひと

りでも減れば、きみには好都合だったろうに」

「さあ、なぜだろうね。自分でもわからないんだ。ただ、とっさに手が出ていた。それだけしかいえないね」

ベンベンは、口元にうっすらとさみしげな笑みを浮かべながらいった。

「そうか……。きみも根っからの悪いやつではなさそうだな。ただ、金色パンダに変装したときだけ、凶悪犯になるようだ」

そういって、おいどんは取り調べ室を出た。

これで事件も終わりだ。

そう思って、壁に寄りかかって目を閉じた。

が、おいどんに安らぎは、ほんのわずかしか与えられなかった。

玄関のドアが激しくたたかれたのである。

「おいどん、おいどん、おいどん！」

ドアを開けると、ピンキーが立っていた。

「やあ、ピンキーか」

「やあ、じゃないわよ、おいどん。大変なんだから！」

「もうピンキーの大変は聞きあきたよ。いったいなにがあったんだい？」

「リンリンが自殺したのよ！」

「なにっ！　それは本当か？」

リンリンが自殺した。
それはいったいどういうことなのだろう？
思ってもみなかった展開に、おいどんは動揺した。
「さっき、『草原の村』の旅館で、リンリンが手首を切って死んでいるのが発見されたわ。これが遺書よ」
ピンキーは一通の封書をおいどんに差し出した。
封書は、おいどん宛になっていた。
「これは……」
遺書に目を通したおいどんの顔色が変わった。
それには、次のようにしたためられていたのである。
「キタキツネのゴン吉さんを殺したのはわたしです。ベンベンではありません。
ベンベンは、わたしをかばっているだけです。金色パンダに変装して、ゴン吉さんの家に放火しようとしたのも、わたしの匂いを消すためなのです。

ベンベンに罪はありません。釈放してあげてください。
悪いのはわたしです。わたしは死をもって罪を償おうと思います。
リンリン」

「これは、いったいどういうことなんだ……」
おいどんは、ボーゼンとした表情のまま取り調べ室に戻った。
ベンベンは、まだそこにいた。
「ベンベン……」
おいどんはいった。
「リンリンが自殺したよ……」
「！」
ベンベンは目を見開いたまま、動かなくなった。
無言のままおいどんは、遺書をベンベンの前の机に投げ出した。
ベンベンは、おずおずと遺書を開いて読み始めた。
やがて、机につっぷして肩をふるわせ始めた……。
「ベンベン、本当のことを話してもらいたい」

ベンベンの心が落ち着いてきたのをみはからって、おいどんはいった。

さっき聞いたベンベンの供述は、いまではなんの意味もなくなってしまった。おいどんは、真実を知りたかった。

「わかった……」

ベンベンは先ほどとはちがって、悲しみに満ちた表情で話し始めた。

「本当のことを話そう。いままでおれたちは、双子のパンダのうち、殺されたルンルンが金色パンダだといってきた。しかし、それは逆だったんだ」

「な、なんだって！」

おいどんは思わず大声を上げた。

「では、本当はリンリンが金色パンダだったというのか？」

「ああ……」

おいどんの頭の中で、考えがめまぐるしく入り乱れた。ルンルンが金色パンダではなく、リンリンが金色パンダだった。だとすると、いままでの推理は前提からくつがえされることになるではないか。

「三年半前、『北の竹林』にやってきて騒がれた金色パンダは、じつはリンリンだったんだ」

と、ベンベンは話し始めた。

「しかし、双子で顔かたちがそっくりだったリンリンとルンルンは、ときどきふざけて、入

れ替わって出歩くことがあったんだ。ルンルンがゴン吉に殺されたのも、そんなときだった」

「では、ゴン吉が殺したのは、金色パンダではなかったと……」

「そうだ。あれは、金色パンダに変装したルンルンだったんだ。だが、ホェンホェンがいっていたように、おれたちパンダ、とくに金色パンダはほかの動物たちから妬まれていた。もしも、ルンルンが殺されたあとで、本物の金色パンダ、つまりリンリンがのこのこと歩き回っていたら、ふたたび何者かに狙われるかもしれない。それをおそれたホェンホェンは、殺されたのはあくまでも金色パンダということにして、リンリンには普通の白黒パンダの姿をするよう命じたんだ」

「それ以来、ずっとリンリンは？」

「ああ。毎朝、全身に白と黒の毛染め薬を塗って、金色パンダであることをかくしとおしてきた」

「そうだったのか……。では、ゴン吉さんを殺したときは、本来の姿に戻っていたというわけだな」

「そうだ」

「事件のことをくわしく話してくれないか」

「ああ……」

ベンベンは静かにうなずいてから、ゴン吉殺害事件の真相を話し始めた。

「リンリンとルンルンは、本当に仲のいい姉妹だった。ルンルンが殺されたとき、リンリンは心底悲しんだものだ。彼女にしてみれば、ルンルンは自分の身代わりになって殺されたという思いもあっただろう。彼女は一日も早く犯人が逮捕されることを願った。それが、ルンルンに対するせめてもの供養だったからだ。

しかし、事件は迷宮入りとなり、ルンルンを殺した犯人は、結局、見つからなかった。

そのとき、リンリンは決心したのだ。犯人を自分の手で見つけだしてみせると。

リンリンは、その決心をおれに打ち明けてくれた。おれには、彼女の思いが痛いほどよくわかった。おれは、犯人探しに協力することを彼女に誓った。

おれが、旅芸人という職業を利用して、情報収集に務めたのは、さっきもいったとおりだ。

その結果、『草原の村』に住む、キタキツネのゴン吉という男が、ルンルン殺しの犯人だということが、ほぼはっきりした。半年前のことだ。

だが、おれたちはべつに、ゴン吉に復讐しようなどと考えていたわけではない。彼が自分の罪を認め、自首してくれれば、それでよかったのだ。

そこでおれたちは金色パンダの署名で、おまえが犯人だ、という意味の脅迫状を、ゴン吉に書いて送った。自分の殺した金色パンダの亡霊から脅迫状を受け取れば、彼もおびえて自首するだろうと思ったのだ。

しかし、いつまで待っても、なにも起こらなかった。ゴン吉が自首して出たという話も聞

かない。おれたちはしだいにいらだってきた。
しかたなく、おれたちは、第二の手段を考えた。
手紙でだめなら、直接ゴン吉に会うしかない、というのが、ふたりの達した結論だった。
リンリンが本来の金色パンダの姿に戻ってゴン吉の家へおもむき、恐怖心(きょうふ)を与えたうえで、自首を迫る。そこまですれば、いくらゴン吉でも自分の罪を認めるだろうと、おれたちは考えた。
その計画では、おれも同行して、ゴン吉の反応を見る予定だった。しかしリンリンは、おれになんの相談もなく、ひとりで計画を実行に移してしまったのだ。
それが五日前の夜の出来事だ。彼女が、おれに相談せず、ひとりでことを起こしたのは、あの日が初めてだった。
彼女は、よほど思いつめていたのだろう。おれに迷惑をかけたくなかったのかもしれない。
いずれにせよ彼女は、夜の九時過ぎ、ひとりで『北の竹林』を出た。おれがそのことに気づいたのは、十時を回ったころだった。彼女の姿が、どこにも見当たらないのに気づいたおれは、あわてて『草原の村』に向かった。庭に、白と黒の毛染め薬を流した跡(あと)が残っていたので彼女がなにをしようとしているかは明らかだった。
しかし、『草原の村』の近くで、おれが彼女と出会ったときは、もう手遅れだった。
彼女は、ゴン吉を殺したあとだったのだ。

だが、これだけは彼女の名誉のためにいっておくが、彼女は決して、故意にゴン吉を殺したのではない。

彼女が、金色パンダに戻り、ゴン吉の家の窓を割って、中に侵入したのは事実だ。しかしそれも、ゴン吉をおびえさせる効果を考えてのことで、べつに襲おうという意図があってやったことではない。彼女の目的はあくまでも、ゴン吉に罪を認めさせることだったのだ。

だが、部屋に入ってきたリンリンを見て、ゴン吉は完全に逆上してしまったそうだ。リンリンがいくら説得しようとしてもそれどころではなかった。あげくのはてにゴン吉は、登山ナイフを取り出し、逆にリンリンに襲いかかってきたというのだ。

ふたりはもみあいになり、気がつくと、ゴン吉の胸にナイフが突き刺さっていた。驚いたリンリンはあわてて家を飛び出し、そのまま『草原の村』から逃げてきたということだった。

リンリンから話を聞いたおれは、彼女を『北の竹林』へ連れ帰った。途中、川にカヌーが浮かんでいたので利用させてもらった。そして、あの夜は、リンリンは一時までおれと一緒に星を見ていたことにしてアリバイをつくり上げたのだ。

その後のおれの行動についてはさっき話したとおりだ。

ただ、ひとつだけ気がかりだったのは、リンリンが、ゴン吉の家を出て、裏の森に逃げこむとき、後ろからだれかに声をかけられたような気がするといっていたことだ。

もし、金色パンダがだれかに目撃されたとすれば、捜査をまどわす必要があった。いざと

いうときには、リンリンの身代わりになろうと決めていたおれは、金色パンダに変装して、あんたたちを妨害した。あの夜、もしも最初からおれが一緒についていっていれば、リンリンがゴン吉を殺すことはなかっただろう。それを思うと、おれはリンリンをかばわざるをえなかったのだ」

ベンベンの長い話を聞いて、おいどんにはようやく本当のことがわかった。

だが、まだひとつだけ気になる点が残っていた。

「ベンベン、きみは、リンリンがゴン吉さんを刺したあと、まっすぐ逃げてきたといったね。リンリンは、もういちど書斎に戻ったとはいっていなかっただろうか？」

「いや。そんなことはいっていなかった。ゴン吉の胸にナイフが刺さったのを見たリンリンは、そのまま一目散に逃げてきたといっていたよ」

では、あのダイイングメッセージはだれが燃やしたのだろうか？

おいどんは考えた。

ふと、おいどんの胸に疑問が浮かび上がった。

「ベンベン、もうひとつだけ聞きたい。きみたちがゴン吉さんに送った脅迫状は、どんな文面だったんだ？」

「確か、『おまえが犯人だ。素直に自首をしろ。金色パンダより』と、書いたと思うが……」

そうだったのか……。

おいどんは、いま初めてわかった。あの燃えかすは、ダイイングメッセージではなかったのだ。あれは、リンリンとベンベンが送った、ゴン吉に対する脅迫状だったのである。

おそらくゴン吉は、死の間際、みずからの手で脅迫状を燃やしたのだろう。

なぜか？

たぶん、刺されたあとになって、ゴン吉もまた、金色パンダの本当の気持ちを知ったからではないのか。金色パンダは、自分に復讐しにきたのではない。自首を勧めにやってきただけなのだ。それがわかったから、ゴン吉は、証拠となるような脅迫状を燃やした。

自分の罪を認めるとともに、自分をあやまって刺してしまった犯人を罪におとしいれたくはなかったのだ。それが、ゴン吉の、金色パンダに対する最後の罪滅ぼしだったにちがいない。

家の外が騒がしくなってきていた。

取り調べ室を出て、廊下の窓を開けると、たくさんの動物たちが家のまわりに集まっているのが見えた。タヌキ、カモシカ、アライグマ、ミミズク、イノシシ……。この村に住むほとんどの動物がそこにいた。ピンキー、ペルー、ギョロ、それに、ココンやユキの顔も見える。

そして、その先頭に、老コアラのアランが立っていた。
「コアラのおっさん、いつ、この村へ？」
「今朝(けさ)がたな」
「それにしても、この騒ぎは？」
おいどんが不思議そうに動物たちを見回すと、コアラはいった。
「みんな、悲しいのよ」
「え？」
「リンリンが死んだそうだな？」
「ええ……」
「それが悲しいんだ」
「わかります」
「おめえに会わせたいひとがいる」
コアラはそういうと、群衆の中から一匹の動物を連れ出してきた。
リンリンの父親ホェンホェンだった。
「ホェンホェンさん……」
見るからにやつれた老パンダを前にして、おいどんは言葉を失った。ルンルンに続いてリンリンまで亡くした父親に向かってなんと声をかけていいのかわからなかった。

「おいどんさん」
話のきっかけをつくったのはホェンホェンのほうだった。
「リンリンが死んだのは、わしのせいかもしれんの」
「え？」
「リンリンに、金色パンダであることをかくすよう命じたのはわしじゃ。いま思うと、いつわりの生活を続けなければならなかったリンリンは、さぞかしつらかったじゃろう、と思ってな。そのつらさが、あの娘を、ルンルンのかたき討ちにかきたてたんじゃないかと思えてならんのじゃよ」
「ホェンホェンさん、あなたはもしかして、リンリンさんがゴン吉さんを殺したことを知っていたんじゃ……」
おいどんは聞いてみたが、ホェンホェンは首を横に振った。
「いや、わしは、そんなことはまるで知らなかったよ。あなたから金色パンダの亡霊が現れたと聞いたときには、もしやと思ったが、わしにはリンリンがそんなことをするとはどうしても信じられなかった。いや、リンリンに限ってそんなことをするはずがないと思いこみたかったのじゃ。それだけ、娘の気持ちがわからなかったということじゃがな……。ただ……」
「ただ？」

「リンリンは死んで、ようやくもとの金色パンダに戻ることができたんじゃや。それがせめてものなぐさめじゃよ……」
ホェンホェンは目頭を押さえてうつむいた。
「そうですね……」
おいどんはそっとホェンホェンの肩に手をかけた。いまのホェンホェンには、そうしてやるより、おいどんには方法がなかった。
だが、そんなホェンホェンにあくまでも痛烈な言葉をかける男がひとりだけいた。
「それはちがうぜ、じいさん」
コアラだった。
「なあ、じいさんよ。リンリンは死ななきゃ解放されることはなかったんだろうか。それじゃあまりにも悲しすぎやしないかい。自分本来の姿で堂々と生きる。それが本当の生き方じゃやねえのか？」
「それは……」
コアラの追及にホェンホェンは言葉を詰まらせた。
たまらずおいどんがフォローに入った。
「コアラのおっさん。あなたのいうことは確かにそのとおりかもしれない。しかし、いまのホェンホェンさんに向かっていうのは、あまりにも酷じゃありませんか」

だがコアラは、ひこうとはしなかった。

「おいどんよ。おれはホェンホェンのじいさんを責めてるわけじゃねえんだ。おれがいいたいのは、こんな事件は二度と起こしちゃいけねえってことよ」

「それはそうですけど」

「おいどん、おめえにはわかるか？　なんで今回の事件が起きたのか。今回の事件の本当の原因はどこにあったのかが。それがわからねえ限り、事件を解決したことにはならねえんだよ」

コアラは、おいどんの顔を真正面から見すえながらいった。

その目には、不思議な吸引力があった。

そうだ。このコアラは、森で出会ったときからこの目で、ずっとなにかをおいどんに問い続けてきたのだ。

いままでおいどんには、コアラがなにをいいたいのかつかめなかった。

それをいまこそ明らかにさせなければならないと、おいどんは思った。

「コアラのおっさん。その原因というのをオレに教えてください」

それを聞くと、コアラはふっと小さな笑いをもらした。

「では聞くが、リンリンはなぜ死んだ？」

「それは、自分の罪を悔いて……」

「確かにそうだ。リンリンは罪を犯した。だが、おめえは、この事件でいちばんの悪人はリンリンだったと思うか？」
「いや、それは……」
「そうだろう？　本当に悪いのはリンリンじゃねえ。むしろリンリンは犠牲者だ」
「ええ」
「では、本当に悪いのはだれなんだ？」
「それは……」
「三年前、ルンルンを殺したゴン吉か？」
「……」
「それとも、ゴン吉を捕まえずにいた、このおれか？」
「……」
「おめえは、おれがなぜ、ゴン吉を捕まえなかったのかわかるか？」
「いや……」
「それはな、ゴン吉もまた、哀れな犠牲者だったからよ」
「犠牲者……」
「そうよ。ゴン吉だって、好きでルンルンを殺したわけじゃねえんだ。そうだろう？」
「しかし、ゴン吉は、金色パンダの人気を妬んで……」

「確かにそのとおりだ。だがな。その人気っていうのは、いったいなんなんだ？　人気があればえらいのか？　人気があればいい暮らしができるのか？　人気があれば、ほかのやつらから妬まれてもしかたがないのか？　そもそも人気を決めているのはだれなんだ？」

「……」

「いいか、この事件で本当に悪いのは、リンリンでもねえし、ゴン占でもねえ。ましてや、ベンベンでもねえ。このピースランドそのものよ！」

コアラはさけんだ。

「人間がつくった、この広大なサファリパークなんだ！」

おいどんはなにもいわなかった。

ただ、耳にコアラの悲痛なさけびが聞こえてくる。

「ここは、大きなオリに囲まれた動物園なんだ。おれたちをオリに閉じこめているのは、人間たちよ。やつらは、ときどきやってきては、おもしろそうにおれたちを見物していく。そして、勝手に人気をつけて喜んでいるんだ」

「……」

「この世界でなによりも大切なのは、人間からの人気だ。人間に人気があれば、いい住まい

も与えられるし、みんなからちやほやされる。しかし、そうではない動物は、片隅の小さな家に追いやられ、みんなからも冷たくされるんだ」
「……」
「もういちど聞く。なぜ、ゴン吉はルンルンを殺した？」
「それは、金色パンダの人気を妬んで……」
「そう。それがすべての原因だった。ゴン吉たちキタキツネだって、かつては人気者だったんだ。それがどうだ、パンダがやってきたとたんに流行遅れじゃねえか。おれは、キタキツネの凋落ぶりを見て、すっかりこの世界に嫌気がさしたよ。だからおれは仲間から離れて、あんな小屋に住むようになったんだ。自慢じゃねえが、おれたちコアラだって、人間には人気がある。だけど、その人気だって、いつまでもつか、わからないんだ。明日にでも、なにか珍しい動物がくれば、人間の人気はそっちに集まり、おれたちはそっぽを向かれちまうかもしれねえ。そうじゃないか？」
「人間たちは、気まぐれですからね……」
おいどんはかすれた声でいった。
「なぜだ？」
コアラはさけぶ。
「なぜ、そんな気まぐれを気にして生きなきゃならない？　自然のままに生きて、子供を育

て、そして死んでいく……。それでいいじゃないか。自然のままに生きていたら、ルンルンも、ゴン吉も、リンリンも死ぬことはなかったんだ。リンリンは金色パンダとして、堂々と生きていくことができたんだ。そうじゃないのか？　おれたちだけじゃない。このピースランドにいる動物全員が犠牲者なんだ！」

「そうだよ。あたしたちは人間のおもちゃじゃないんだ！」

群れの中からペルーがさけんだ。

「そうよ、わたしたちは自由に生きたいの！」

「管理された生活なんてたくさんだ！」

「ぼくたちを自然に返せ！」

ピンキーが、ギョロが、ココンがさけぶ。

そんな動物たちを見て、コアラが手を上げた。

「おれはいまこそさけぶぞ。ここは、平和な国なんかじゃない！」

コアラのさけびにしたがって、全員が声を上げた。

「ここは、平和な国なんかじゃない！」

「おれたちは、ありのままの姿で生きたいんだ！」

「おれたちは、ありのままの姿で生きたいんだ！」

「おれたちを自然に返せ！」

「おれたちを自然に返せ！」

いまこそ動物たちは、心の底から本当の気持ちをさけんでいた。それが人間に対する、かれらのせめてもの抵抗だった。

かれらのさけび声は大合唱となって大空に響きわたり、ピースランド全域にこだまする。

やがて、「草原の村」だけでなく、「迷いの森」にも「魔の山」にも「西の湖」にも動物たちのさけびがわき上がる。

人気の有無にかかわらず、ピースランドに住むすべての動物たちが同じ思いだった。

「いまこそさけぼう！　おれたちを自然に返せ！……」

動物たちの心のさけびはさらに広がり、いつまでも、はてることなく続いていった……。

動物たちの叫びが続くなか
人間たちを乗せた
バスがやってきた。

………
どうしたの？ほら、ミオちゃんの好きなキリンさんがいるわよ！
ねえ、おかあさん動物さんたち、なぜあんなにほえてんの？
さあねぇ。みんなで仲よくお歌をうたってるのかもね。
ミオちゃんが遊びにきてよろこんでんだ。
ちがうもん！ボク、ヒロ君がきたから、よろこんでんだよ！

バイバイ!!
またくるね〜〜〜!!
バスはゆっくりと走り過ぎていく……

あとがき

うーむ、困った……。あとがきというのがニガ手である。何を書いていいのかわからない。
こんなとき、若い女流作家なら、
「ハーイ、はじめまして！　わたしの作品、読んでくれた？」
一応、パソコンゲームのノヴェライゼーションなんだけど、オリジナルとはストーリーもキャラ設定も変えてあるから、ゲームをやったことのある人にもない人にも、それなりに楽しんでもらえるんじゃないかな。なんて、作者としては思ってまーす。
それにしても、動物の世界を舞台にした推理小説というのはむずかしい。だって、動物の世界には、人間の世界とは違ったルールがあるでしょ。そこをちゃんと説明しておかないと、推理小説のフェアプレー精神に反することになっちゃうもんね。苦労したんだから。
それはさておき、みなさんからのお手紙まってまーす。とくに、ラストでの読者へ対するメッセージ、どう受け取ってもらえたか、意見を聞かせてほしいなア。それじゃあね♡」
なんて書けるんだけど、おれにはそんなこと、とても恥ずかしくて書けやしない。
あっ、そんなこと書いているうちにページがつきてきた。うん、これでいいや。
最後に、本書の執筆にあたって多大なアドバイスをいただいた、エニックスの保坂嘉弘さん、工藤美恵さん、ワークハウスの折茂賢司さん、苅部明子さんに心から感謝します。

エニックス文庫

野村宏平（のむらこうへい）

1957年8月4日、東京都生まれ。獅子座。血液型はA型。早稲田大学中退。大学時代はワセダミステリクラブに在籍し、ミステリー研究のほか、怪獣映画を自主製作する。その後、フリーライターをへて、1986年、企画・編集プロダクション、月光舎を創設。現在は、雑誌の記事、コミックの原作などを手がけている。趣味は、ミステリー&プロレス鑑賞。

ピースランド殺人事件
——動物からの贈り物——

1989年9月8日　初版発行

著　者　野　村　宏　平

●　●　●

発行人　福　島　康　博
販売所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7－5－25
西新宿木村屋ビル5F
☎03(369)8982(代)
印刷所　共同印刷株式会社
乱丁・落丁本はお取り替え致します
定価はカバーに表示してあります

ISBN4-900527-12-2

ISBN4-900527-12-2 C0176 P430E 定価430円
（本体価格417円・税13円）

ノベル
ピースランド殺人事件
野村宏平
エニックス文庫
EB7
P 430

ENIX ORIGINAL NOVELS

ピースランド殺人事件

——動物からの贈り物——

野村宏平

エニックス文庫

ノベル

ピースランド殺人事件

野村宏平

エニックス文庫

EB7

P430

ここは、平和で静かな動物たちの楽園、その名もピースランド。

ある日、村一番の富豪、キタキツネのゴン吉が何者かによって殺された。彼の死にかくされた真相とは何か。そして、被害者の息子が見た、金色パンダの正体とは……。

謎が謎を呼び、物語は意外な方向へ展開し始める。真相の究明をめぐり、動物たちが繰り広げる珍騒動の数々……。軽妙な笑いとペーソスにあふれたシニカル・ミステリー。

イラスト・いなもといくえ

ISBN4-900527-12-2 C0176 P430E 定価430円
(本体価格417円・税13円)